東京理科大学理工学部建築学科設計作品集 2016

Design Work of the Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

UNGA BOOK

2016

UNGA BOOK 2016 東京理科大学理工学部建築学科設計作品集 2016

UNGA BOOK 2016

東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2016

Design Work of the Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

対談
Dialogue

004 建築を学ぶ心構え
山名善之×垣野義典
Interview: Yoshiyuki Yamana × Yoshinori Kakino

講評審査会
Design Thesis Review Committee

008 2016年度修士設計講評審査会
2016 MArch Design Thesis Review Committee

020 2016年度卒業設計講評審査会
2016 BArch Design Thesis Review Committee

教員紹介

034 教授・准教授・助教
1～3年生担当 非常勤講師
062 4年生　ユニットマスター
069 修士1年生　ユニットマスター

追悼
Obituary

032 言葉の先にある未来
——恩師小嶋一浩先生のこと
光本直人
Naoto Mitsumoto

UNGA BOOK 2016
東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2016
Design Work of the Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

目次／Contents

設計作品
Design Work by Students

036 1年生 1st Year［空間デザインおよび演習 Ⅰ＆Ⅱ］
光の箱
Light Box
ピクニック
Picnic
あなたの部屋を空間化せよ
Transform Your Room into Space!

040 2年生 2nd Year［設計製図 Ⅰ＆Ⅱ］
週末住宅＝もうひとつのイエ
Weekend House
多文化シェアハウス
Multicultural Shared House
小規模ギャラリー
A Small Gallery
表参道ライブラリー
Omotesando Library

048 3年生 3rd Year［設計製図 Ⅲ］
自分の通った小学校の現代化プロジェクト
Project to Modernize Your Own Grade School
南青山culture connection
Minami Aoyama Culture Connection

052 3年生 3rd Year［設計演習］
伊藤香織＋バージェス・アンドリュー ユニット
Kaori Ito & Andrew Burgess Unit
SECTION!: 都市の1km断面
SECTION! 1 Kilometer Section of the City
岩岡竜夫＋柄沢祐輔ユニット
Tatsuo Iwaoka & Yuusuke Karasawa Unit
宇宙建築＝UZUMARCH
Extraterrestrial Architecture = UZUMARCH
都市のパブリックスペース
Urban Public Space
垣野義典＋廣瀬大祐ユニット
Yoshinori Kakino & Daisuke Hirose Unit
東京ゲストハウス
Tokyo Guest House
震災復興公園 ±1
Disaster Recover Park ±1
安原 幹＋有井淳生ユニット
Motoki Yasuhara & Atsuo Arii Unit
1万平米の建築
10,000 m² Architecture
地方都市のパブリックスペースとしての建築
Architecture as Public Space in a Provincial City
山名善之＋有岡三恵＋萬代泰博ユニット
Yoshiyuki Yamana, Mie Arioka & Yasuhiro Mandai Unit
坂倉準三設計による旧・神奈川県立近代美術館
本館の改修・増築計画
Renovation and Expansion of the Former Main Hall of the Museum of Modern Art, Kamakura by Junzo Sakakura

062 4年生 4th Year［建築設計・都市設計 Ⅰ＆Ⅱ］
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
オフィスビル
Office Building
長田直之ユニット Naoyuki Nagata Unit
New Farm New Form
New Farm New Form
駒田剛司ユニット Takeshi Komada Unit
縮退都市における集合住宅
Collective Housing in the Shrinking City
伊藤香織ユニット Kaori Ito Unit
都市見
City Viewing
嶋田洋平ユニット Yohei Shimada Unit
「社会の課題」をみつけ「事業」で解決する、
「課題」をみつけ「生き方」で解決する
Discover Social Challenges and Propose a Commercial Project to Solve Them
Discover Challenges and Solve Them Through Life Styles
西田司ユニット Ondesign Unit
○○の居場所。カルチュラル・スタディーズ2016
A Place in the City – Cultural Studies 2016

069 修士1年生 Master's 1st Year［建築設計実習 A＆B］
近藤哲雄ユニット Tetsuo Kondo Unit
ぎりぎりの建築
At the Limits of Architecture
末光弘和ユニット Hirokazu Suemitsu Unit
「環境がデザインする形」
——環境シミュレーションを使った設計プロセス
Forms Designed by the Environment
– Design Process Using Environmental Simulations
岩岡竜夫ユニット Tatsuo Iwaoka Unit
〈外景〉としての都市住宅—建築と街並みの関係を再考する
Urban Houses as Exterior Appearance
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit
都市に応答する建築
Architecture that Responds to Cities
山代悟ユニット Satoru Yamashiro Unit
D.I.Y. urbanism:
都市と里山を結ぶ2地域居住を豊かにするための設え
D.I.Y. urbanism: Enriching a Dual Lifestyle Between City and Satoyama

研究室紹介
Laboratories

082 岩岡竜夫研究室［建築計画・意匠・設計］
Iwaoka Lab., Architectural Planning and Design
山名善之研究室［建築意匠・建築史］
Yamana Lab., Architectural Design and History
安原幹研究室［建築設計］
Yasuhara Lab., Architectural Design
垣野義典研究室［建築計画］
Kakino Lab., Architectural Planning
伊藤香織研究室［都市計画］
Ito Lab., Urban Planning
吉澤望研究室［建築光環境・照明環境］
Yoshizawa Lab., Building Enviromental Engineering
井上隆研究室［建築環境・設備］
Inoue Lab., Building Enviromental Engineering and Facilities
永野正行研究室［構造力学・地震工学］
Nagano Lab., Earthquake Engineering
北村春幸研究室［建築構造・材料］
Kitamura Lab., Structural Design
衣笠秀行研究室［建築構造］
Kinugasa Lab., Structural Engineering
大宮喜文研究室［建築防災・安全］
Ohmiya Lab., Building Safety Engineering
兼松学研究室［建築構造・材料］
Kanematsu Lab., Building Material Engineering

トピックス
Topics

075 01 〈運河〉から〈海外〉へ
岩岡竜夫
02 防災リスク管理コース始動
大宮喜文
03 新任教員紹介
片桐悠自

078 学生デザインコンペティション入賞者一覧
（2016.4-2017.3）

対談 DIALOGUE

建築を学ぶ心構え

山名善之（教授） × 垣野義典（准教授）

やまな・よしゆき Yoshiyuki Yamana
1966年神奈川県生まれ／1990年東京理科大学工学部第一部建築学科卒業 ／国立パリ・ベルヴィル建築大学 建築学研究科 建築学上級過程DPLG（Architecte diplômé par le gouvernement）修士課程修了／2002年パリ第1大学パンテオン・ソルボンヌ校ソルボンヌ美術史考古学研究所近現代建築史博士課程修了／フランス国立ナント建築大学契約講師を経て、東京理科大学工学部第二部建築で教鞭を執る／2014年～理工学部建築学科准教授、2017年～同教授

かきの・よしのり Yoshinori Kakino
1975年京都府生まれ／1999年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2004年東京大学工学系研究科建築学博士課程修了／東京理科大学理工学部建築学科助教を経て、2008～2011年フィンランド・アアルト大学研究生、客員研究員／2011～2016年豊橋技術科学大学建築・都市システム学系准教授、2016年～東京理科大学理工学部建築学科准教授

社会資本あるいは文化としての建築

垣野　山名先生はフランスで修士・博士を取得し、その後ナント建築大学で教鞭をとられています。私自身もフィンランドやオランダに滞在して研究活動をする中で、日本とヨーロッパでは建築教育のあり方が違うと感じました。そこで、現在の理科大理工学部の建築学科の教育について、今度どのような課題があるのか意見を交わしたいと思います。

山名　1967年に理工学部建築学科が野田に創設されました。戦後、日本は世界の歴史の中でも特殊な高度成長期を迎えます。その建設ラッシュの1960年代、建設のエンジニア教育を前提とした建築学科が全国の大学に誕生します。そうした背景のもとスタートして以降、基本的に建築界も建築教育も変わっていないというのが私の捉え方です。

さらに遡ると明治以降、日本は近代国家をつくる中で、国家とともに都市が発展することを前提とし、建築産業はその中で成熟してきた。日本経済の中で建設業が占める割合は、成長期に比べると少なくはなったけれど、いまだに建築は産業を支える生産行為かつ経済行為であるという位置づけです。でも、社会や都市が成熟し、時代のパラダイムが変わっている現代では、単なる生産行為としての建築は成り立たなくりますから、社会における建築の位置づけを問い直す必要があります。だから建築教育も変わっていかなくてはならないと思います。

垣野　近代化、そして戦後復興期は、国家を俯瞰した都市計画や建築のプロトタイプが生み出されました。私の恩師、初見学先生[*1]の師にあたる吉武泰水先生、鈴木成文先生が、nLDKという現代の集合住宅の礎となる51C[*2]という住戸プロトタイプをつくったり、建築計画学という日本独特の学問が確立したのも高度成長期でした。

山名　共同住宅、学校、病院、劇場など機能別の法律体系が確立していったのもその時代。そしていつしかその法律を変えることが難しくなり、制度が建築のあり方をしばるようになってしまった。だから建築のあり方について本質的な議論がしづらくなっているのが現在直面している問題だと思います。

垣野　私自身はここの建築学科出身で、自分の学生時代を振り返ると、着任したばかりの小嶋一浩さん[*3]が、設計教育を変えようとしていました。国家を俯瞰する視点とは違う、もう少し地に足をつけた個人個人の視点でものを考えて発言する人材をたくさん育てようとしていたと思います。もちろん、社会の要請をうけたエンジニア教育という大前提に立っていても、その既成の枠組みを超えていくような人材を育てたいと考えていらっしゃったのではないでしょうか。戦後復興が今の日本の建築教育の基礎になっているのだとすると、事情が異なるフランスの建築教育はどのようなものなのでしょうか。

山名　設計の教え方は基本的には同じです。でも、大きく違うのは、社会資本をつくるという意識が強いこと。社会資本としての建築をつくることで、社会自体をその都度見直していこうとする根本的な思想があります。日本では、いまだに、都市への人口集中が起こった時代のnLDK的なマンションをひたすらつくり続けているところに構造的な問題があると思います。

垣野　たしかに社会背景が違っているにも関わらず、経済を回すための商品として型がコピーされ続けています。それは社会資本にはなり得ないということですね。

山名　たとえば地方創生[*4]も、東京や首都圏と同じように、地方も経済効果を生み発展するという考え方です。どこにでも新幹線でいきましょうとか……。いまだに国土全体が均質に発展する願望を抱いていますが、1990年代にバブル経済が崩壊して、日本経済が低迷をはじめた30年くらいまえから地方のあり方が変わっているわけですから、地方の捉え方や枠組みを見直していかないといけない。

垣野　全国総合開発計画[*5]の時代とは違う考え方が必要だというのは同感です。国中をまんべんなく便利にしようとした結果、パッケージ化された大型ショッピングセンターに代表されるように、日本中どこにいっても同じような風景になってしまいました。でも本当の意味の地方創生は、それぞれの地域ごとに違いがあり、多様性があるということですよね。大型ショッピングセンター的なものに抵抗し、小さな粒から変えていこうとする胎動はあると感じます。とくに建築を学んだ若い人の中に地方のあり方を変えていこうと意識が高い人が増えているので、その動きに期待をしています。

山名　そうした実態があるのは確かです。ただ、それは総体的な動きになっていない。いまだに地方交付金を注入することで、地域社会を成り立たせる施策が横行していますから。

つまり、建築学科の出身者は、政治をどう変えていくのか、経済構造をどう変えていくのかという視野が狭いように思うのです。建築家、あるいは建築技術者として、自分の立っているところが日本の社会構造の中でどういう位置づけなのかをもっと認識したほうがいいと思います。たとえば、あるプロジェクトを成立させようとしたときに、どういう権限者がいて、どうすればそのプロジェクトに予算をつけることができるのか……とかね。

垣野　日本では建築学科は理工系に置かれていることが多く、教員自身もそこまで考えが及んでいないことがあるかもしれません。

山名　理系の技術者教育に立脚しているからだと思います。西洋では建築学部になっているので、自分の設計行為、建設行為が社会の中でどう位置づけられるのかということが、学生時代も問われ続けます。ですから建築教育も社会構造の変化に沿って変えることもある。たとえば、世の中の動きに合わせて、これからの10年のグランドデザインはこうなのだと描く。われわれは今それをやらないといけないと思います。

理科大は資質の高い人たちが入学してきますから、さらに視野を広げ、社会資本や文化としての建築のあり方を考えるようにしていきたいですよね。

先入観を打破するための設計製図の学び方

垣野　設計課題について具体的に考えてみたいと思います。1年生の空間デザインは、その空間に身を置いたときの感度を上げていく教育だと思います。私は、2年前期の設計製図１を担当していますが、空間デザインの流れを踏襲し、設計をすることで新しいこと、面白いことをどう発見できるか、個人として建築空間とどう向き合ってつくるかを重視し、課題設定をしています。

山名　１～２年次は建築という意味での初学者。この段階では、建築がいかに社会を変えるかまでを考えるのはまだ難しい。垣野先生がおっしゃるように、まずは面白さを感じ、興味をもって進んでいける状況をつくるのが肝要です。空間デザインは、建築を身体的に理解するためのものですよね。個人がある職能を得て活動の基盤をそこに置こうとしたときには、どんな仕事に就くとしてもやらなければならないことです。

ただ、それだけだと建築にならないから、2年生では、興味を維持しつつも、建築のつくられ方、あり方を学ぶ必要がある。柱と梁があるとか、基本的な建築言語を覚え始める段階です。

そのときに重要なのが自分の手で考えられるのかということ。手で描いて、自分の目で見て、どのスケッチがよいか自分で判断できるようになってほしい。教員の評価ではなく、何がよいかを自分で決められるスキルを身に着けると建築を見る目ができてくる。その目を養いつつ、さらに手を動かすことで、また新たな建築の見方が分かってくる。2～3年前期にかけてそういうことを心がけてほしいです。

垣野　建築に対するリテラシー（読み書き能力）を高めるということですね。どうすればそれが可能になるとお考えですか。

山名　まずは図面が描けること。模型よりも、図面のほうが抽象度が高いので、私は重視しています。きれいに描くことよりも、平面であれば、そこにどんな図式を表現したいのか、それが読み取れることが重要

＊1　はつみ・まなぶ：清水建設、東京大学助手を経て、1981 年 ~2013 年度在任。建築計画分野で、主に住居論・集合住宅・比較居住文化・環境心理などを研究。

＊2　51 C：1951 年に計画された公営住宅標準設計の型のひとつ。「食寝分離」「親と子の就寝分離」という当時の住宅の課題を約 35 m^2 という条件の中で DK と親の寝室、子の寝室を実現。東京大学建築学科の吉武泰水研究室の提案。

＊3　こじま・かずひろ：1994 ～ 2010 年度在任。追悼記事 32 頁。

＊4　地方創生：2014 年 9 月に発足した第二次安倍改造内閣がかかげる重点政策。

＊5　全国総合開発計画：1962 年、都市の過大化の防止と地域格差の是正などを課題とし策定された。以降、新全総、三全総、四全総、21 世紀の国土のグランドデザインに続く。

山名教授

垣野准教授

だと思います。

垣野　私の授業では、抽象化とは違う角度からアプローチしています。2017年度、2年前期の第1課題「『建築家である私』の家を設計する」では、最初に敷地の寸法を学生と一緒に中庭で測って、体験をしてもらいました。40m角という敷地の大きさを目の前にして、そこが森だったらどうか、開けていたらどうなのかを想像してもらう。つまり、1分の1の体感や感度から図面や模型として表現していくことを重視しています。抽象化する前の段階で、まずは体験をして空間をイメージできるようになって欲しい。

授業とは別立てですが、研究室では改装を学生達の手によって進めています。学生がコンセプトの構築、基本設計、1/30模型や1/1モックアップの作成を経て、施行もすべて学生達自身が行います。それだけでも面白い経験ですが、施工した後「自分達で使わなければならない」という大前提があるので、新しさ・面白さを備えながら、使い勝手が損なわれないバランスを養うのが目的です。これも1分の1の実践のひとつです。

山名　1分の1を目の前にすることから、それを紙の上で図面化する訓練を積み重ねて欲しいですね。デッサンを例に挙げると、3次元の石膏像を平面に描くときに、見え方や記述の原理を探していくわけです。創造行為において大切なのは、最初に自分の中でそれを把握し、抽象化し、それを組み替えていく。それがデザインするということだと思います。

垣野　さきほど「自分の手で考える」とおっしゃいましたが、今は初学者でもCADで図面を描く人がだんだんと増えています。建築にとって手描き図面はどのような意味を持ちうると思いますか。

山名　実務上、図面はどんどんCAD化され、BIM[*6]も発達しているので設計と現場とのコミュニケーションツールとしてデジタル化は進むと思います。

でも、基本的に図面は、やはり自分のために描くものです。つまり、建築や空間をどういうふうに捉えるのか、それを図式として書き留める。

垣野　設計製図1では、堀部安嗣さん設計の「屋久島の家」（木造）と安藤忠雄さん設計の「住吉の長屋」（RC造）の図面のトレースが課題になっています。細線や太線の意味、記号の意味などを把握して、相手に伝えるためのコミュニケーションツールとしての図面であることを意識するように学生に指導しています。

いっぽうで、山名先生がおっしゃる自分のための図面もすごく重要で、個人でしかつかみ取れない感覚や問合いで出来上がってくる味わい深いものがあります。

山名　初学者に言葉を教えるという意味で、トレース課題はいいと思います。図面も言葉も最終的にはコミュニケーションのためのものですが、言語化はまず自分が何を考えているかを確認するためにある。だから2年生くらいで、建築のボキャブラリーを豊かにして欲しい。

まずは言葉を覚えると文字が書けるようになる。文字を書くのに慣れると、文章の書き方がわかってくる。そこからいい文章を書けるようになるためには、いい文章をよまないといけない。小嶋一浩さんが「美味しいものを食べたことがない人は美味しいものはつくれない」とよくおっしゃっていました。「まずは好きなラーメン屋をもつことから始めなければならない」と（笑）。建築も同じですよね。

垣野　その比喩は分かりやすいですね。

ただ、「これが美味しいのだ！」という限定的な教育は違うと思っています。つまり教育に答えはないという前提で、まだ味がよく分からない初学者は、どうやって美味しさを学ぶとよいのでしょうか。

山名　まずは美味しそうなラーメン屋を見分ける能力。それには訓練が必要なので、ひたすら美味しそうだなと思う店に行く。美味しくなさそうなものは食べない。

もうひとつ初学者に必要なことは、ある程度の先入観をもつこと。柱と梁が必要とか、階段がないと2階にいけないとか、基本的な先入観がないと、柱とはなんぞや、階段とはなんぞや、という問いが立てられないから、先入観を壊せなくなる。

＊6　BIM：Building Information Modelingの略。建物の3次元のデジタルモデルを、設計者、施工者などあらゆる工程で情報を共有し、管理・活用を行うツールとして近年着目されている。

垣野　子どもが親の価値観をジャッジし、それを壊しながら大人として成長していく、子育てと同じですね。

山名　親から教わったこと、教員がよいと言っているものに対しても「そうではなくてこうなんだ」と言えるようになって、大学を卒業するころには、自分が美味しいと思うラーメンをきちんと説明できて、つくれるようになって欲しいです。

国際化の中で、自分の立ち位置を見つける

垣野　私は研究でフィンランドに2年半くらい滞在していたとき、外国人としての疎外感を感じ、日本人独特の曖昧さを断ち切らないといけないのだということに気づきました。今後、海外で仕事をする人も増えると思いますが、どのように振る舞うのがよいと思いますか？

山名　まずは、自己の確立をしてから海外に行かないと、言葉も文化も違うところでやっていけないと思います。せっかく留学しても何も身に着けずに帰ってきてしまうことになりかねない。

大学は、そういう自己が確立できる教育機関であることが重要だと思っています。学生時代にそういう意識をもたず、ただカリキュラムをこなしていたら、社会に出て辛くなりますよね。

垣野　具体的にはどのようなことをすればよいのでしょうか。

山名　教員も学生も理性にもとづく合理的な判断をすることを心がけなくてはいけないと思います。でも、曖昧で予定調和的な日本語がそれを阻害しているのではないかと思うことがあります。そこに危機感を持っていないと、日本が国際的に今の地位が保たれなくなった場合、世界の中で自分を位置づけられずに、居場所を失ってしまうのではないかと懸念しています。

だから、大学では議論をすることが大事。最初にどのようなテーゼをたてることができるのか。それに対して、どう問いかけてその議論を深めていけるか。その先に何があるかを理性をもって判断する。設計の講評会では曖昧に「いいよね」ではなく、何がどうよいかを説明するようにやっていきたいものです。

フランスは完全なる近代合理主義社会で、言葉もそういうものを求めるようにつくられている。ル・コルビュジエが「近代建築の5原則」[*7]などを非常に合理的に説明できていたのは、言葉や思考に支えられていたところもあると思います。

垣野　そのいっぽうで、春夏秋冬がある日本人ならではの曖昧さがあり、その文化的素地が、建築作品の中に不思議な間を生んでいる気がしています。山名先生がキュレーションをした2016年のヴェネチア・ビエンナーレ国際建築展「en[縁]: アート・オブ・ネクサス」もそうした若手建築家を多く紹介していたと思います。

山名　「REPORTING FROM THE FRONT」という全体のテーマを決めたディレクターのアレハンドロ・アラヴェナは、私と同世代のチリの建築家です。そのアラヴェナがわれわれの展示を見て言ったのは「日本は西洋の仕組みの中で近代国家を制度としてつくりあげてきたけれど、社会は江戸時代から変わらずに繋がっている」と。「農耕文化で社会がつくられているから、近代国家が熟しても社会がヨーロッパほど崩壊しない。西欧とは違う共同体のあり方、［縁］」というテーマがよく理解できる」と。

近代合理主義は、合理的な社会をつくろうとしたけれど、世界的には貧富の格差が生まれるなどあるところで行き詰まっています。日本がそうなっていないのは、アジア・モンスーン型のよいところですよね。とはいえ、ただ曖昧であるのはよくなくて、自分自身がこうありたいというエゴを、合理性の中で説明していかないと、世界では信用を得られないと、経験上思っています。現代は、世界的に社会も建築も近代的な制度の図式を問い直そうとしている動きがあります。その状況に対峙するためには、まずは美味しいラーメンを見極める力を養い、自己を確立していくことです。学生のみなさん、そうした心構えをもって、スタンバイしてください。

（2017年5月10日　東京理科大学神楽坂キャンパスにて）

＊7　近代建築の5原則：近代建築を構成する5つの原理を提唱したル・コルビュジエのマニフェスト。①ピロティ、②屋上テラス（庭園）、③自由な平面、④横長の窓、⑤自由なファサード。

2016年度 修士設計講評審査会

講評

伊藤香織（教授）
岩岡竜夫（教授）
山名善之（教授）
垣野義典（准教授）
安原 幹（准教授）

近藤哲雄（近藤哲雄建築設計事務所）
末光弘和（SUEP.）
鈴木 啓（ASA）
仲 俊治（仲建築設計スタジオ）
山代 悟（ビルディングランドスケープ）

2016 MArch Design Thesis Review Committee

Reviewer

Kaori Ito (Professor)
Tatsuo Iwaoka (Professor)
Yoshiyuki Yamana (Professor)
Yoshinori Kakino (Associate Professor)
Motoki Yasuhara (Associate Professor)

Tetsuo Kondo (Tetsuo Kondo Architects)
Hlrokazu Suemitsu (SUEP.)
Akira Suzuki (ASA)
Toshiharu Naka (Naka Architects' Studio)
Satoru Yamashiro (Buildinglandscape)

The MArch design thesis presentation and review was held on February 10, 2017, in the design and drafting room on the fourth floor of Building No. 2 at the Noda campus. There were 18 presentations of seven minutes, followed by an eight-minute question and answer session, for a total of 15 minutes each. The ten-member review committee, consisting of five professors and associate professors and five guest critics, then held a two-stage public review. The first round of voting, in which each member cast three votes, was as follows; Kazuki Horikoshi received 10 votes, Yuki Muramatsu six, Masato Endo five,Takehiro Hayashiyama six, Takemi Miyasaka five and Hanako Morishima four. Megumi Kurita received two votes, and Seiji Saito, Yusuke Kusatani, and Shota Ema one.
After a second question and answer session for presentations receiving votes, each member of the committee cast one vote. The results were eight votes for Horikoshi's presentation, which won 1st Place, while 2nd Place went to the presentations by Miyasaka, which received two votes. A notable features of this year's presentation was novel modes of expression, for example in the use of VR by Ryo Suetomi.

講評審査会風景。模型を前に末光氏（中央）の質問に答える最優秀の堀越一希さん（左）

2017年2月10日、野田キャンパス２号館４階設計製図室にて修士設計の発表と講評審査会が行われた。18名によるプレゼンテーションと質疑応答の後、教授、准教授5名を含む10名の講評者により2段階投票が行われた結果、最優秀は8票を獲得した堀越一希さん、優秀（2等）は2票を獲得した宮坂岳見さんが選ばれた。各講評者が3票ずつ投じる第1回目の投票では、林山赳大さん6票、森島英子さん4票、栗田恵さん2票、草谷悠介さん、江間匠太さんがそれぞれ1票を獲得していた。

シュルレアリスム的手法の可能性

「湯河原の家」（最優秀）

最優秀に選ばれた堀越案は、建築を構成する要素（構成材）をまず設計するという方法をとる。材に「鷺走り（犬走りを読み替えた境界面）」「アル似サッシュ（アルミサッシュの形態を保ちつつ開き方が異なる建具）」などの名前をつけて個性を与え、それらをブリコラージュして住宅をつくる。敷地は神奈川県湯河原町の漁師町で、周辺地域の伝統技術をもった職人が構成材の設計に参加することを想定し、それが話題性を備えることで、地域のコミュニティ再編や活性化にも繋がるという提案である。理路整然とした説得力のあるプレゼンテーションが圧倒的な評価に繋がった。

「地域の建築技術への配慮は共感でき、ストーリー性を感じる（山代）」、「現代はひとつのボキャブラリーで建築を解くことが難しく、アッセンブルする力量が問われる時代。自己完結する建築に対する批評性を感じる（末光）」など、作品の背景にある問題意識や条件設定に理解を示す意見があった。

いっぽう、論理的説明や表現力の高さを評価した上で、設計者の主体性を明確にしないシュルレアリスム的方法について議論があった。「客観的ロジックを回避している私小説のようだ。この先、その方法で社会的なコミュニケーションがとれるのか疑問（山名）」「鈴木博之氏の『建築は兵士ではない』を引用すると、建築のエレメントは兵士ではない。エレメントを利用せず、シンプルに語る方法もあるのではないか（仲）」「新しいものをつくるときは、やりたくて仕方がない切実さがあるはず。内発的な動機が弱いのではないか（近藤）」など。安原准教授は、原広司氏の「シュルレアリスムを超える美学をまだわれわれは持ち得ていない」という発言を引用し、「それを見つけるのが課題」とアセンブルやブリコラージュといった手法の根底にある現代建築の問題意識として位置づけた。

メガストラクチャーの今日的意味を問う

「新宿駅メガストラクチャー計画」（優秀）

1日平均乗降客数 360万人という世界一のハブ駅新宿。JR、小田急、京王など異なる電鉄会社が乗り入れるため複雑で混雑する状況に対し、宮坂案はフィーレンディール架構のメガストラクチャーでエリアを覆うことを提案。上の階に東西南北を繋ぐフロアを設置することで人の動線を整理し、かつマイナーストラクチャーを更新していくことで時代の変化にも対応していくというアイデアである。

今後、縮退する社会の中でメガストラクチャーが果たして必要なのかが論点として上った。「60年代のような容積確保のためのメガストラクチャーではなく、公共性をもった空間を水平展開させる現代的な意味をもつ提案。コンセプト、敷地選び、問題意識の射程において評価できる（安原）」、「ばらばらに拡張されてきた駅をひとつの巨大な交通結節点に統合したいというのは理解できる。メガストラクチャーは理にかなっている（伊藤）」と、成長期とは異なるフレームの意味が語られた。

いっぽう、高密度化する駅ビルといかに差別化できるのか、トラスがつくる空間の美学を保つためにはどうするかという質問に対し、「光を採り入れるなど、空隙を保つルールを付加するとよいのでは（末光）」「実際にはもう少しブレースなどが出てくる。密度から逃げずに提案する必要がある（鈴木）など助言があった。

修士設計に期待すること

1回目の投票後、各講評者から選定の基準についての発言が述べられた。「敷地の選び方や規模設定にアイデアや主張がはっきりしているものに投票した」と山代氏。「現代の建築家は、敷地やプログラムを許容した上で、その枠の中で面白いことをやろうとする請負業的側面が強すぎるのではないか。もっ

13 頁に続く

修士設計最優秀賞

MArch
Design Thesis
1st Prize

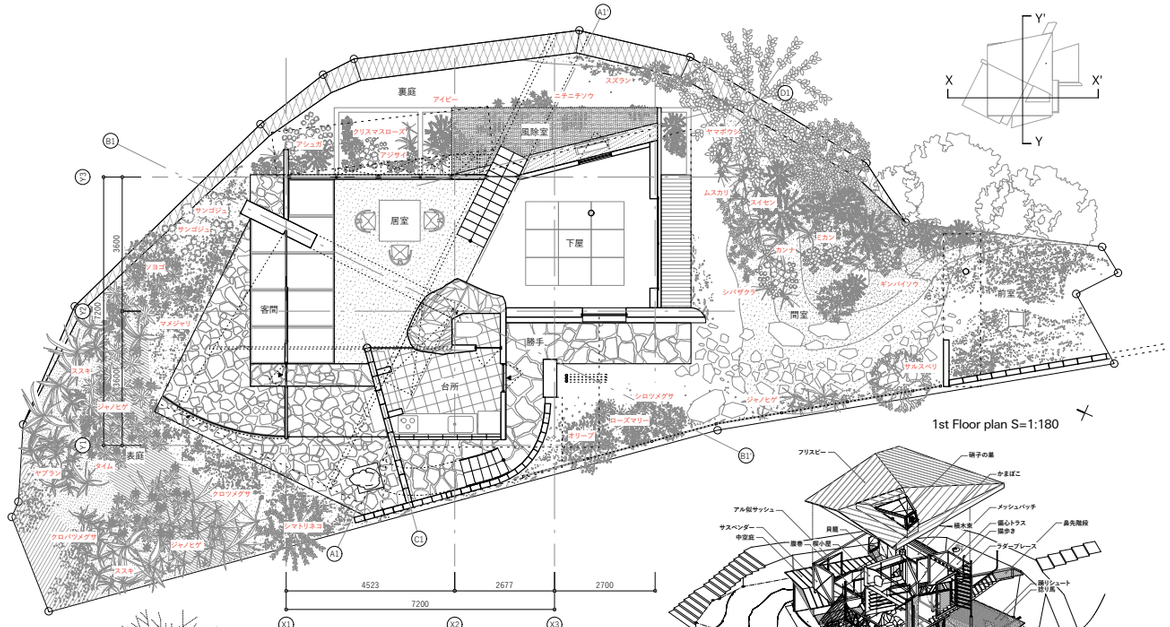
堀越一希

Kazuki Horikoshi

湯河原の家

House in Yugawara

私は住宅を設計した。わりと普通の背格好だが、なんだか少し気持ちが悪い。「あの部分は一体何だ？」と疑問符がつくような、それでいて地域の愛着を一身に受けている奇妙な住宅である。私が行ったのは、〈建築の「構成材」を別々のしかたで設計し、一つ一つに固有名詞を与える〉というものだ。ここで、固有名詞を与えるという行為の価値は、単に意思表現のツールである。しかし、重要なのは全体ではなくあきらかに部分＝建築される前「構成材」の段階からバラバラの作家性を与え、他者に解釈されることを前提に設計をするという行為にこそにある。本設計は、建築を構成するエレメントを相異なる職人に専業させ、それらに固有名詞を名付け、地域という具体的な敷地に着地し、全体性を獲得するまでを描いた試論である。



修士設計 優秀賞

MArch
Design Thesis
Award of
Excellence

宮坂岳見

Takemi Miyasaka

新宿駅メガストラクチャー計画——「メガストラクチャー」による、アップデートを前提とした都市計画

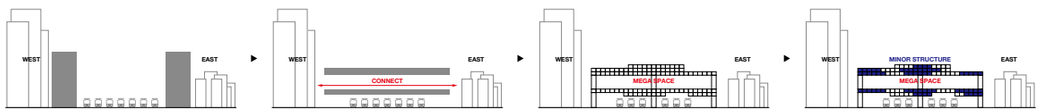
Shinjuku Megastructure Project: Updatable Urban Planning by Megastructure

■計画地と 4 つの要点

計画地は JR 新宿駅北側の線路上周辺エリアを選定した。設計に当たって次の 4 点を重視する。
1. 文化が多様かつその変化がめまぐるしい新宿に対してフレキシビリティの高い空間構造を作ること　2. 地下道や人工地盤によって立体的に形成されている街と連続するメガストラクチャーを作ること　3. 街並みのコントラストが強い東西につながりをもたらすような大架構のストラクチャーを構えること　4. 東西にある大きな緑地との関係性を作ること

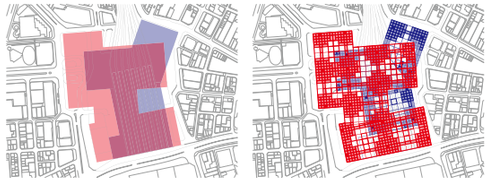
■断面構成

駅前百貨店によって断絶されている駅空間に対して、平面的に大きく抜ける 2 枚の人工土地を設ける。これらを組柱で支えられたスペースフレームで作ることでこの中にマイナーストラクチャーの挿入が可能となる。



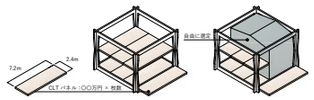
■平面構成

周辺街区や既存の広場計画が持つ軸性に従って 2 枚の人工土地の形状を決定する。
柱を受ける位置からの距離に応じてトラスのピッチを 7.2m と 14.4m の 2 種類に分けることによって、構造強度の均整を取ると同時にマイナーストラクチャーの建設可能範囲が制御される。

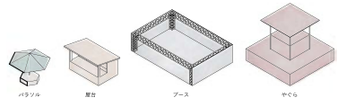


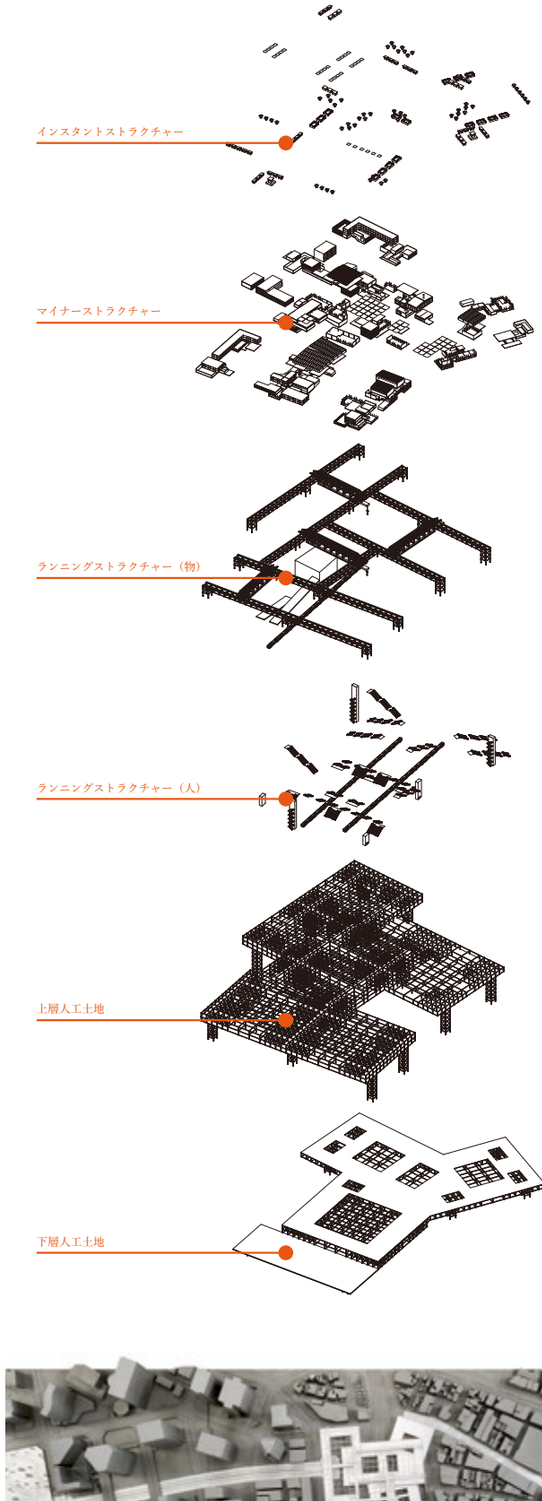
■マイナーストラクチャー／インスタントストラクチャー

マイナーストラクチャーは、規格化された CLT パネルの床材を土地代として購入し、フレーム内に建設します。壁や屋根には自由な建材を使用できる。これにより増築や建て替えが比較的短期間で行えるようになる。



より短期間で利用する屋台やブースなどのインスタントストラクチャーは、地上や人工土地上の広場の一角を時間単位でレンタルし、短時間で設営・解体ができる。





2 等に選ばれた宮坂岳見さん（右）。末光氏（左）と仲氏（中央）に提案内容を説明

と、場所や規模、プログラムを強く主張し、それをどのように成立させるか、提案性の高い案を選んだ」と、栗田恵さんの「帰り道の街校」、草谷悠介さんの「交差点の設計」にコメントを寄せた。

垣野准教授は「社会の課題に応えられているか、自分の意思表示がきちんとできているか、これまでにないものを見せてくれているかを基準に投票した」と延べ、林山赳大さんの「身体の動きと領域の輪郭」、森島英子さんの「150 人による集合体の創出とその建ち方」を挙げた。

林山案は、建築の壁に曲率をもたせることで境界面をデザインしようとする提案。近藤氏は「スタディを重ねてリアリティのある空間に仕上げていることは評価できる。しかし修士設計としてもう少し踏み込んだ提案が見たかった」とコメント。いっぽうで、末冨亮さんのヴァーチャル・リアリティを体感する「顕現する建築」について「何が起きるのか分からないところに踏み込んでいる。実際にプレゼンテーションでプログラムが作動しなかったので、見通しをたてる必要はあったけれど……（笑）」と、修士設計に望む姿勢を評価した。

森島案は、150人という規模の集合住宅で、高齢者、子ども、大学性というソーシャルミックスをさせるため、全体に中心性がなく共用部を離散的に配置するという提案。「2層目にいろいろな機能がはいることでクラスターが揺るかになるのがよい（垣野）」、「住戸ユニットだけではない集合体をつくったことに大きな意味がある。建築のハードとして面白く、エレメントがつくる空間が新鮮（安原）」、「150人だから可能なファシリティを地域開放するなど、外に開いてもよい（末光）」などの講評があった。

「全体的に提案のバリエーションあり、チャレンジしている姿勢がよかった。敷地の中だけではなく、その建築をつくることでより広域な変化を与えようとする意識をもっているものを評価（伊藤）」、「修士設計では、プレゼンテーションの力量が必要（岩岡）」、「20代の学生としてアカデミックな視点から、現代社会に対するリアルな思い、もの申したいことをプレゼンテーションしてほしい（近藤）」など、次年度にも繋がる講評がなされた。

林山赳大 | Takehiro Hayashiyama

身体の動きと領域の輪郭 | Body Movement and Region Outline

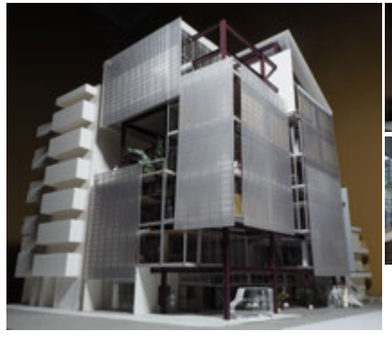
森島英子 | Hanako Morishima

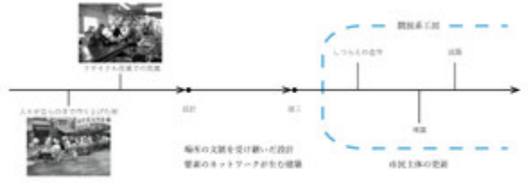
150 人による集合体の創出とその建ち方 | Creation Aggregation by 150 People, and it's Appearance

影山真平 | Shimpei Kageyama
春日部新市庁舎
—公園と庁舎建築群による新たな公共性の創出 |
New City Hall in Kasukabe City

埼玉県春日部市庁舎のリニューアル計画。人が集まる場所として、分棟配置している

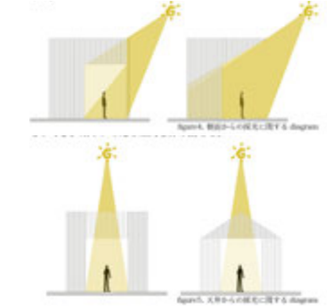
齊藤誠司 | Seiji Saito
開放系の自律性
—予定調和を超える持続的な建築の在り方 |
The Way of Architecture for Sustainability Beyond Pre-established Harmony





東京都荒川区日暮里に建設が予定されている地域活性化施設をケーススタディとして提案。市民による DIY などが行われることを想定している

本田美保 | Miho Honda
漉き、重ね、紡ぐ。
—障子紙を使用した空間における感覚と物理量の差違 |
To Mafufacture, to Lap, to Spin

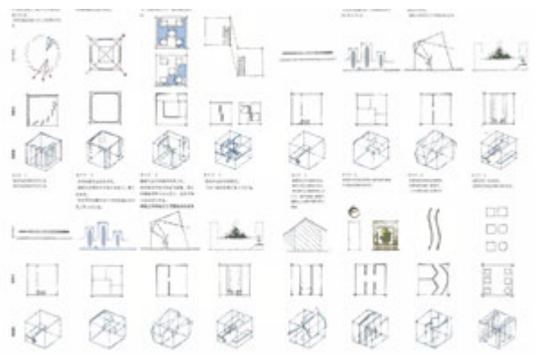


本美濃紙を屋根や壁面などの外装材として利用する提案。和紙を重ね合わせることで光の透過率をコントロール。左上は、本美濃紙が発展した未来、右上の画像 2 点は、美濃和紙が産業として廃れた場合を想定

栗田 恵 | Kei Kurita
帰り道の街校 | The Street School

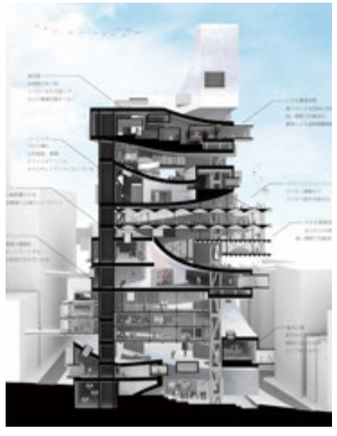
学校の教室を街に分散させ、大人も子どもも通える「街校」を提案。左図は、3 つのフェーズを経て、2040 年に駅、街校、商店街をつなぐネットワークができることを描いたもの

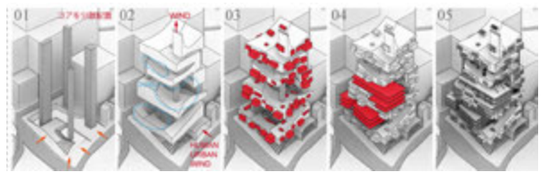
石宇 博 | Shi Yubo
矛盾する建築 | Contradictory Architecture



ロバート・ヴェンチューリの「建築の多様性と対立性」をもとにテントを最小単位とする複合施設を提案

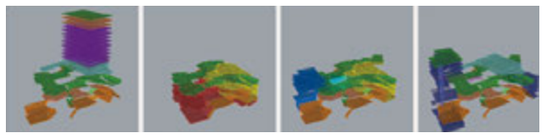
日野雄介 | Yusuke Hino
うつろう建築 | Variable Architecture





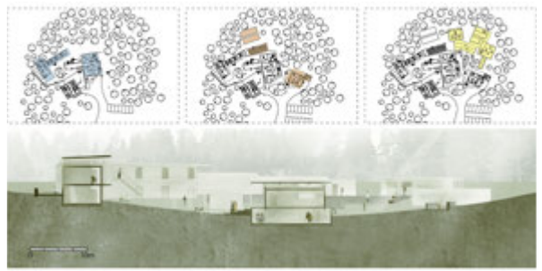
渋谷の宇田川町（現・東急ハンズ）を敷地としたオフィス、住宅、ホテル、劇場、公共施設などのコンプレックス。主構造と可変するマイナーストラクチャーから成る

末冨 亮 | Ryo Suetomi
顕現する建築 | Emerging Architecture -Realm of Social Reality-



提案は、渋谷の複合施設。利用者の属性によって、商業施設、保育施設なを利用する空間が異なることに着目し、それぞれにカスタマイズされた空間をヴァーチャルリアリティの映像で見せる実験的な試み

柳原 仁 | Jin Yanagihara
胎動する風景 | Landscape to Be Felt

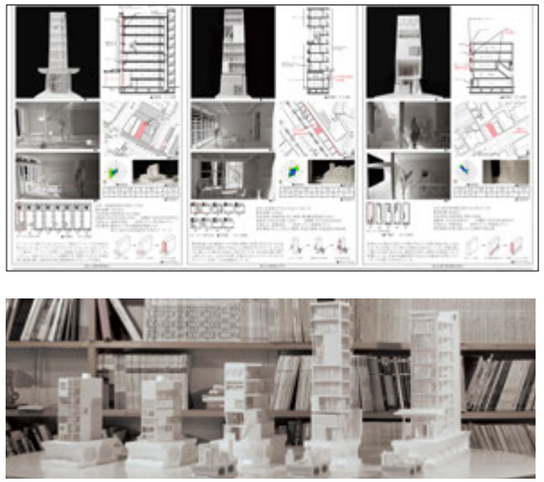


福島県飯舘村内を敷地に宿泊施設、ミュージアムなどからなる集客施設を提案。将来的には移住者を受け入れるなど、村の未来を提案

草谷悠介 | Yusuke Kusatani
交差点の設計
Not in the Figure, Not Even in the Ground

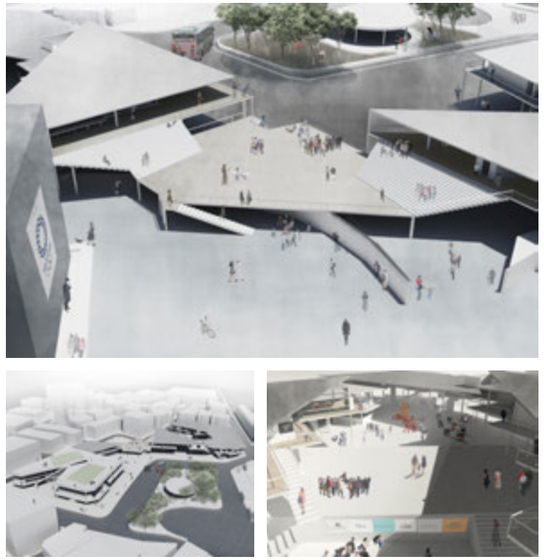
交差点を第一種住宅地域（S）、商業地域（M）、第一種中高層地域（L）として、周辺の建築とともに設計するという提案

江間匠太 | Shota Ema
ペンシルビルと地域性
—青森、水戸、鹿児島の 3 都市における検証
Pencil Building and Regionality



気候が異なる 3 つの地域、青森県青森市、茨城県水戸市、鹿児島県鹿児島市でペンシルビルを設計

原 百合子 | Yuriko Hara
行為の居場所
—浦和駅前複合施設計画 |
Whereabouts of Action



さいたま市浦和に商業、スポーツなどの複合施設を提案。無目的に施設津を訪れた人のための居場所を内包することを意図している

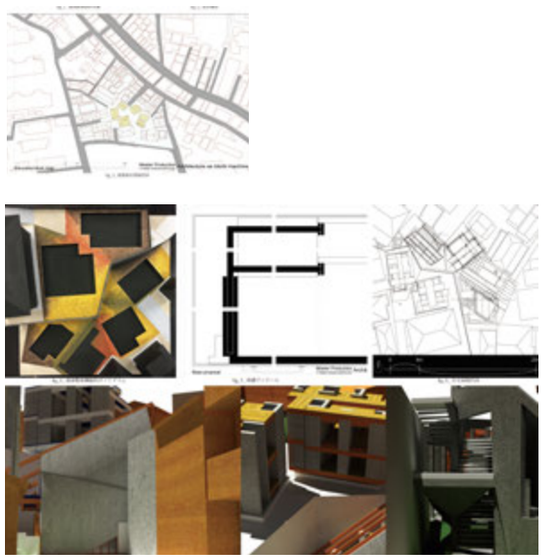
熊倉 卓 | Taku Kumakura
SANJO HEXA
—うつ病予防リハビリセンター |
SANJO HEXA: The Center for Prevention and Rehabilitation of Depression

新潟県三条市の小学校跡地を敷地に、うつ病患者のための施設を提案

高瀬結惟 | Yui Takase
現代におけるヴァナキュラー性の試み
—六角橋商店街の再構築 |
An Case Study of Rokkakubashi Shopping District

神奈川県横浜市の六角橋商店街を分析し、パタン・ランゲージを抽出し再構成する提案

松田岳史 | Takeshi Matsuda
街区機械としての建築
—菊坂の一街区を例として |
Architecture as a Block Machine --A Block in Kikuzaka



ル・コルビュジエの「住宅は住むための機械」を引用し、木造密集エリアの街区を街より機能的なものにしようとする提案

2016年度 卒業設計講評審査会

2016 BArch Design Thesis Review Committee

講評

伊藤香織（教授）
岩岡竜夫（教授）
山名善之（教授）
垣野義典（准教授）
安原幹（准教授）

有岡三恵（Studio SETO）
アリソン理恵（teco）
いしまるあきこ（いしまるあきこ）
大成優子（大成優子建築設計事務所）
神永侑子（オンデザインパートナーズ）
城戸崎和佐（城戸崎和佐建築設計事務所）
久野靖広（アトリエ・アンド・アイ）
駒田剛司（駒田建築設計事務所）
高橋 堅（高橋堅建築設計事務所）
塚田修大（塚田修大建築設計事務所）
戸室太一（戸室太一建築設計室）
西田 司（オンデザインパートナーズ）
細矢 仁（細矢仁建築設計事務所）
萬代恭博（坂倉建築研究所）
宮下信顕（MR-S）
宮原 亮（エムアーキ）
森 清敏（MDS）
山﨑健太郎（山﨑健太郎デザインワークショップ）
横尾真（OUVI）

Revewer

Kaori Ito（Professor）
Tatsuo Iwaoka（Professor）
Yoshiyuki Yamana（Professor）
Yoshinori Kakino（Associate Professor）
Motoki Yasuhara（Associate Professor）

Mie Arioka（Studio SETO）
Rie Allison（teco）
Akiko Ishimaru（Akiko Ishimaru）
Yuko Onari（Yuko Onari Architect Office）
Yuko Kaminaga（ON Design Partners）
Nagisa Kidosaki（Nagisa Kidosaki & Associates）
Yasuhiro Kuno（Atelier and I）
Takeshi Komada（Komada Architects Office）
Ken Takahashi（Ken Takahashi Architects）
Nobuhiro Tsukada（Tsukada Architects）
Taichi Tomuro（Taichi Tomuro Architects）
Osamu Nishida（ON Design Partners）
Jin Hosoya（Jin Hosoya Architects Office）
Yasuhiro Mandai（Sakakura Associates architects and engineers）
Nobuaki Miyashita（MR-S）
Akira Miyahara（M ARCHI）
Kiyotoshi Mori（MDS）
Kentaro Yamasaki（YAMAZAKI KENTARO DESIGN WORKSHOP）
Shin Yokoo（OUVI）

The BArch design thesis presentation and review was held on February 11, 2017, in the design and drafting room on the fourth floor of Building No. 2 at the Noda campus. There were 14 presentations of four minutes, followed by a five-minute question and answer session, for a total of nine minutes each. The 24-member review committee, consisting of five professors and associate professors and 19 guest critics, then held a two-stage public review. The results of the final stage, in which each member cast one vote, were seven votes to the presentation by Tsubasa Terui, which won 1st Place, while 2nd Place went to the presentations by Shin Irie, which received five votes. The presentations by Yasuyuki Sato, Kinteru Kawabata, and Marino Sasaki received three votes each.

講評審査会風景。右の写真の中央が最優秀の照井飛翔さん

2017年2月11日、野田キャンパス２号館４階設計製図室にて卒業設計の発表と講評審査会が行なわれた。発表者は14名で、プレゼンテーション4分間のと5分間の質疑応答の後、教授、准教授5名を含む24名による講評と投票が行われた。第一段階では、各3票ずつ投票し、5票以上を獲得した7案について再度議論を交わした。最終投票で各1票を投じた結果、最優秀は7票を獲得した照井飛翔さん、2等は5票を獲得した入江慎さん、3等にはそれぞれ3票を獲得した佐藤康行さん、河鰭公晃さん、佐々木琺乃さんが選ばれた。

神田の老朽化したオフィス群に穴を穿つ
「OFFICE LANDSCAPE——高密都市における公共空間の創出と新しいオフィスの提案」（最優秀）

最優秀に選ばれた照井飛翔案は、東京都千代田区神田にある老朽化したオフィス・ビルの中間層をヴォイドにするという提案である。個人所有の小規模ビルが過密状態で建っている状況、外部の公共空間が少ないことに着目し、中層階のオフィス空間を歩道の上に迫り出させ、内部をヴォイドにすることで公共空間を生み出す。その結果、均質なワークプレイスに多様性を持たせようという試みである。

「同じようなビルを単純にクリアランスするのではなく、更新のアイデアとして面白い。（久野）」「都市の表面に生々しく人間がいる風景を出してくるのは興味深い（細矢）」「オフィス街の中間層で、外に出るという経験が楽しそう（アリソン）」「既存のビル群を地形と見立てるのは面白い（安原）」など、発想のオリジナリティが共感を得た。

いっぽう「神田でオフィスが余る中、歩道上にせりだしてまで余剰空間を等価交換することに納得がいかない（いしまる）」と、現実と前提条件との齟齬が指摘された。

また「耐震性が劣る建物を繋げることで強度が上がるのがよい。本人は意識していないだろうけど……笑（久野・森）」と提案者の意識を超えた有効性の指摘があった。

テーマとなっているヴォイドについては「ただの通り道になっているのが残念。ファサードの素材や空間の大小など、もっとデザインできる（大成）」「ただパブリックと言うだけでなく、どうすれば内部の空間が生き生きするかを追求するならば、中間層に一般の人を上らせるリアルな仕掛けや提案が必要ではないか（駒田）」「ゴードン・マッター・クラークの壁に穴を穿つ作品『円錐の交差』を思い浮かべた。引き算と足し算を同時にやるならば、ビルのスキマをもっと活用すれば多様な空間に繋がったのではないか（高橋）」と、発想の展開を促す意見も多かった。

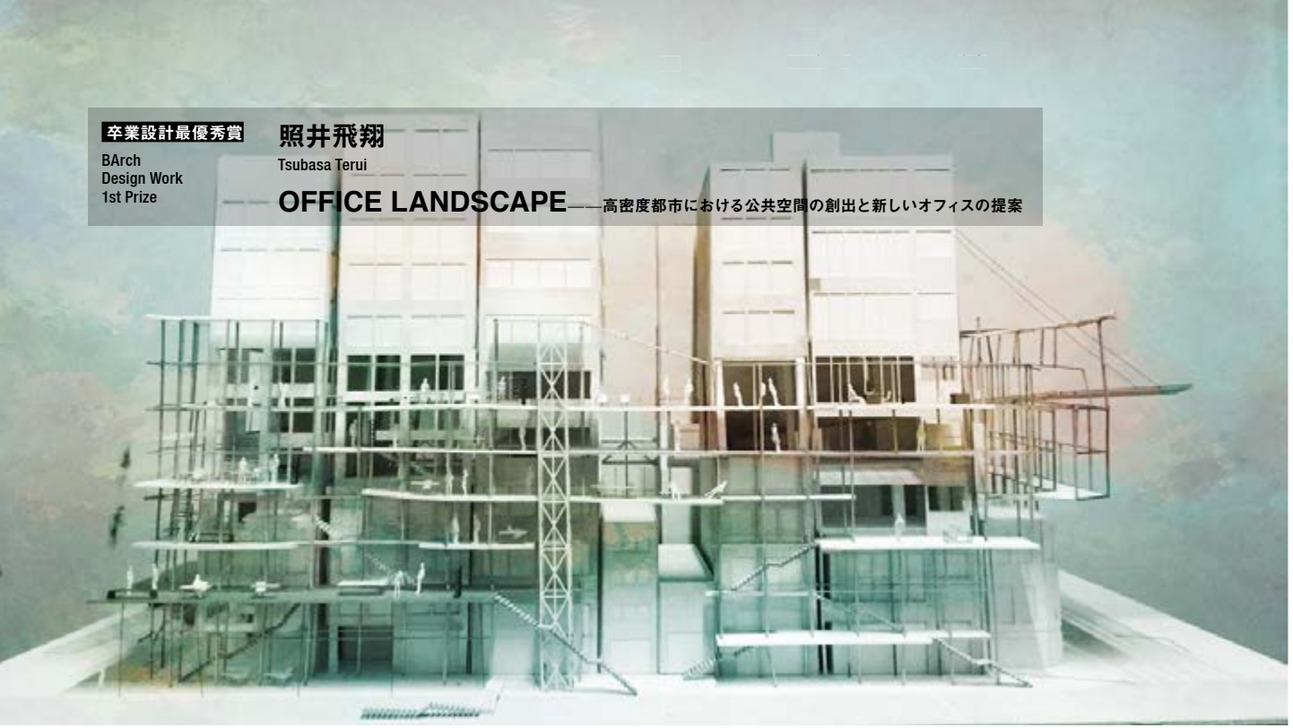
画一的再開発へのアンチテーゼとして、空間採取と翻訳
「銀の塔は残り香を纏う」（優秀／2等）

建築の機能と装飾。20世紀には背反する概念を現代的に捉えなおすとするならば……。そんな議論を生んだのが2等に選ばれた入江慎さんの案だった。敷地は東京都世田谷区三軒茶屋。首都高速の高架や幹線道路沿いの三角地帯の再開発である。オフィス・ビルとしての床面積を担保しつつ、それに小規模の空間を纏い付かせる。それは、既存の街並みの断片をすくい取ったもので、場の記憶を再開発後にも繋げるという、都市を画一化していく再開発のあり方に疑義を唱えたものである。

「場の記憶や、残り香というよく分からないものをかたちに落とし込もうとした姿勢がチャレンジング。最終到達点が見える予定調和的な計画ではないことを評価したい（塚田）」「植物採集をするようにイメージをつくり建築化する方法。それは果たして装飾なのか、建築的議論の俎上に載せたい提案（城戸崎）」など、設計へのアプローチ方法が共感を呼んだ。

「構成要素を拡大解釈することで、均質空間を複雑にしている。設計中に何をジャッジしてかたちを決めていったか説明する必要があるのではないか（西田）」「ひとりの設計者がかたちを決めているならば、複雑性を装っているようにしか見えない。ルシアン・クロールが行った住民参加型の手法をとるべきではないか（戸室）」「断片的シーンを描き、それを自分なりに翻訳して空間にする方法は難易度が高いが、それをやり続けていることを評価したい。小さな空間を使い手が作っていく

25 頁に続く



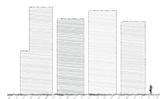
卒業設計最優秀賞
BArch
Design Work
1st Prize

照井飛翔
Tsubasa Terui

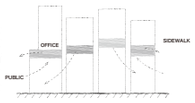
OFFICE LANDSCAPE——高密度都市における公共空間の創出と新しいオフィスの提案

提案 1 : 新たなオフィスと公共空間の創出

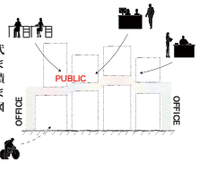
1) 個人所有のオフィスビルが高密に林立し、多くの空室が存在している。更新の時期を迎えているが、工事はなかなか進まない。



2) 使われていないビルの空室部分を街区の外側（歩道空間）に新たなビルのファサードとして再計画し、街に対して閉ざされていた既存のオフィスを街へと引き出し職場環境を向上させる。

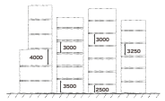


3) 公共空間である歩道を利用する代わりにビル群の中空層を繋げ、今までとることのできなかった広い面積の公共空間を創出する。中には今まで神田地区で不足していた公園や図書館といった機能が挿入される。
　また、神田のようなビルの立ち並ぶ都市部では人口が地表よりも高いいちに分布しているため、公共空間も高い位置にある方がより多くの人がその恩恵を享受することができると考えられる。



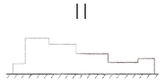
提案 2 : OFFICE LANDSCAPE

1) 一見すると無個性に見えるオフィスビルだが、それぞれのビルには階高に違いが見られ、隣のビルとのズレが生まれていることに気づく。

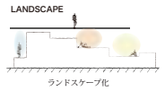


階高の差異

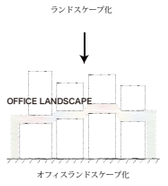
2) それは都市の中で自然発生的に生まれた地形であると読み解くことができる。



3) 地形に対して水平にスラブ挿入し、地形との間に空間をつくることをランドスケープ化するという。

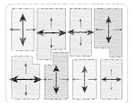


4) それと同じ手法を用いることで既存のオフィス群をオフィスランドスケープ化する。また、水平スラブは隣の街区へと伸びることでより多くの人々が行き来する場となる。



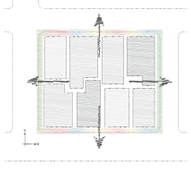
提案 3 : 構造を連結し耐震性能を上げる

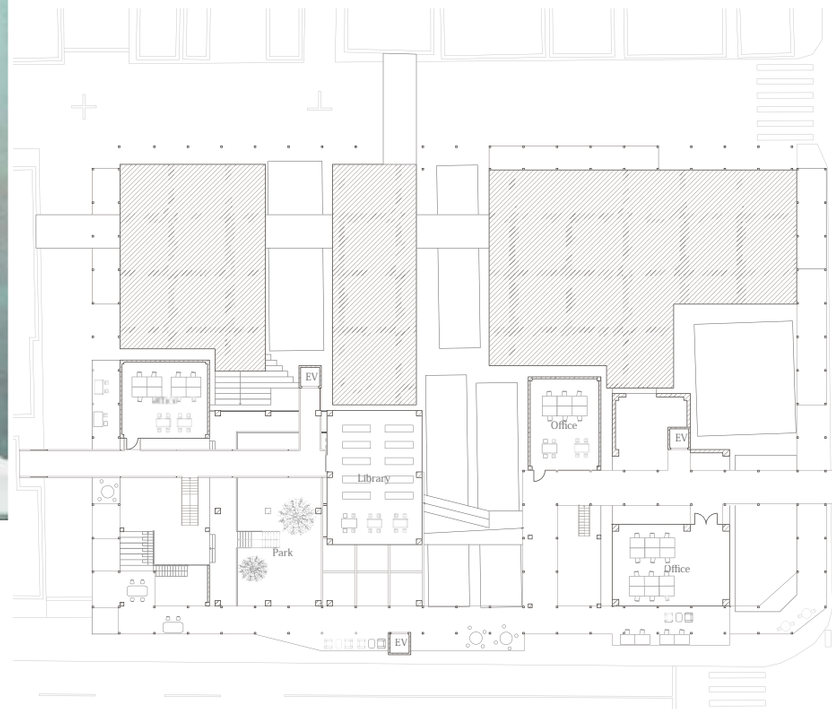
1) 古いオフィスビル群の中にはある方向に対して耐震的に弱い建物が存在する。



2) 歩道空間に新築するオフィスはそれらのビルの構造を連結させるベルトとしての役割も担っている。

3) 街区全体が一つの建物のように連結し、地震に対して互いに補い合うことで耐震性能を向上させる。古くなったビルを建て直すことなく更新する。





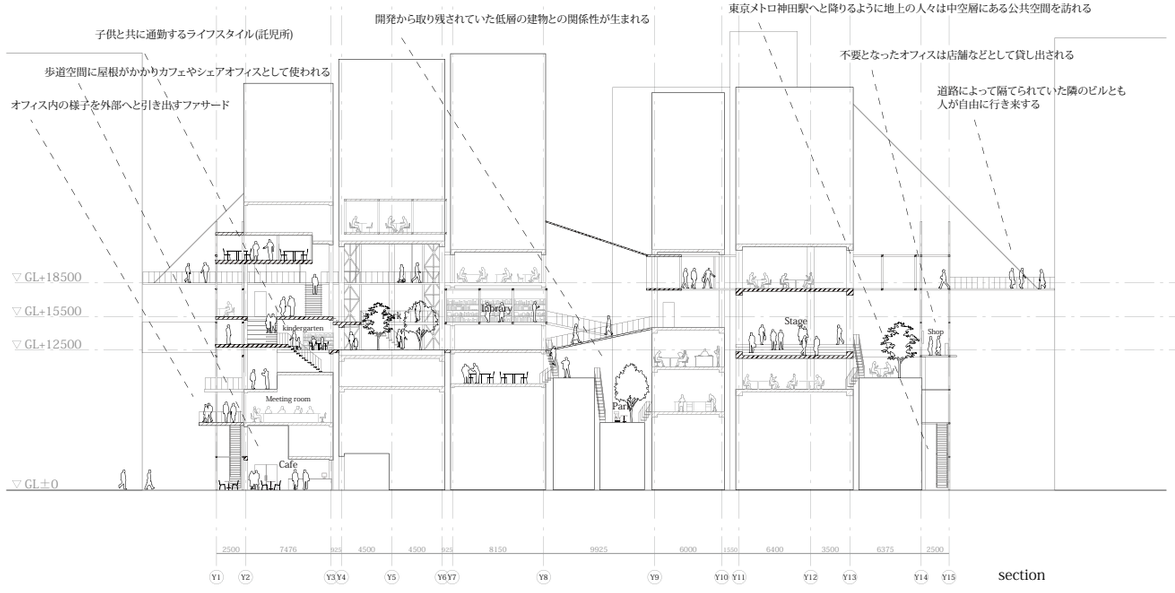
plan GL＋18500

今まで取ることの難しかった広い面積の公共スペースが提供される。
中空層は誰もが利用することができ、隣の街区のビルからも多くの人々が往来する。

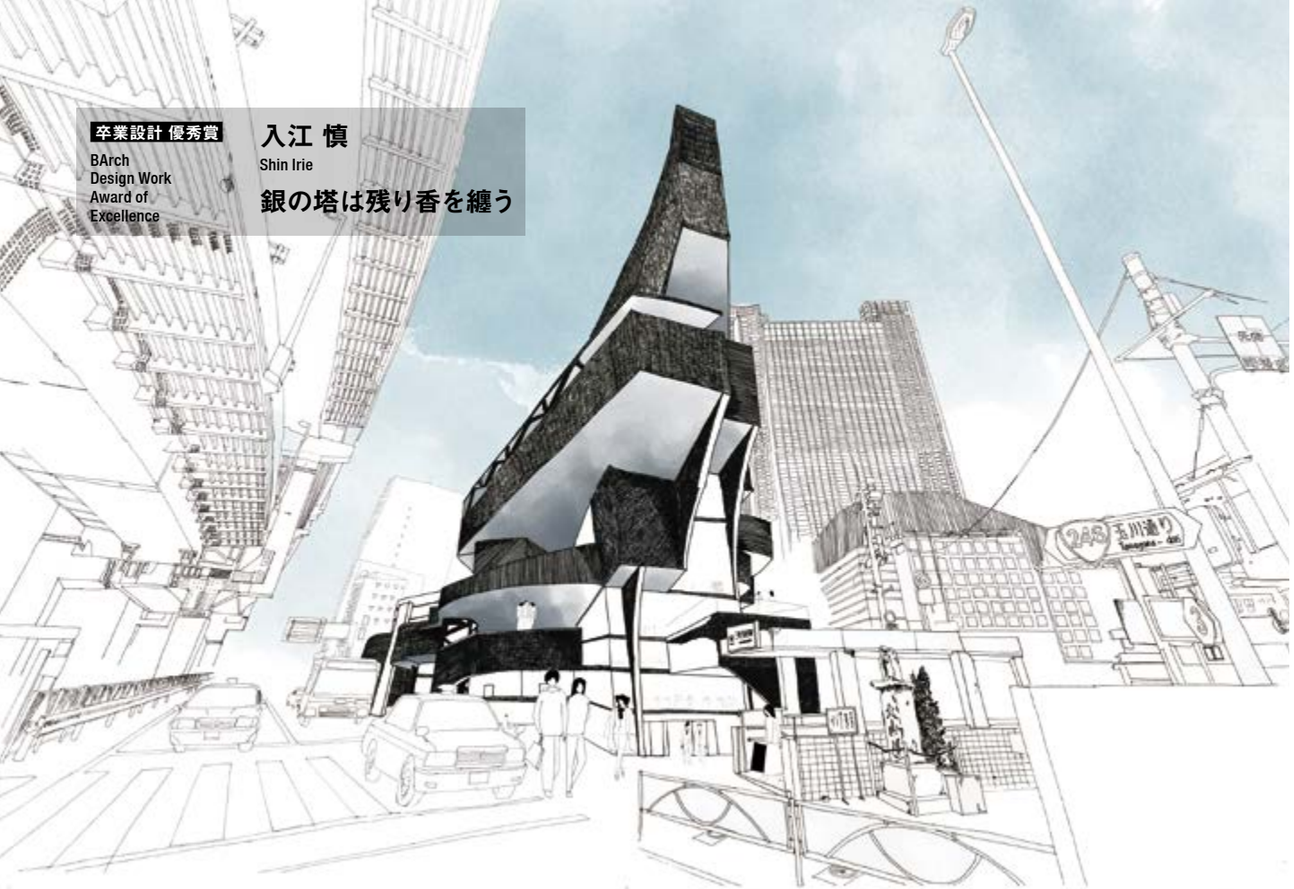
地上にいる人々は地下層への階段を降りるようにビルの表面を登っていき、中空層へとやってくる。

新たなオフィス空間 office landscape
利用者は仕事内容や身体的欲求に応じて場所を変えながら働く。
働き方を変えることは生き方を変えることである。

公共空間
神田に不足していた図書館や公園などがビルの中間層に挿入される。
高層部に多くの人が分布する都市では公共空間も高い位置にある方がその恩恵を享受しやすい。



section



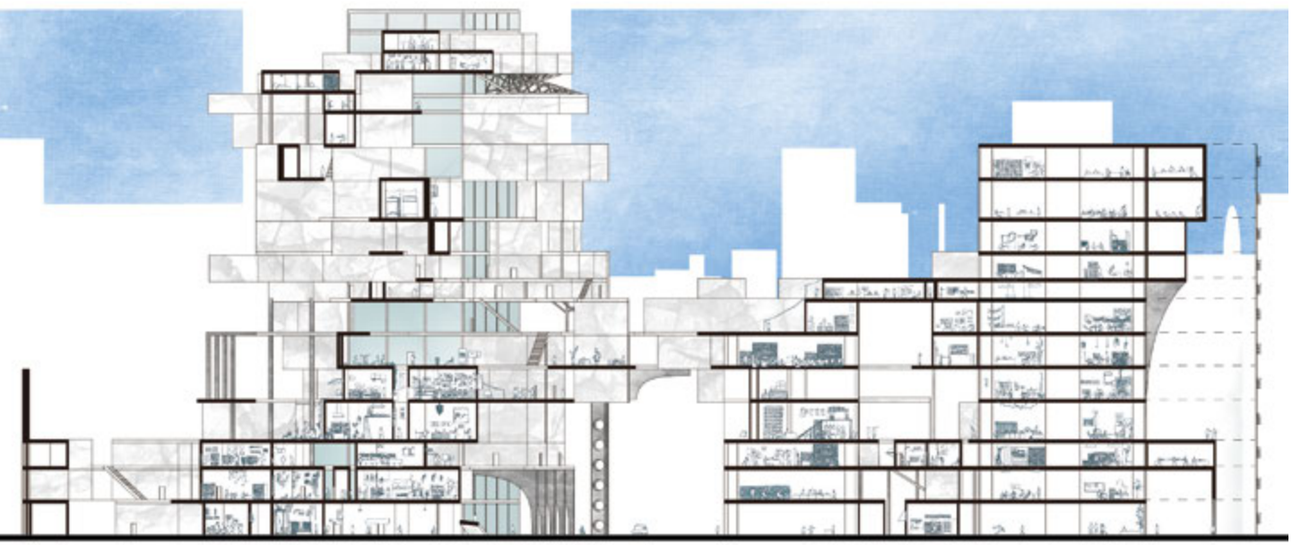
卒業設計 優秀賞

BArch
Design Work
Award of
Excellence

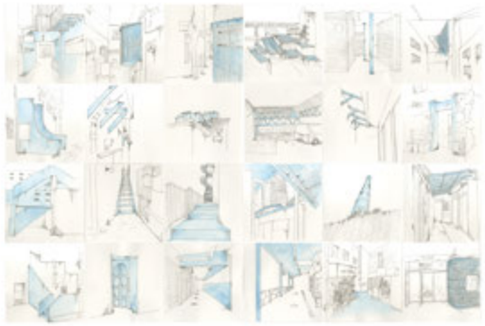
入江 慎

Shin Irie

銀の塔は残り香を纏う



断面



コンセプトドローイング：本来都市が作り出すさまざまな世界

優秀賞（2 等）の入江慎さん

のをサポートする仕組みもセットになっていると説得力があった（駒田）」と、決定ルールやプロセス・デザインの必要性について質疑と指摘があった。

水平垂直空間から脱して、身体を訓練する

「**身体からの学び**」（優秀／ 3等）

東京オリンピックを前に大規模開発が進んでいる東京駅周辺、日本橋・八重洲・京橋のエリアにホテルを提案した佐藤康行案は、身体と空間の関係生を意識化させるために波打つスラブを積層させ、空間体験を通じた身体のための「訓練の場」を提案している。

「評価基準は、後世に残ってよい空間かどうかを重視。スラブの造形に構築への強い意思を感じて推している（山﨑）」「日本橋の風景としてイメージできた。ザハ・ハディド設計のホテル『Hotel Silken Puerta America Madrid』を彷彿させる。スラブを変化させる空間を一時滞在の施設と設定したのは正解（宮下）」など空間の造形が好評を博した。

「構造愛を感じる案。一見シェル構造に見えるが、ひたすらキャンティレバーの床が頑張っているのが残念。スラブをシェル構造とすることで、構造体とかたちが一体化し合理性を表現できるとよりよいものになった（横尾）」と、水平垂直以外の空間をつくるときの構造の考え方への指南もあった。

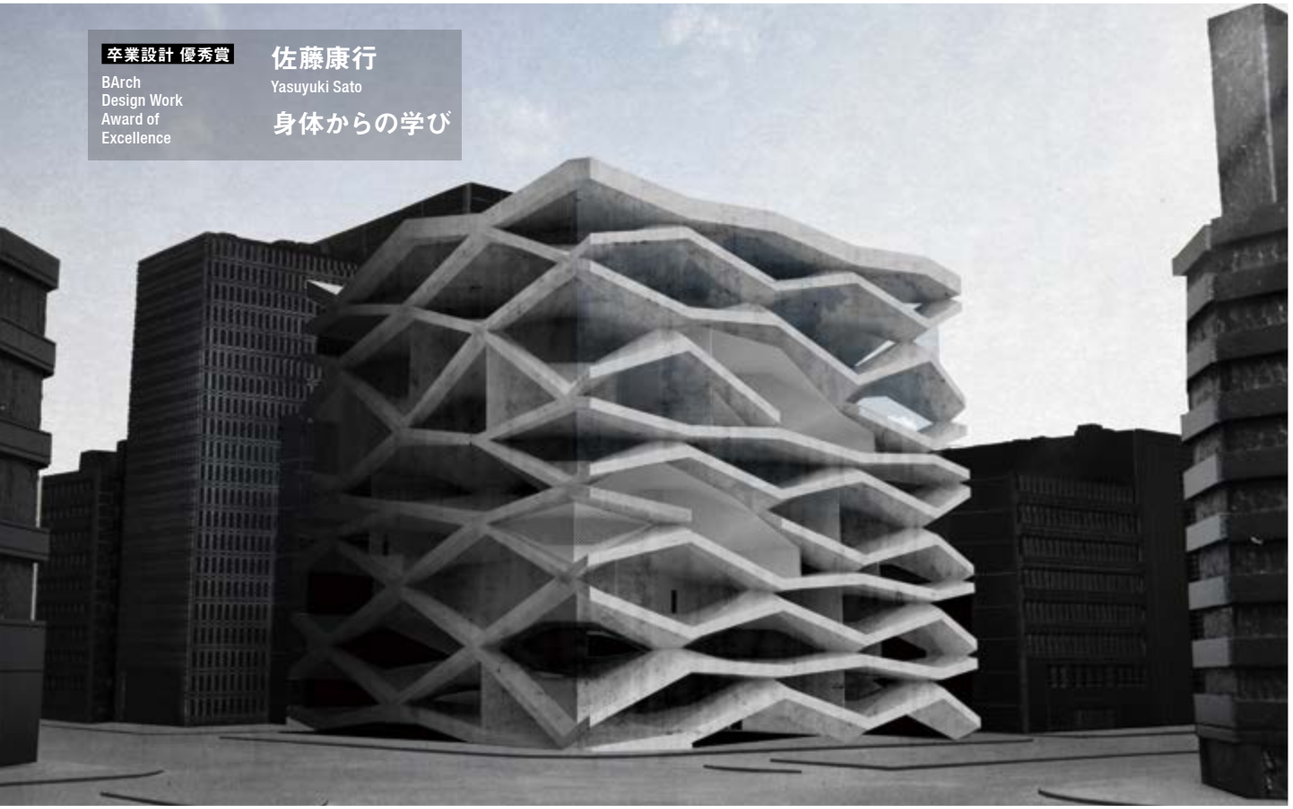
デジタル時代の新たな建築の形態に挑戦

「**協奏するショッピングウィール**」（優秀／ 3等）

オンラインストアが隆盛をなす時代の地方都市における買い物のあり方とビルディングタイプを示す河鰭公晃案は、ショッピングモールではなく壁を棚にすることでショールーミングに対応する施設である。

「時代に沿った新しい建築の形式を生み出そうという姿勢がよい（塚田）」などプロトタイプとして評価があるいっぽうで、「全体が均質に見えるので、場所によって個性をもっとデザインすれば、建物を巡る楽しさがあったのではないか（大成）」、「消費のための空間が50年後まで残る建築たりうるのか（山﨑）」など、建築の概念や価値について異なる視点からの講評がもたらされた。

29 頁に続く



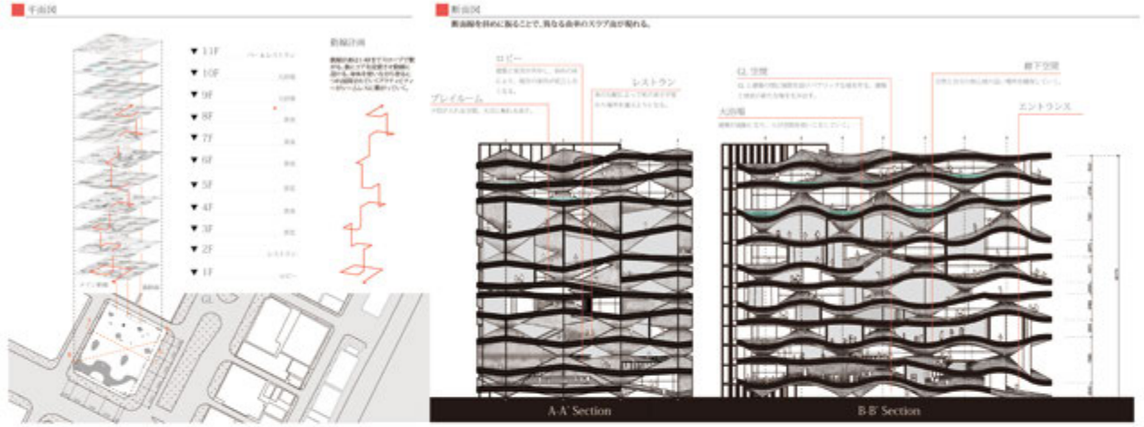
卒業設計 優秀賞

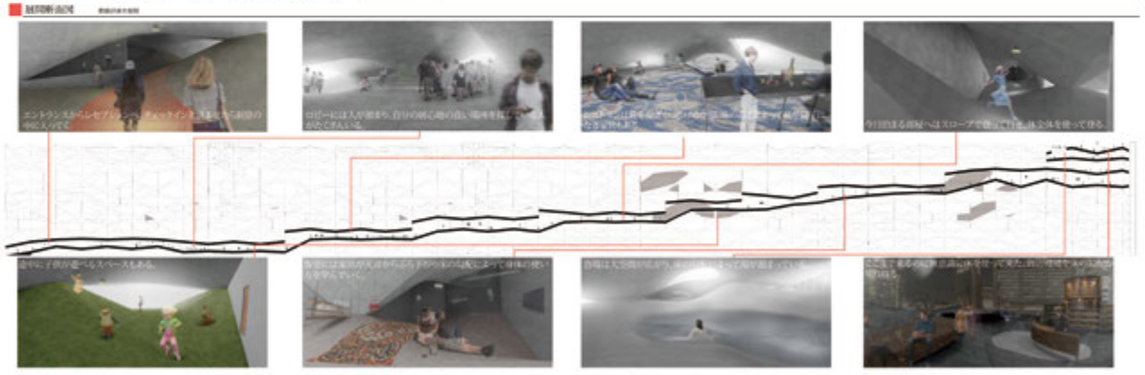
BArch
Design Work
Award of
Excellence

佐藤康行

Yasuyuki Sato

身体からの学び





卒業設計 優秀賞

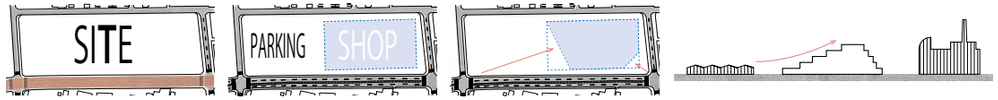
BArch
Design Work
Award of
Excellence

河鰭公晃

Kinteru Kawabata

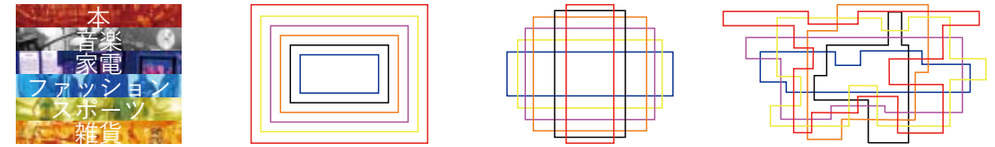
協奏するショッピングウォール

・構成プロセス



大通りに隣接した敷地　車の流れを考えて駐車場と建築を配置する　道からの見えを考えてセットバックする　既存ボリュームに合わせて外形を決める

・平面構成プロセス

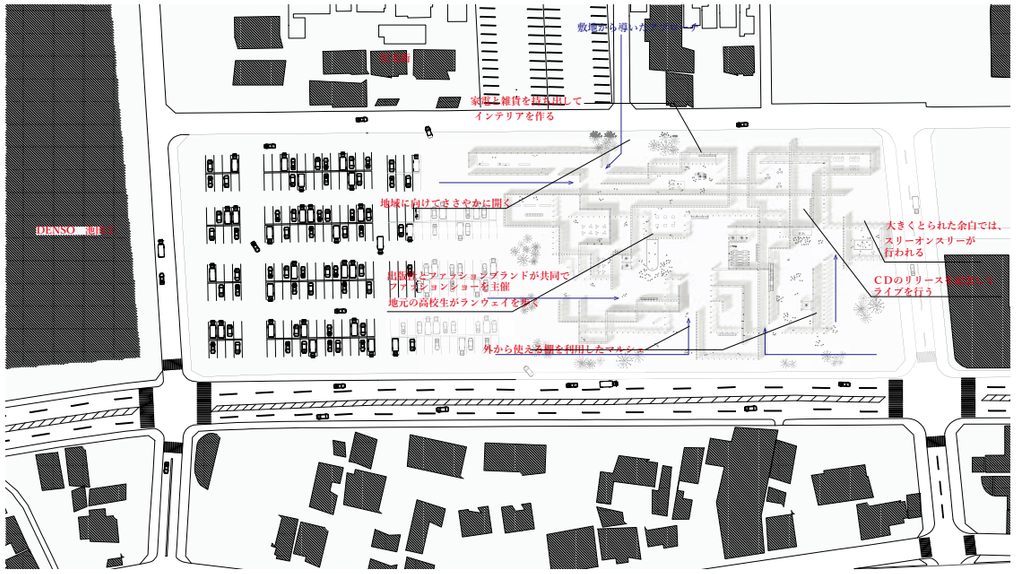


既存のショッピングモールを参考に
ショールミングに適した6ジャンルを選定する
壁は、動線を明快にする役割も持つ

それぞれの壁が関係性を持つよう
レイヤー状に壁を構成する

左右に伸ばし、すべてのジャンルが
関係を結ぶようにする

敷地から導いた外形に合わせてさらに織り込み、
大きさの異なる空間を作ることで様々なアクティビティに
対応する



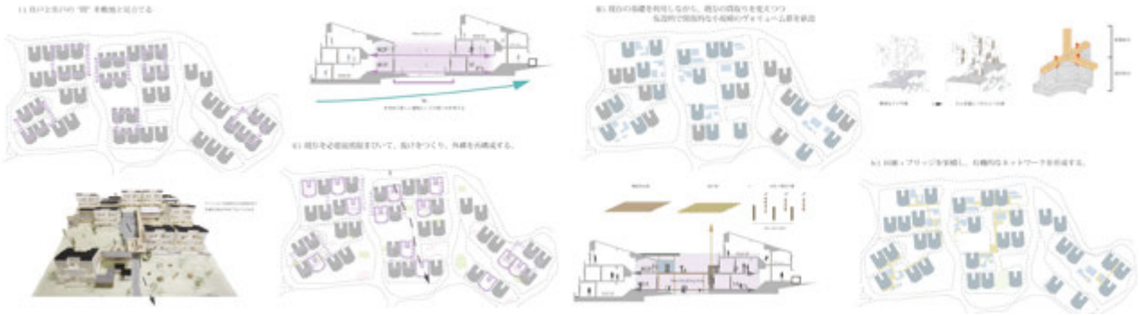
卒業設計 優秀賞

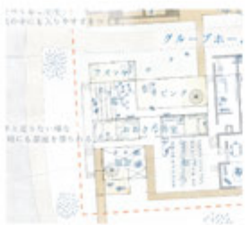
BArch
Design Work
Award of
Excellence

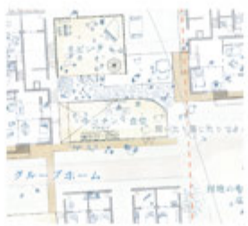
佐々木毬乃

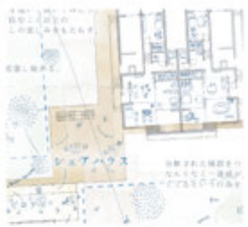
Marino Sasaki

半［築／居／外部］——領域の塗りかえによる地方公営住宅の更新のしかた



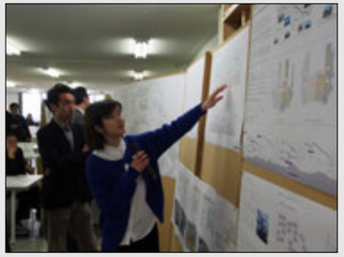






3等の佐藤康行さん（左からふたり目）

同率3等の河鰭公晃さん（右）



同率3等の佐々木毬乃さん（中央）

昭和の名団地「茨城県営三反田アパート」の減築と増築

「半［築／居／外部］——領域の塗りかえによる地方公営住宅の更新の仕方」（優秀／3等）

1970年代、現代建築研究所が設計した三反田アパートは、斜面地を利用したのスキップフロアの3DKを二層重ねた住戸プランをもち、低層接地型集合住宅として高い評価をうけた団地計画のひとつである。近年は老朽化や現代の家族形態にそぐわないという理由で空室率が高くなっているという。その既存団地を減築することで閉鎖感を和らげて地域に開き、シェアハウスや高齢者のグループホームとして活用するリニューアルが佐々木毬乃さんの提案。約30％を減築し、住戸間の関係をつくるテラスなどを増設している。

「既存の建物のレベルや敷地の高低差をきちんと考えている。南側に半外部をつくるなどきめ細かに考えている（萬代）」「緻密な案（宮原）」と解像度の高い設計が評価され、「閉ざされた郊外団地に外部の人が入りやすくする広域的な視点がよい（安原）」と着眼点に対する肯定的な意見が多数だった。

いっぽう、「付加したもののデザインが重要。住宅地を存続させる戦略的なデザインが必要なのではないか（駒田）」「学生としては少し纏まりすぎ。正しいことをしようとしすぎている（城戸崎）」など、堅実さとアイデアの強さを巡る議論も起こった。

ありきたりな風景への抵抗

「複合する高層ビル」と「Unit Motorization」

東京オリンピックに向け開発が進む港区虎ノ門エリア。そこに、文化施設、商業施設、オフィスが積極的に交わるような断面を考案したのが酒井健太郎さんの案である。高さ100mビルを5層に分け、それぞれの中で用途が異なる施設が関係づけられている。

「明快な構造形式、シンプルな構成をしつつも、そこに生み出されている空間が多様で使い方のフレキシビリティを感じさせる（西田）」「均質にならざるを得ない超高層を豊かにしようとするのがよい（宮下）」「異種用途同士のインターフェイスを精緻にデザインすることで、ソーシャル・ミックスが起こる可能性を感じる（有岡）」と基本的な構成を評価する意見が多かった。

「断面がファサードになっているほうが面白い（宮原）」「5つの複合ビルが重なっている以上の説明がほしい（山名）」など、よりラジカルであることを期待する意見もあった。

郊外の駅前開発をテーマに、つくばエクスプレス守谷駅前に仮設の小規模建築を提案した棚橋優樹案は、ユニット提案による汎用性が評価を得た。

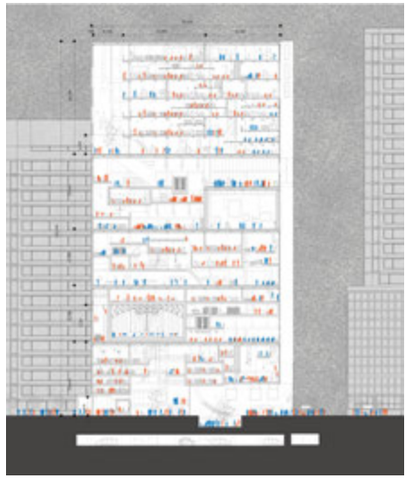
「ライトな様式美を成立させようとしている（細矢）」「仮設性が面白い。駅前の寂しさを一過性の建築で埋める提案がよい（城戸崎）」「卒業設計としてのアプローチとして評価するが、80年代のハイテックスタイルとの違いを見せてほしかった（山名）」「新しい郊外駅前のつくり方としての可能性を示している（伊藤）」「数種類の敷地を用意し、屋根が場所によって変位するのを見せるとよかった。動く模型を！（高橋）」など、案がもつ可能性や展開の余地が示された。

卒業設計のあり方とその評価を巡って

「卒業設計では、社会的な問題に対する提案や、かたちに対する新しい提案、自分はこれがやりたいというはっきりしたテーマをもち、プレゼンテーションまで完成度を高くやってほしい（森）」「長く残る風景となるものを評価した（山﨑）」「敷地の中だけで何かを解決するのではなく、その建築をつくることでまちや社会に対して何を提案しようとしているのか、可能性を感じる提案に票を投じた（伊藤）」「今年の卒業設計は全体に提案が弱い印象があった。もっと前面にアイデアを押し出す努力をして欲しい（山名）」「今年度は突出した提案がなく票が割れた。来年度は審査員が圧倒されて黙るくらいのものを期待している（安原）」など、これから卒業設計を行う学生へのメッセージとなる発言も多かった。

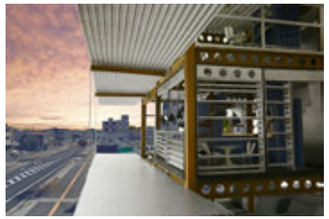
なお、講評審査会の冒頭、2016年10月に逝去された小嶋一浩・元教授（1994年〜2010年在任）への黙祷が捧げられた。

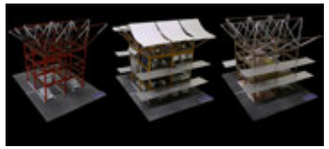
酒井健太郎 | Kentaro Sakai
複合する高層ビル

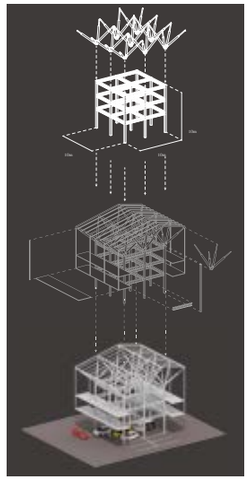


港区虎ノ門に、文化施設、商業施設、オフィスが積極的に交わるような断面構成を提案する案。100 mの中を５層に分け、それぞれの中で用途が異なる施設が関係づけられている

棚橋優樹 | Yuki Tanahashi
Unit Motorization







茨城県守谷市、つくばエクスプレス守谷駅前を敷地の平面駐車場に、小規模のユニット型建築を提案。敷地の更新に合わせて増減築を繰り返す。支柱の上に乗ったトラスは可変で、様々な形状を作ることができる

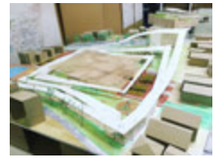
小浦幸平 | Kohei Koura
Hiroshima Peace Museum

広島の旧市民跡地を有機的な平和博物館を計画

伊賀竣哉 | Shunya Iga
「トマリ」の構築

北海道小樽市第３埠頭に、小樽の観光資源となる観光客や市民のための集客施設を提案。「トマリ」とはアイヌ語で「泊地・溜場」を意味する

田中咲良 | Sakura Tanaka
広がる、領域—子どものチカラで始まる交流のかたち



東京都世田谷区若林の、廃校になった中学校跡地の中心に保育施設を置き、その周辺を緩やかに開放していくことで園児とまちの活動をゆるやかに繋げる提案

加藤恭輔 | Kyosuke Kato
五浦ノ景
——建築が稜線となり、新たな風景を紡ぎ出す

茨城県の五浦海岸に建つ宿泊施設。遠景、中景、近景をテーマとし、樹状のトラスを連続させることで屋根が稜線のような風景を生み出す

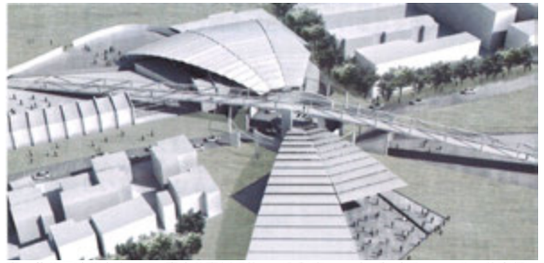
植松里緒 | Rio Uematsu
境界のオブジェクト

筑波研究学園都市の最初期の住宅街の再開発を前提とし、街区の中にオブジェクトを挿入することで機能別に計画されていた 60 年代と異なる視点で空間の境界をつくる

稲葉佳帆 | Kaho Inaba
まなびあるき

千葉県船橋市の密集住宅地にある公園に隣接した傾斜地に保育園を提案。保育園を開放し、園児が自由に歩き回れる状況を提案

磯貝直人 | Naoto Isogai
都市と交通のメタファ



京王井の頭線の富士見ヶ丘車庫の南側に位置する都市公園計画敷地に、ホール、体育館などの複合施設を計画。それを貫く南北の軸を提案。

講評する城戸崎氏（右からふたりめ）。左から、大成氏、駒田氏、山﨑氏（右）

追悼 Obituary

言葉の先にある未来——恩師小嶋一浩先生のこと

光本直人（1997 年小嶋研究室修了）

2016年10月13日私にとって恩師であり師匠でもある小嶋一浩氏が他界した。
私は東京理科大学小嶋研究室の1期生として、修士修了後はシーラカンスアンドアソシエイツ（現CAt）で8年半、またその後は理科大の非常勤講師として数年間一緒に授業を受け持ち、出会ってから23年間という長い期間、小嶋さんと近くで接する機会を与えていただいた。

出会いから今までの記憶をたどると……。
小嶋研の入室説明会で初めて小嶋さんに会ったときまず「設計は好きか？」と聞かれた。そして「10年後の自分」と題したレポートを書いてくるように言われた。
初めての研究室での実施コンペでは提出の締め切り前夜、一緒に徹夜し、「作業工程をまずつくれ。そうしてプレゼンの作業に入らないと間に合わない。最後の最後まで案を考え続けろ」と。「案の決定は時間がある限り遅らせるんだ」と言っていた。
正月、卒業設計で学校に泊まって作業していると小さなプジョーに乗ってコム デ ギャルソンのコートで現れてひとりひとりを見て廻る。「とにかくやりきれ！」と言って帰って行く。
「シーラカンスの菅平の別荘『ART HUT SD』ができたから見に来い」と言われ、「ついでにペンキを塗るから明日から全員2日間泊まりだよ」と。塗り終わったのを見て、「内部空間に光に満たされたしっかりとした空間があることが大事なんだ。かたちじゃないんだよ」と言っていた。
「展覧会で大きな本棚をスタイロでつくるから倉庫で作業する」と言われた。「スタイロの塊をくり抜き、ジェッソで白く塗り固める。その孔に本を並べるから」と。「できあがるまでは帰れないよ」と。
シーラカンスに手伝いにいってスタイロで模型をつくると、真横から模型をのぞき込んで壁と柱が垂直になっているかチェックされた。「真っ直ぐなものは真っ直ぐに、水平は水平につくらないとダメだ。実際建物の柱や床がちょっとでも斜めになることはないだろ」と。「模型をつくるのはそこに入り込むためなんだよ」と。
設計課題で「模型をつくるときは人を必ず最低ふたりは入れなきゃダメだ」と。「アイレベルで覗き込んで手前にひとり、奥にひとり置くんだ。そうやって距離感を確かめるんだよ」と。
エスキスでは空間の問題にまで踏み込んで、それに向き合っていないとすぐにばっさりと切り落とされた。逆に案がいくらまとまっていなくとも何かしらの可能性があれば自らの言葉でもって最大限評価してくれた。出すものが何もなくて言葉だけで説明に入る学生には、「悩んでないで、いいから手を動かせよ」と。「何でもいいから1回やること決めて10個パターンをつくるんだ。そうすると何か必ず見えてくるよ」と言っていた。
研究室の壁を白く塗り、建築学科4階の廊下を塗り、図書室と廊下の間をガラスの扉にしてオープンなスペースにするという改装の計画をたてて、図書室にはいろいろな種類の名作の椅子を並べた。
「よい空間にいないとよいアイデアは浮かばない。同じようにおいしいワインを知らないと、おいしいレストランで食べたことがないとやっぱりよいアイデアは浮かばない」と。

修士を卒業してから、友人とはじめていたプロジェクトが途中で立ち消えになり、小嶋さんに相談しにいったところ、「ちょうどコンペに勝った宮城県の総合学科高校のプロジェクトがあるから明日からコンピュータ持って来なさい」と言われ、それから8年半働くことになった。
高校のプロジェクトは新人スタッフが4人配置されたが、基本計画のはじめ17, 000㎡のプロジェクトを1日にひとり1案、始業からそれぞれ案を考えはじめ、夜のミーティングまでに1m角程度の200分の1の模型まで用意するということを数週間続けた。1週間も続けると20個近い模型が積み上がる。そうしているともう他に案は出ないだろうというほどになる。夜ミーティングがあり、朝までにやり直しが終わっていなくて言い訳すると、「そうは言っても寝てただろ。やるときやらなくてどうするんだよ」と言っていた。
「構成がそのまま立ち上がったようなモデルはつまらない」と。「空間に『ねじれ』があることが大事なんだ」と言っていた。「建築には毒が必要だ。作品には批評性がないといけないんだ」と。
役所や地域住民への説明会では、はじめに「子供たちが活き活きとしている学校はよい学校だ」と話し始める。「学校は子供たちのものだから子供にとって自由な環境をつくることがプライオリティだ」と。
北京の出張で、一緒に朝早く天壇公園に行き、老人達が集まって太極拳をしたり、若者達が踊りやスケボーなどをして、次々と人が沸き出てくるような風景みて、「こういう空間をつくりたいんだ」と言っていた。
出張の新幹線の席は喫煙所の近くの禁煙席を予約し、帰りの新幹線では551蓬莱のシュウマイとビールを買って、隣で一緒に飲みながら帰った。飲むとすぐに寝てしまう。
打ち合わせにはたばことサンペリグリノを用意し、夜スタッフが終電で帰ってしまい、静かになるとゆっくりとウイスキーを飲みながら黄色いトレペにスケッチしていく。泊まったスタッフを見つけるとにこにこしながらウイスキーを片手に近寄ってきて話が始まる。「この時間が好きなんだよ」と言っていた。

独立後、小さな住宅の見学会を開くと駆けつけてくれて「このフローリングはどこの？」とか「外壁は何使っているの？」とか細かい質問をし、最後に感想を述べていただいた。時間が許す限り友人や若い建築家、教え子達や、独立したスタッフの見学会、展覧会に足を運んでいた。
たまに事務所の集まりに呼ばれると「今はどんなことしてるの？　住宅作家になるんじゃないよ。大きなプロジェクトでないと味わえないものがあるだろ」と、言われていた。

教育者としての小嶋さんは、学生に対して建築家としてのスタンダードを見せながら、一切妥協なくいつも本気で接し、突き放しながらも引っ張っていくような存在だった。

東京都渋谷区のシーラカンスアンドアソシエイツの事務所にて。1998年頃、宮城県迫桜高校を基本設計中の小嶋氏（左）と光本氏（右）。

そして建築家としての小嶋さんは、どこまでも実際に空間を使う人が自由に振る舞い、豊かなで快適な空間を享受できることを目指していた。そのために既存の制度や慣習は取り払い、設計という行為も建築家の一枚のスケッチからでなく、多くの可能性とフラットな検証によって成り立たなければならないんだと考えていた。
竣工した建物を小嶋さんと一緒に建築メディアの方を案内するのを待っているとき、「批評されるということはありがたいことなんだ。学生には批評される権利があって、スタッフとして働いているときは批評される義務があるけど、歳を重ねて逆に自分が批評する立場になっていくと、いつの間にか批評されなくなってしまう。大人になるということはそういうことなんだよ」と話していたのを覚えている。「だからいくつになったってよくも悪くも批評されるようなものをつくらないといけないんだ」と。

いま小嶋さんが逝ってしまったあと、日々の設計行為の中で思考の片隅に小嶋さんが常に存在しているということを改めて気付かされる。おそらく小嶋さんに触れた若い建築家の方々、すべての教え子、事務所のスタッフは同じ思いだろうと思う。
デザインが時代とともに変化していく中で表層の操作に終始してしまうのではなく、本質を見極めて新たな可能性にチャレンジしていく態度を小嶋さんは必ず応援し、背中を押してくれて、そして同時に厳しく批評してくれていると信じて、よい成果を報告できるよう活動していきたいと思っている。

みつもと・なおと
1995年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1997年同大学院修了／1997年〜2006年シーラカンスアンドアソシエイツ／2006年ミハデザイン設立、代表

教員紹介

教授・准教授・助教

伊藤香織（教授）
Kaori Ito

1971 年東京都生まれ／1994 年東京大学工学部建築学科卒業／2001 年同大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了／1999 ～ 2002 年日本学術振興会特別研究員／2002 ～ 05 年東京大学空間情報科学研究センター助手／2005 ～ 08 年東京理科大学理工学部建築学科専任講師／2008 ～ 15 年同准教授／2015 年～同教授／研究分野：都市デザイン、空間情報科学／博士（工学）

岩岡竜夫（教授）
Tatsuo Iwaoka

1960 年長崎県生まれ／1983 年武蔵野美術大学建築学科卒業／1985 年同大学院修了／1988 年パリ建築大学ベルヴィル校留学／1990 年東京工業大学大学院博士課程修了／1992 ～ 2003 年東海大学工学部建築学科講師、助教授、教授を歴任／2003 年株式会社アトリエ・アンド・アイ岩岡竜夫研究室設立／2011 年～東京理科大学理工学部建築学科教授／研究分野：都市計画・建築計画、建築史・意匠／博士（工学）

山名善之（教授）
Yoshiyuki Yamana

1966 年東京都生まれ／1990 年東京理科大学工学部第一部建築学科卒業／1990 ～ 94 年香山アトリエ／環境造形研究所／1995 年～ 98 年パリ・ベルヴィル建築大学 dplg 課程／1997 年～ 2002 年パリ大学パンテオン・ソルボンヌ校博士課程／1998 年～ 2000 年文化庁在外派遣芸術家研修員（アンリ・シリアニ・アトリエ）／1999 年～ 2001 年国立ナント建築大学講師／2002 年～東京理科大学工学部第二部建築学科専任講師を経て同准教授／2014 年同大学理工学部建築学科准教授／2015 年～現職／研究分野：建築意匠・建築史／Architecte dplg, 博士（美術史）

垣野義典（准教授）
Yoshinori Kakino

1975 年京都府生まれ／1999 年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2004 年東京大学工学系研究科建築学博士課程修了／東京理科大学理工学部建築学科助教を経て、2008 ～ 11 年フィンランド・アアルト大学研究生、客員研究員／2011 ～ 16 年豊橋技術科学大学建築・都市システム学系准教授、2016 年～東京理科大学理工学部建築学科准教授

安原 幹（准教授）
Motoki Yasuhara

1972 年大阪府生まれ／1996 年東京大学工学部建築学科卒業／1998 年同大学院修士課程修了／1998 年～ 2007 年山本理顕設計工場／2008 年～日野雅司、栃澤麻利と SALHAUS 一級建築士事務所共同主宰／2011 年～東京理科大学理工学部建築学科准教授

有井淳生（助教）
Atsuo Arii

1984 年神奈川県生まれ／2007 年東京大学工学部建築学科卒業／2008 ～ 09 年 OMA（Office for Metropolitan Architecture）／2010 年東京大学大学院新領域創生科学研究科修了／2010 ～ 15 年 CAt（シーラカンスアンドアソシエイツ東京）／2015 年アリイイリエアーキテクツ設立／2016 年～東京理科大学理工学部建築学科助教（安原幹研究室）

柄沢祐輔（助教）
Yuusuke Karasawa

1976 年東京都生まれ／1999 年慶應義塾大学環境情報学部卒業／2001 年同大学院政策・メディア研究科建築・都市デザインコース修了／2002 ～ 03 年文化庁派遣芸術家在外研修制度にてオランダの MVRDV 在籍／2004 ～ 05 年坂茂建築設計勤務／2006 年柄沢祐輔建築設計事務所設立／2012 年～東京理科大学理工学部建築学科助教（岩岡竜夫研究室）

バージェス　アンドリュー（助教）
Andrew Burgess

1976 年ニュージーランド生まれ／2000 年オークランド大学 NICAI 学部建築学科卒業／2000 ～ 01 年、2008 ～ 10 年同学科非常勤教師／2006 ～ 07 年 Pascall+Watson 設計事務所／2008 ～ 10 年 Architectus 設計事務所／2012 年東京大学大学院新領域創成科学研究科社会文化環境学専攻修士課程修了／2015 年同大学院工学研究科建築学専攻博士課程修了／2016 年～東京理科大学理工学部建築学科助教（伊藤香織研究室）

1年生担当（非常勤講師）

岩崎整人
Yoshihito Iwasaki

1973年岡山県生まれ／1996年東京大学工学部建築学科卒業／1998年同大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了／1998～2006年原広司+アトリエ・ファイ建築研究所／2006年岩崎整人建築設計事務所設立／現在東京理科大学理工学部非常勤講師

大成優子
Yuko Onari

1974年東京都生まれ／1997年東京工業大学工学部建築学科卒業／1997 ～ 2002年妹島和世建築設計事務所／2002年大成優子建築設計事務所設立／2012年 ～ 14年芝浦工業大学デザイン工学部特任准教授、現在同非常勤講師／2010年～東京理科大学理工学部非常勤講師（2年生も担当）

小池ひろの
Hirono Koike

1964年北海道生まれ／1987年武蔵野美術造形学部建築学科卒業／1987 ～ 93年伊東豊雄建築設計事務所／1997年手塚義明とケイティアーキテクチャー一級建築士事務所を共同で設立／2016年～コイケヤデザイン主宰／東京理科大学理工学部非常

2年生担当（非常勤講師）

いしまるあきこ
Akiko Ishimaru

1978年生まれ／2001年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2003年同大学院理工学研究科修士課程修了／2003 ～ 05年K計画事務所／2006年いしまるあきこ設立／2011年よりいしまるあきこ一級建築士事務所／2016年～東京理科大学理工学部非常勤講師

岡野道子
Michiko Okano

1979年埼玉県生まれ／2001年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2003年同大学院修士課程修了／2005年東京大学大学院工学系研究科博士課程中途退学／2005年～ 15年伊東豊雄建築設計事務所／2016年岡野道子建築設計事務所設立／2016年東京理科大学非常勤講師／2017年～芝浦工業大学建築学部特任准教授

戸室太一
Taichi Tomuro

1961年東京生まれ／1985年早稲田大学理工学部建築学科卒業／1985 ～ 89年早川邦彦建築研究室／1989 ～ 94年レンゾ・ピアノ・ビルディングワークショップ・ジャパン／1995 ～ 98年アルヴァロ・シザ・アルキテット（1995 ～ 96年文化庁派遣芸術家在外研

3年生担当（非常勤講師）

勤講師／法政大学デザイン工学部非常勤講師

中畑昌之
Masayuki Nakahata

1979年静岡県生まれ／2004年東京理科大学理工学部建築学科卒業／2006年同大学院理工学研究科修士課程修了／2007年ロンドン大学バートレット校MArch／東京理科大学理工学部建築学科助教を経て2010年にhtmn共同設立／2013年～東京理科大学理工学部非常勤講師（2年生も担当）

山中悠嗣
Yuji Yamanaka

1980年京都府生まれ／2003年京都府立大学環境デザイン学科住環境学専攻卒業／2006年東京工業大学大学院修了／2004年～ＧＥＮＥＴＯ建築設計事務所／2008年～東京理科大学理工学部非常勤講師

有岡三恵
Mie Arioka

1967年香川県生まれ／1990年東京理科大学理工学部建築学科卒業／新建築社を経て2011年Studio SETO設立／2014～日本建築学会会誌編集委員／2014年～東京理科大学理工学部非常勤講師

アリソン理恵
Rie Allison

1982年宮崎県生まれ／2005年東京工業大学卒業／2009年NMBW勤務／2011年東京工業大学大学院博士課程単位取得退学／2011～14年ルートエー勤務／2011～14年アトリエ・アンド・アイ坂本一成研究室勤務／2014～15年日本工業大学非常勤講師／2015年一級建築士事務所tecoを金野千恵と共同設立／2016年～東京理科大学理工学部非常勤講師、神奈川大学非常勤講師

岩下泰三
Taizo Iwashita

1957年長野県生まれ／1982年武蔵野美術大学卒業／1984年武蔵野美術大学大学院修了／1988年～スペースラボ主宰／1995年～武蔵野美術大学非常勤講師／2001～03年東海大学非常勤講師／2004～08年東海大学特任准教授／2016年～東京理科大学理工学部非常勤講師

修員）／1998～99年岡部憲明アーキテクチャーネットワーク／1999～2006年谷口建築設計研究所／2006年戸室太一建築設計室設立／2008～11年法政大学デザイン工学部建築学科兼任講師／2016年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

高橋 堅
Ken Takahashi

1969年東京都生まれ／1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1995年同大学院理工学研究科修士課程修了／1996年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／1997～2000年青木淳建築計画事務所／2000年高橋堅建築設計事務所設立／2002年～東京理科大学理工学部非常勤講師（3年生も担当）

塚田修大
Nobuhiro Tsukada

1969年東京都生まれ／1993年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1995年早稲田大学修士課程修了／1996年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／1996～2000年伊東豊雄建築設計事務所／2001年塚田修大建築設計事務所設立／2014年～東京理科大学理工学部非常勤講師

宮原 亮
Akira Miyahara

1963年長野県生まれ／1986年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1986年松田平田坂本設計事務所（現松田平田設計）入社、同社総合設計室第二建築設計部長を経て2011年エムアーキ設立／2013年～東京理科大学工学部、2014年～同理工学部非常勤講師

細矢 仁
Jin Hosoya

1968年滋賀県生まれ／1991年東京理科大学工学部建築学科卒業／1995年同大学院工学研究科修了／1995～2000年妹島和世建築設計事務所／2003年細矢仁建築設計事務所設立／2003年～東京理科大学工学部、2015年～同理工学部非常勤講師／2006年～武蔵野美術大学造形学部建築学科非常勤講師

森清敏
Kiyotoshi Mori

1968年静岡県生まれ／1992年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1994年同大学院修士課程修了／1994～2003年大成建設設計本部／2003年～MDS共同主宰／2009年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

学理工学部非常勤講師

久野靖広
Yasuhiro Kuno

1972年茨城県生まれ／1996年東京工業大学工学部建築学科卒業／スイス連邦工科大学奨学生を経て東京工業大学大学院修士課程修了／2005年同大学院博士課程単位取得退学／2011年～アトリエ・アンド・アイ パートナー／2014年～東京理科大学理工学部非常勤講師

内藤将俊
Masatoshi Naito

1972年埼玉県生まれ／1996年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1998年同大学院修士課程修了／1999年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／2000～09年新居千秋都市建築設計／2009年内藤将俊建築設計事務所設立／2008年～東京理科大学理工学部非常勤講師／2016年茨城大学工学部都市システム工学科専任講師

廣瀬大祐
Daisuke Hirose

1974年長崎県生まれ／2000年東京理科大学大学院修了／隈研吾都市建築事務所勤務後、2002年コロンビア大学建築都市修景学部大学院修了（M.S.A.A.D.）／2005年アーキコンプレックス設立／2007年～東京理科大学理工学部非常勤講師／2016年～明治大学大学院建築都市デザイン国際プロフェッショナルコース（I-AUD）講師

萬代恭博
Yasuhiro Mandai

1964年神奈川県生まれ／1987年京都工芸繊維大学工芸学部住環境学科卒業／1987年～坂倉建築研究所／2006～12年東京理科大学工学部第二部非常勤講師／2013～16年東京電機大学非常勤講師／2016年～東京理科大学理工学部非常勤講師

宮下信頭
Nobuaki Miyashita

1972年長野県生まれ／1995年東京理科大学理工学部建築学科卒業／1997年同大学院理工学研究科修士課程修了／1997～2017年竹中工務店／2017年デザイン事務所MR-S設立／2011～16年東京理科大学理工学部非常勤講師

横尾 真
Shin Yokoo

1975年山梨県生まれ／2001年東海大学大学院工学研究科修士課程修了／2001～04年池田昌弘建築研究所／2004年OUVI設立／2011年～東京理科大学理工学部非常勤講師／2016年東京理科大学大学院理工学研究科博士課程修了、博士（工学）／2017年～ベオグラード大学建築学部特別講師（文化庁1年派遣新進芸術家海外研修員）

1
年生

空間デザイン及び演習 ── 課題1 Assignment 1

光の箱

Light Box

この課題では、単純で十分なボリュームのある箱を出発点として、そこに光を満たし、風を呼び込む事で空間をつくってもらう。箱にさまざまな操作を加えることにより、光の扱い方を習得。また内部空間を、一眼レフカメラを使って接写で撮影することを学んでもらう。視点を3つ設定し、魅力的な光の表現を求める。

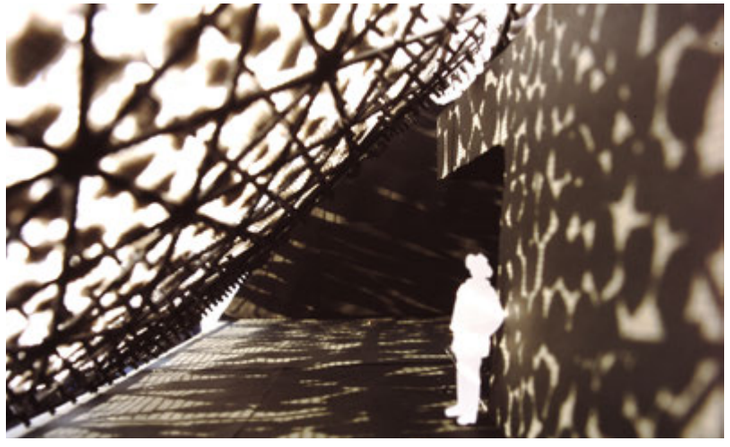
This assignment starts from a box, a simple but generous volume. The task is to create a space by filling the box with light and bringing in the air. Through various operations on the box, learn how to handle light. Learn how to make close-up photos by photographing the interior with a single-lens reflex camera. Establish three viewpoints and design an attractive expression of light.

担当教員 Supervisors

安原 幹 Motoki Yasuhara
岩崎整人 Yoshihito Iwasaki
小池ひろの Hirono Koike
山中悠嗣 Yuji Yamanaka
有井淳生 Atsuo Arii
バージェス アンドリュー Burgess Andrew

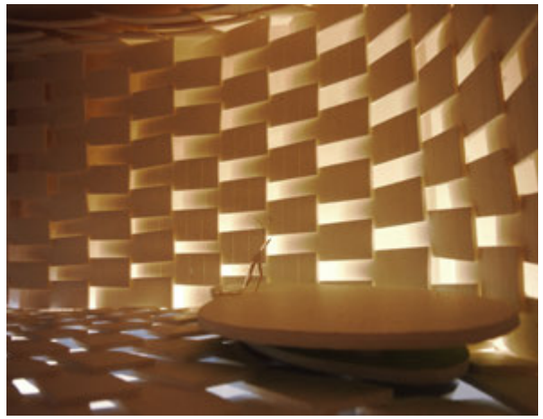
阿部萌子
Moeko Abe

野上昌孝
Masataka Nogami

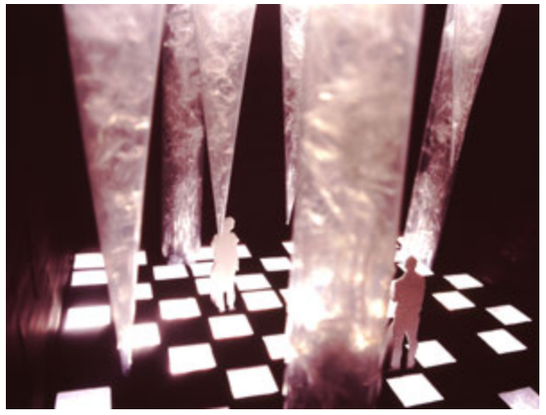


山田朋希
Tomoki Yamada

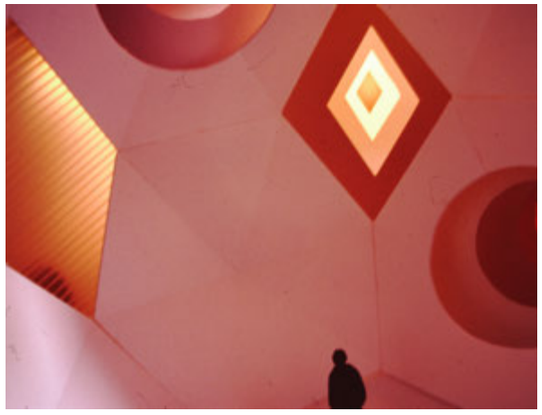
金子俊耶
Shunya Kaneko



三橋茉緒
Mao Mihashi



木原悠介
Yusuke Kihara



藤岡将大
Masahiro Fujioka

石崎達也
Tatsuya Ishizaki

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題2 Assignment 2

ピクニック

Picnic

ピクニックは社交の場である。集まる、座る、飲食する、歓談するといった行為を成立させるためには多面的なデザインを必要とする。またそれは社交空間であると同時に都市の中の公共空間でもある。自分たちの存在がその場の風景をどのように変え、道行く人びとからどのように見えるのかも含めてデザインしなくてはならない。この課題では、屋外で人と過ごす空間と時間をデザインし、実際につくって体験してもらう。

A picnic is a place for social interaction. It requires a multifaceted design to enable activities such as gathering, sitting, eating, drinking, and conversing. But while being a space for social interaction, it is also a public space in the midst of the city. The design must be conscious of how the presence of participants changes the landscape, of how it looks to passers-by. The assignment is to design a place to spend time with others outdoors, and to actually build and experience it.

担当教員 Supervisors

伊藤香織 Kaori Ito
安原 幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
中畑昌之 Masayuki Nakahata
有井淳生 Atsuo Arii
バージェス アンドリュー Burgess Andrew

飯田里緒／小笠原圭吾／金子俊耶／齊藤美雪／酒井亮祐／滝口悠也／野田真司／三原 律／山口結莉亜

Rio Iida/ Keigo Ogasawara/ Shunya Kaneko/Miyuki Saito/ Ryosuke Sakai/ Yuya Takiguchi/ Shinji Noda/ Ritsu Mihara/ Yuria Yamaguchi

岩田彩子／植田竜之／川田修也／佐藤 天／角 祥平／樽木奈生美／チョウ ソウ／藤本拓実／安田一貴

Ayako Iwata/ Tatsuyuki Ueda/ Shuya Kawada/ Takashi Sato/ Shohei Sumi/ Naomi Taruki/ So Cho/ Takumi Fujimoto/ Itsuki Yasuda

井上優美子／岩本健／上山駿介／古座拓磨／佐藤純平／武井あずさ／丹治純之介／比留間篤史／森田樹央

Yumiko Inoue/ Takeru Iwamoto/ Shunsuke Kamiyama/ Takuma Koza/ Junpei Sato/ Azusa Takei/ Junnosuke Tanji/ Atsushi Hiruma/ Nao Morita

1年生

空間デザイン及び演習 —— 課題3 Assignment 3

あなたの部屋を空間化せよ

Transform Your Room into Space!

1年生の「空間デザイン」の最後は、いよいよ実物（原寸大）への挑戦となる。自分の部屋を敷地と見立て、空間としてデザインすることを課題とする。〈空間化〉とは〈模様替え〉や〈改装〉とは違う。何をどうすれば今までの〈ただの部屋〉が〈空間〉と呼べるものになるのか、ということに1年間のトレーニングの成果をぶつけてもらいたい。

The final assignment for 1st-year “Spatial Design” is a life-size challenge. Think of your own room as a project site, and design it as a space. Transformation into a space is not the same as redecorating or remodeling. What needs to be done to transform what was “just a room” into a “space”? And how? The assignment is to apply the insights learned over the past year of training.

担当教員 Supervisors

伊藤香織 Kaori Ito
安原 幹 Motoki Yasuhara
大成優子 Yuko Onari
小池ひろの Hirono Koike
中畑昌之 Masayuki Nakahata
有井淳生 Atsuo Arii
バージェス アンドリュー Burgess Andrew

奥村夢大｜自分の部屋の光景

Yuta Okumura

楠野達郎｜空間の軽量化」

Tatsuro Kusuno

富坂有哉｜雨降る部屋

Yuya Tomisaka

二宮拓巨｜美術館「私空間」

Takumi Ninomiya

2年生

設計製図 I ── 課題1 Assignment 1

週末住宅＝もうひとつのイエ

Weekend House

近年、平日は都市に住み、土日はいわゆる田舎でのんびり過ごすといった、デュアルライフ（二つの拠点を持ち、両方の拠点を行き来しながら暮らす）を楽しむ人が増えている。本課題は、平日は東京に住み、土日だけ田舎で生活をしたいと計画している4人家族のための「週末住宅」とする。この4人家族に対し、東京での暮らしとは違う生活の質を提供するべく、自由な発想で住宅を設計することを課題の中心にすえる。（出題：垣野義典）

Recently, more people have begun to enjoy a dual lifestyle in which they live in the city during the week and spend Saturday and Sunday relaxing in the countryside – a lifestyle of moving freely between two homes. This assignment is a “weekend house” for a family of four that is planning to live in Tokyo during the week and spend the weekend only in the countryside. Approach the design freely and without preconceptions, and design a house that provides this four–member family with a lifestyle that is qualitatively different from their lives in Tokyo. (Yoshinori Kakino)

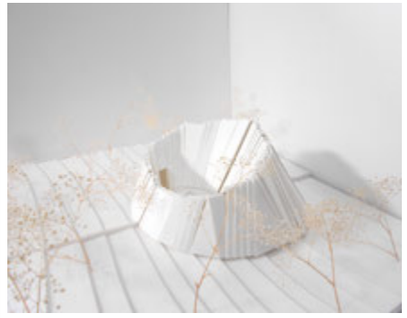
担当教員 Supervisors

垣野義典 Yoshinori Kakino
いしまるあきこ Akiko Ishimaru
大成優子 Yuko Onari
岡野道子 Michiko Okano
中畑昌之 Masayuki Nakahata
森 清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa
バージェス アンドリュー Andrew Burgess

総評 自然豊かな森を敷地とし、敷地面積1,600㎡、延床面積100㎡という、通常ではありえないほどゆるやかな条件を設定した。これは、自分の経験や既成概念にとらわれない、新たな住空間イメージが想起しやすいことを意図している。結果、総じてレベルの高い作品が多く見られた。敷地が広いことや自然に囲まれていること、敷地にゆるやかな傾斜がついていることを活かし、敷地の特性を建築になじませながらも、短期滞在の生活環境ならではの思い切った提案がなされた。（垣野）

中村浩司 ｜ 図と地のある別荘

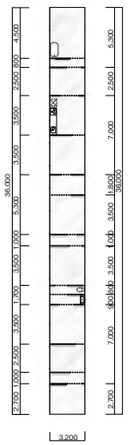
Koji Nakamura

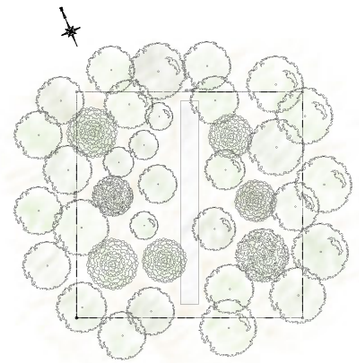


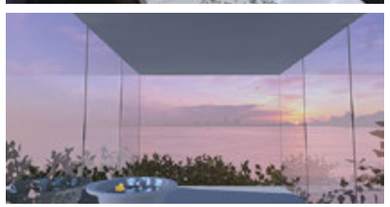
講評：中心をずらした円をふたつ描き、そこかから相似形の切妻屋根を連続させる明快な構成。そして、あえて屋根を架けられて空しか見えないようにした中庭に露天風呂をつくり、まわりの自然をよりいっそう強く感じさせることができるようにしたとのこと。とてもコンセプチュアルな提案であるが、ここまで内部空間および中庭空間をまわりと緑から切り離す必要があったのか、やや疑問が残る。（森）

辻川 樹｜ 繋がりの週末住宅

Tatsuki Tsujikawa



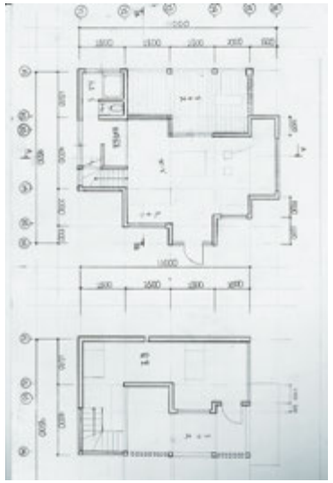




講評：斜面に対してフラットなスラブを突き出すことで、木々に囲まれた地面に接したところから木々より上のレベルの海を望めるところまで連続した空間をつくり、リニアに並べた壁の間隔とその壁に開けられた開口の大きさと位置を工夫することで多様な居場所をつくり出している。外壁は全面ガラス張りとなっているが、木々が夏の日差しから室内を守り、冬は燦々と日が差し込む。課題の設計与条件だからこその明快な提案である。（森）

七五三掛義和｜ 色彩住宅

Yoshikazu Shimekake



講評：内部から見る外部の景色を、建築の床・壁・天井の色を黒＝無とすることで、多彩に浮かび上がらせることを試みた提案。黒の壁・天井は丁寧で綿密なスタディの積み重ねにより配置され、東の少ない開口から朝の光を絞り込んで取り込み、西の大きな開口から夕日を穏やかに迎え入れる。光を吸収する黒ならではの、逆の発想で、景色と豊かに対峙できる美しい空間をつくることに成功している。
手を動かしながら、空間をつくりこんでいく姿勢はみごとで真摯だが、いかに客観的に言語化できるかが今後の課題になりそうである。（岡野）

2
年生

設計製図 I ── 課題2 Assignment 2

多文化シェアハウス
Multicultural Shared House

近年、観光客や留学生をふくめ、多くの人々が日本を訪れるようになった。一方、先進国として縮退しはじめた日本社会は、「シェアの時代」と言われるように、これまでの即物に満たされた生活から、人同士の関係や時間の質を重視するような価値観の転換が起こってきている。これからの日本では、異なる文化背景をもった人々同士でコミュニケーションを取りながら社会を形成していくことは不可避であろう。この課題では、「異なる文化背景をもつ者同士で居住空間をシェアすること＝多文化シェアハウス」を通して、新たな集住のあり方を提案してほしい。（出題:垣野義典）

Recently the number of tourists, students, and other visitors to Japan from abroad has been increasing. Meanwhile, as an advanced society that has begun to contract, Japan has entered what is called the “age of sharing”. A transition is occurring away from a lifestyle defined by material satisfactions and toward values that emphasize relationships and the quality of personal time. The society of the future will inevitably arise through communication between people with different cultural backgrounds. This assignment is to propose a new type of dwelling via a residential space shared between people with different cultural backgrounds = a multicultural shared house.

担当教員 Supervisors

垣野義典 Yoshinori Kakino
いしまるあきこ Akiko Ishimaru
大成優子 Yuko Onari
岡野道子 Michiko Okano
中畑昌之 Masayuki Nakahata
森 清敏 Kiyotoshi Mori
柄沢祐輔 Yuusuke Karasawa
バージェス アンドリュー Andrew Burgess

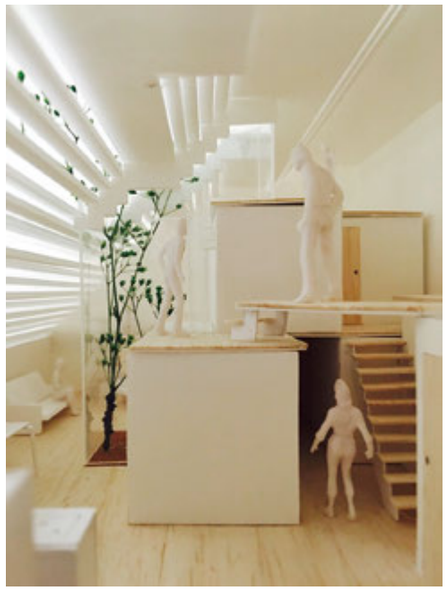
東京都台東区谷中3-10-25
用途地域:第一種住居地域
敷地面積:177m²

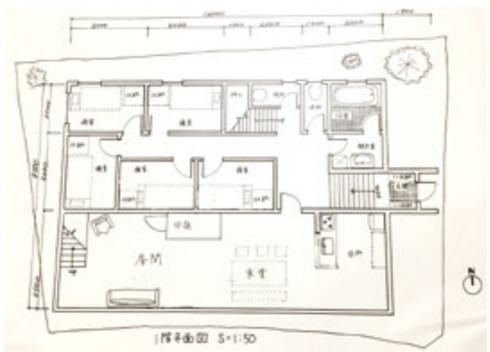
延床面積:150m²（許容容積率:300%）
建坪率:60%
構造・階数:自由

住人:大学生7人（留学生3人＋日本人4人）
ニュージーランド、中国、インドネシア、フィンランドから3カ国選ぶ

総評 第1課題とはうってかわり、敷地は高密な住宅地（東京・谷中）である。近年、外国人観光客が激増し、朝から夕方まで人の行き来が絶えず、文化がおりまざる敷地において、大学生7人（留学生3人、日本人学生４人）が住むシェアハウスを計画する。延床面積150m²という、7人で住むにはまずまずの自由度の中で、相当数の学生が「どのように個室を設け、何をどこまで、どのようにシェアするか」を建築に落とし込むことに成功している。また、敷地の特性をよみといて「地域に開く」というキーワードを新たに設ける学生が多数あらわれる一方、「多文化」というキーワードをどのように設計に落とし込むか、苦心する学生が非常に多く、これまで想起したことのない世界や文化と建築の関係について考える機会となった。（垣野）

塚本沙理 ｜
Sari Tsukamoto



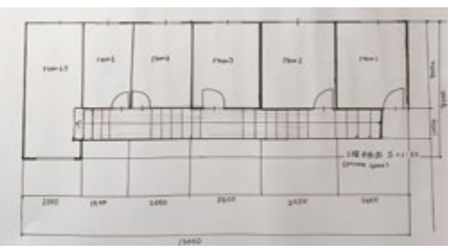


講評：プライバシーを確保したい個室をひな壇状に積んで、その上をシェアスペースとする提案。階段状の屋根とガラス越しにシェアスペースは街と連続し、とても魅力的な風景をつくっている一方で、個室の快適性が低い。もう少しシェアしない場所の配慮があると、リアリティも出て、さらに完成度の高い提案になっただろう。（森）

常泉佑太 ｜路地にあふれ出す風景
Yuta Tsuneizumi

講評：「多文化が混ざりあうシェアハウス」という課題に対し、住人同士が直接的な交流を行うためだけでなく、常日頃、共用空間にさまざまな私物を「あふれ出させる」ことで、互いに生活の気配と風景を共有することを意図している。空間を、谷中の街並みの延長と捉え、細い「路地」が幾重にも囲みとる構成になっている。各個室はＬ字型でワンルームの中に奥行きを持たせ、さらに個室に設けた開口により、共用部や外部の風景との関わりにあわせて、個室内の居場所を選択できる。個人が自分の居場所を確保しつつ、共用部でもささやかに自分の領域を主張しあうことで、「シェアハウス」としての個性が強化される仕組みと空間構成は秀逸である。（垣野）

野邊 茜｜Tsumugi-House
Akane Nobe



講評：1 階をまちとつながるオープンな共有の場とし、その上部に個人の室を配した案。あえて中間的な場を設けず、大きなオープンスペースと小さな個室のみで計画することで、そのスケール感の差を生かした提案となった。オープンスペースと個室との開口や、個室自体のあり方についても、小さなスケールでのスタディを粘り強く重ね、視線や人の動作を丁寧に考慮して高低差が導き出されており、おおらかでありながらも繊細な場を生み出している。私がここに住んだとしたら、この建物に住む、のではなく、このまちに住んでいる、と感じるだろうと思ったところにも魅力を感じた。（大成）

2 年生

設計製図 Ⅱ —— 課題3 Assignment 3

小規模ギャラリー
A Small Gallery

上野公園内の東京文化会館に隣接する敷地（現在は正岡子規記念球場、約4200㎡）に延床面積1000 ～ 1500㎡ほどのコレクションを持たない小規模のギャラリーを設計する課題である。限定した作家のためのものではなく、広い意味での今日のアートの展示を行うものとし、空間的性質の異なる屋内展示空間（直方体）3つと外部展示空間2つを設けること、異なる床レベルを複数設定すること、また床レベルを結ぶ動線をバリアフリーとするために階段のほか、スロープ、エレベーターを設けることが条件として課された。（出題：山名善之）

Design a small gallery on the grounds of the Masaoka Shiki Memorial Baseball Park, to the west of the Tokyo Bunka Kaikan concert hall. Exhibits will not be limited to a particular artist, and there will be no permanent collection. It will exhibit contemporary art in the wide sense, including architecture. Provide three cuboid exhibition spaces , each with different spatial qualities, and two outdoor exhibition spaces. Circulation through the exhibition spaces may be freely imagined. The gallery shall have multiple floor levels, connected by slope and elevator as well as stairs. The exit shall be near the entrance, and space for an umbrella stand shall be provided for rainy days. Take admission fees into consideration, but design the cafe so that it can be used by the general public as well.

担当教員 Supervisors

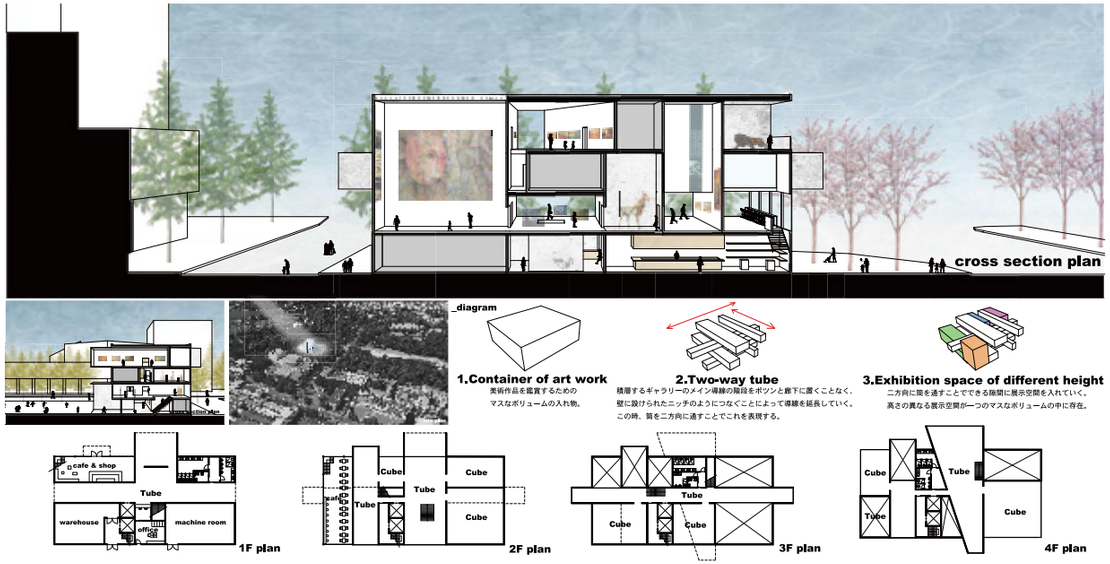
山名善之　Yoshiyuki Yamana
高橋 堅　Ken Takahashi
塚田修大　Nobuhiro Tsukada
戸室太一　Taichi Tomuro
細矢 仁　Jin Hosoya
宮原 亮　Akira Miyahara
森 清敏　Kiyotoshi Mori
有井淳生　Atsuo Arii

所在地：東京都台東区上野公園5-20（正岡子規記念球場）
用途地域：第一種中高層住居専用地域
敷地面積：約4,200m²

延床面積：1000 ～ 1500㎡程度
展示室、エントランスを除く必要諸室：カフェ、事務スペース、作家控室、倉庫、機械室、トイレ等

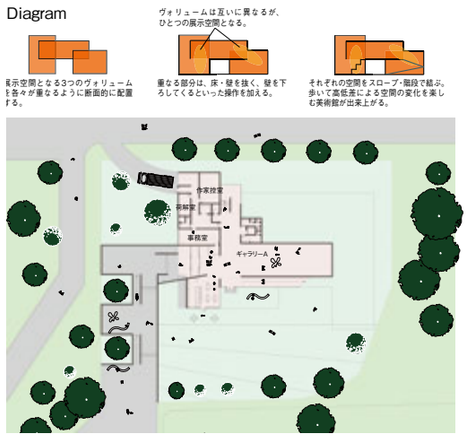
総評 敷地の周りに公共施設である東京文化会館、国立西洋美術館等があり、それら施設の断面寸法等と比較しながら課題に取り組んだ作品が多く、公共建築に取組む最初の課題としてスケールを考慮できた課題が多かった。また、異なった床レベルをもつ空間の質の異なる展示室を如何に連続的に回遊動線において繋ぐかについても、様々な試みが為されていた。（山名）

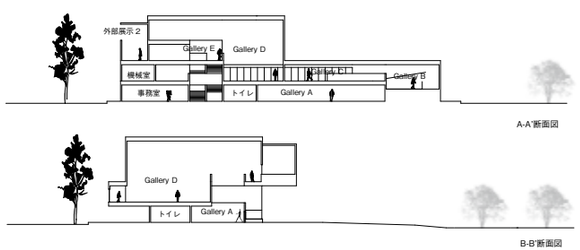
辻川 樹｜ Tube & Cube
Tatsuki Tsujikawa



講評：異なる長さや断面の「筒」を２方向に積層させることで発生する展示空間と動線計画が、そのまま外部の形態にも明確に現れてくる提案である。一般的なギャラリーや展示室のあり様からすると、外部形態から内部の体験が類推されることはあまりないことが多いけれども、上野公園のように公園全体が美術芸術鑑賞空間となっている環境の中に置かれる提案として、感動に繋がる新しい方向性、と高く評価した。図面とパースなどの表現や模型の製作精度と作り込みも抜きん出ている。今後の課題として、建築構造のリアリティが作品にどんどん反映されることを期待したい。（細矢）

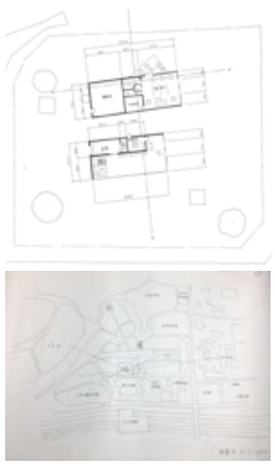
大須賀寛輝｜ Over lap
Hiroki Osuka

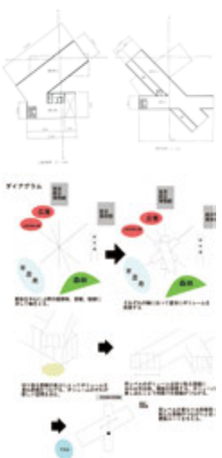




講評：上野公園に建つ公共建築としての小規模ギャラリーのスケールがよく捉えられている。敷地におけるエントランスへと向かうアプローチのあり方から始まり、スロープによって展示空間へ誘う空間展開も内部空間だけでなく、建築の表情の外部への現れしても秀逸である。また、それぞれの展示空間における自然光の取り入れ方にも配慮がされ、異なった空間の質が担保されている。連続する内・外部の展示空間の展開が巧みで豊かな建築的プロムナードが実現されている。（山名）

高梨 淳 ｜ 上野をつなぐ美術館
Atsushi Takanashi





講評：上野公園の敷地近辺に存在する建築物や樹木、広場等に対して向けられた「筒」を積層させた作品。変化に富んだ内部の断面的な空間展開のみならず、それぞれの空間が敷地外部の都市環境と関係づけられている点が秀逸である。また、美術館という、作品を鑑賞する場所を作る課題に対して、建物の周辺環境に鑑賞する対象を見出した点にオリジナリティがある。外観は目新しいものではないが、上野公園の都市的スケールと歴史性に対しての提案として評価できる。（有井）

2年生

設計製図 Ⅱ —— 課題4 Assignment 4

表参道ライブラリー

Omotesando Library

表参道から少し入った住居地域側と離接する近隣商業区域の、南東側と北東側に道路を持つ角地を敷地（1190㎡）とし、そこに図書館を設計する課題である。課題は前半と後半に分かれる。前半課題は陰影による一点透視図による空間の重心、ムーブメントを考慮しながら建築的プロムナードのスタディを進めるというものである。その際、5×5スパンの正方形構造グリッドを持ち、30×30mの正方形の外形、吹抜を持つ2階建てといった様々な条件のなかで設計試行をすることが求められた。それに対して後半は同敷地において、＋αのプログラムと床面積を新たに課すと共に同敷地に於いて前半課題の全ての細かい条件を外して設計することが求められた。（出題：山名善之）

Design a library for the Omotesando area. The site is on a back street one block in from the main Omotesando boulevard. It is close to a subway exit and has relatively heavy foot traffic. The library will of course serve the immediate neighborhood, but it should also take advantage of the convenient location to welcome a wide range of users. The objective of this assignment is to understand, via the bookshelves and reading seats, how architecture is configured from unit spaces, and to learn how unit spaces are dimensioned and laid out. Further, as public architecture, the library must take the surrounding environment into consideration, and it will require two types of circulation ñ one for visitors and one for services. Understanding these two requirements is another objective of this assignment. (Yoshiyuki Yamana)

担当教員 Supervisors

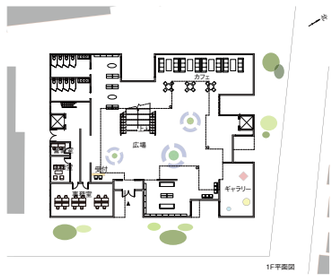
山名善之 Yoshiyuki Yamana
高橋 堅 Ken Takahashi
塚田修大 Nobuhiro Tsukada
戸室太一 Taichi Tomuro
細矢 仁 Jin Hosoya
宮原 亮 Akira Miyahara
森 清敏 Kiyotoshi Mori
有井淳生 Atsuo Arii

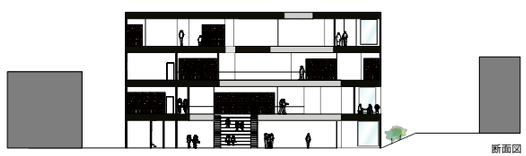
所在地：用途地域：近隣商業地域
延床面積：1500㎡（前半）、約2000㎡（後半）
S造2階建て
柱スパン（5500±300㎜）
各階階高（3750㎜）
天井高（3000㎜）
蔵書数（70000 ～ 80000冊）

総評 前半課題は建築的プロムナードを可能にする流動空間を実現するために様々な条件が課されており、その意味を一つずつ考えながら取り組めた作品も多く、最終的に良い作品に求めあげたものが概して多かったが、グループによってはそれらがあまり考慮されず中途半端なものになっていたものもあった。後半課題は設計条件を緩めたこともあり、課題を進めるにあたって戸惑いを持った学生が多かった。しかし、前半課題と対比的に考え、前半課題の条件では実現できないものは何かと考えた学生たちは良い結果に短時間のうちに収斂していった。（山名）

佐伯雅子 ｜ Square Square—四角と広場

Masako Saeki

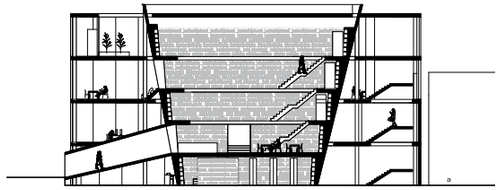


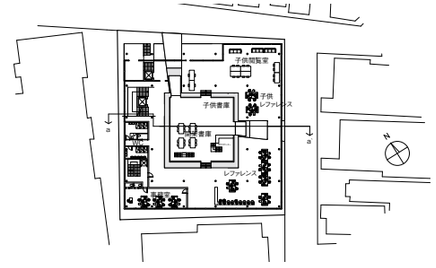


講評：制約の多い第１課題のギャラリーから、自身の裁量で制約を外すことのできる第２課題のライブラリーでは、個々人の構想力が求められる。佐伯案は、第１課題での「内部に広場を持ち込む」というアイデアをより立体的に展開させたものである。図書館の大きなスペースはさまざまなキャラクターをもった小部屋「四角」に分割され、それらにズレ＝襞を設けることによって内部と外部に都市の様相を取り込もうとしている。さらにそれらの小部屋は１階の「広場」によって統合されている。「四角」が単に都市の複雑さだけを醸し出すのではなく、「広場」があることで〈理想の図書館〉は〈理想の都市〉として構想されていると言えようか。（戸室）

大野向輝 ｜ 共生（open/close）

Kohki Ohno

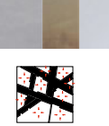


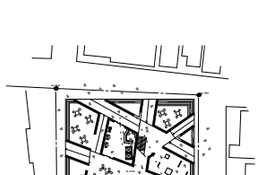


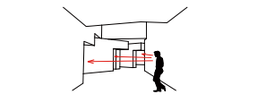
講評：ときに二分法という手法はシンプルでありながらクリアに問題を解決できることがある。この課題では敷地環境からも多様な図書館の利用者が想定できる状況であるが、作者は利用者を、カフェなど図書館以外を気軽に利用する層と、いわゆる図書館機能部分を利用する層とに大きく整理する。そして空間を二分する逆さの四角錐形状の構築物によって、開放的で明るい場所と静かで落ち着きのある場所の異なった2つの空間を作りだし、それぞれ利用者に提供する。利用目的の異なる両者が問題なく一つの空間に共存できる状況は、公共建築において理想的な在り方である。（塚田）

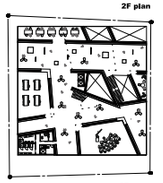
辻川 樹｜ Urban hangout

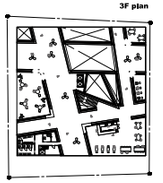
Tatsuki Tsujikawa











講評：平面方向に錯綜する壁が、垂直方向にランダムに積層され、空間分節を繰り返しながら多様な場所を生み出す。作者はその場所の質を丁寧に観察し読み解き、そこに図書館の必要な機能を挿入している。初めてこの施設を訪れる利用者は、いろいろな場所から、自分の居着きのし易い場所を探し出し、思い思いの図書館利用をするはずである。ともすれば均質的な一室空間によって自動的に構成される図書館空間を、偏質的な細分空間によって超えていこうとする態度はとても共感できる。（塚田）

3 年生

設計製図 Ⅲ —— 課題1　Assignment 1

自分の通った小学校の現代化プロジェクト

Project to Modernize Your Own Grade School

誰でも通ったことのある慣れ親しんだ施設、小学校を題材として、公共施設のデザイン・計画を学ぶ課題。自身が通った小学校の改築を通じて、これからあるべき小学校の提案を求める。留意点として、下記が挙げられた。
1) 新しい教育に対応した学校施設
2) 生活の視点から見た学校施設
3) 地域社会と学校施設
4) エコロジーに配慮した学校施設(出題:Cリーグ)
所在地:各自選択　主要用途：小学校

*千葉県にある5大学の建築系学科（Cリーグ）で共通の課題を出し、合同講評会などを行っている。

This assignment approached the design and planning of public facilities by choosing a subject that everyone is familiar with – the grade school that they attended themselves. Via a project to modernize the school that they attended, students were asked to propose a grade school as it should be in the future. Special attention was requested for the following points.

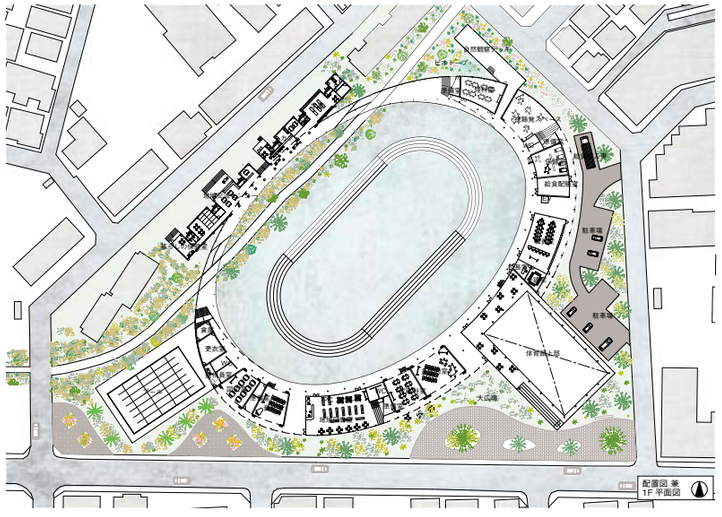
1) Support for new types of education
2) The school as seen from daily life
3) The school and the community
4) Consideration for ecology
(Assigned by:C–League)

担当教員 Supervisors

アリソン理恵	Rie Allison
岩下泰三	Taizo Iwashita
久野靖広	Yasuhiro Kuno
高橋 堅	Ken Takahashi
内藤将俊	Masatoshi Naito
廣瀬大祐	Daisuke Hirose
宮下信顕	Nobuaki Miyashita
横尾 真	Shin Yokoo
柄沢祐輔	Yuusuke Karasawa

太田孝一郎 ｜「わ」の小学校

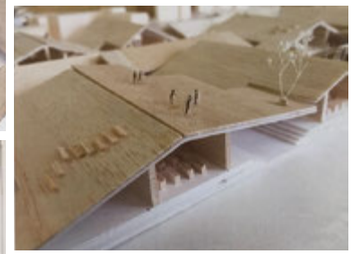
Koichiro Ota



講評：小学校というのは、地域の核となる施設のひとつである。この案は周辺をよく観察し、敷地に隣接した現状暗く閉ざされている緑道と、空室の多い団地の一階部分を計画の中に取り込むことで、既存の環境を読み替えながら地域の活動の中心となるようなまとまりをつくり出しており、そういった枠組みのつくり方を評価した。リング状のヴォリュームについては半外部や外部を取り込むことで快適な環境をつくり出そうとする努力は見えつつも、あと一歩身体に引きつけたスタディをすることで、図式の明快さのみに留まらない、より魅力的な案になったのではないか。（アリソン理恵）

盛田瑠依 ｜ 山で紡ぐ小学校

Rui Morita



講評：本小学校は、校庭の片隅にあった小高い山で遊んだ設計者自身の体験と教育プログラムとの融合への挑戦である。
台地に置かれた丘のような切妻屋根を棟が直交するようにグリッド上に密接に並べている。下にクラスルームを含む６つの屋根と特別教室を含む６つの屋根が挟み合うように配置されることで、各々の機能が複雑に絡み合う他、隣接する屋根が音楽室用の傾斜席や図工室の屋外活動の場となるなど豊かな空間をもたらしている。また、全ての屋根がほとんど隙間なく並べられた平屋建てであるにもかかわらず、全部屋に完全な採光と通風、開放的な庭を確保しており、どこからでも自由に出入りできる点からも画期的な案といえる。（内藤）

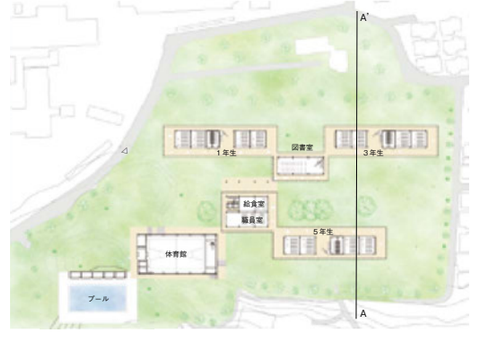
丹治遥香 ｜ 自然の中を巡る小学校

Haruka Tanji

Concept

真鍋小学校で地域の人からも親しまれている５本の桜の木を生かし、校庭全体を森にする。森の中に教室を分散させ、森の中を巡るように中間領域となる回廊でつなぐ。回廊は通り道となることもあれば、休み時間におしゃべりしたり遊ぶ場であったり、教室の延長として学びの場になることもある。子供達は教室、校庭間を自由に駆け回りながら元気に過ごす。お花見の季節には、回廊に子供達や地域の人々が集まり校舎と校庭が一体となってお祭りが行われる。

1F Plan
S=1:3000



講評：ラーメン構造の分棟校舎を緩やかに繋ぐ小学校の提案。外周に廊下を回し、ガラスで閉じるというしくみは単純だが、全ての教室が最低２方向に開く効果は大きい。明るさは廊下の幅で調整され、気持ちの良い風が常時通り抜けるだろう。学年毎にまとめられた教室群や結節点にある共用部という配置も理に適っている。ここまでプランを整理できるのならば、是非各所の素材まで検討し、実際に展開されうるシーンがどうなるかまで考える必要が出てくるだろう。（高橋）

3 年生

設計製図 Ⅲ —— 課題2　Assignment 2

南青山culture connection

Minami Aoyama Culture Connection

この敷地は根津美術館に隣接した交差点に位置している。この敷地周辺の開発はまだまだ続き、多くの集合住宅や商業施設が建設されていくと思われる。スピードの速い開発の結果、旧住民と新住民のコミュニケーションは取れず、また住民の階層もバラバラである。旧住民は主にリタイアした団塊の世代、30~40代の新住民との間に地縁や血縁でない新しいコミュニケーションの場作りは不可欠、急務であると考えられる。数多くのデザイナーの出発点となったこの地域から新しい文化を発信する場所として、公園などののんびりした場をもつ公共施設をつくることが重要だ。（出題:新居千秋）

The site is at an intersection adjoining the Nezu Museum. Development of the area around the site is still continuing, and many new housing and retail buildings will be built there. Due the high pace of development, there are class differences and a lack of communication between old and new residents. Old residents belong mainly to the retired baby–boom generation. There is an urgent need for a new sphere of communication with the generation of new residents, most in their 30s and 40s, one that does not depend on family ties or shared home towns. This area has inspired many designers at the start of their careers. It needs a new cultural communication space – a park or other public facility where residents can relax and get to know each other.

担当教員 Supervisors

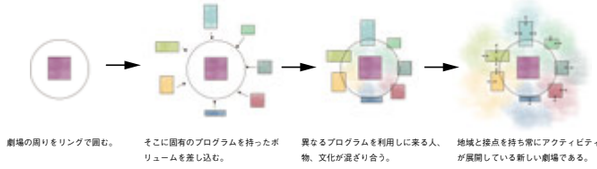
新居千秋　Chiaki Arai
アリソン理恵　Rie Allison
岩下泰三　Taizo Iwashita
久野靖広　Yasuhiro Kuno
高橋 堅　Ken Takahashi
内藤将俊　Masatoshi Naito
廣瀬大祐　Daisuke Hirose
宮下信顕　Nobuaki Miyashita
横尾 真　Shin Yokoo
柄沢祐輔　Yuusuke Karasawa

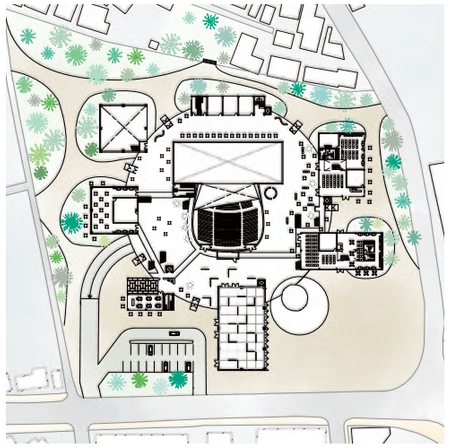
敷地:東京都港区
南青山4丁目23.24.25.26（東京メトロ表参道駅下車）
敷地面積:17,800㎡

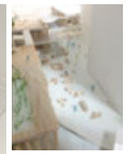
第一種中高層住居専用地域（建蔽率60%、容積率300%）
第二種高度地区　準防火地域

太田孝一郎／細野拓哉／山本剛志｜ Mix at Ring

Koichiro Ota/ Takuya Hosono/ Tsuyoshi Yamamoto



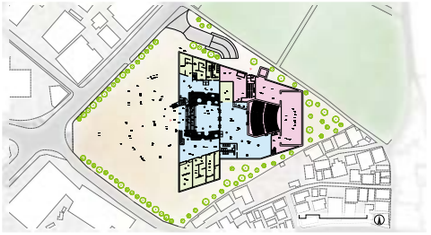




講評：敷地の中心部に置かれた大ホールに対し、360°取り囲むようにホワイエ的な空間を配した円形のフォルムが印象的な計画である。一般的にホール非稼働時には無駄となってしまうホワイエを常時開放して賑わいを創出し、付加価値の高い空間へ転換することに成功している。そこには図書館やレストラン、ショップやスタジオといった各々固有の機能を持った方形ボリュームが貫入して豊かなシークエンスを伴った空間が現れ、同時に各々の機能から染み出たアクティビティが交ざり合い、反応することを狙いとしている。ホールに付随する諸室を地下階に集約することで地上部での回遊動線を分断することなく、サプライ・アクセスルートを確保している点も秀逸な計画と言える。（宮下）

稲角 樹／岡本俊英／川口大輝 ｜ 屋内広場＝屋外劇場

Tatsuki Inazumi/ Toshihide Okamoto/ Daiki Kawaguchi



講評：課題作業が始まってから提出まで、本当に彼ら３人はよくしゃべっていた。好奇心いっぱいの議論が製図室で響き渡っていたのが印象的だった。
デジタルツールでヴォリュームや視線を検討して、生まれ出た複雑な形状を２次元化して模型を作り、再度スケールを確かめる彼らのスタディ手法は、実務レベルと似ていて、毎週違った考え方の模型がエスキスに登場した。四角い物から発想を展開したり、２次元から発想を膨らませることでは生れにくい、わがままな形の模型を毎週つくってきた。彼らの密な試行錯誤が、視線の広がりと誘導、劇場の実用的な利活用、複雑な地形への建築の寄り添い方、すべてにおいて他の案を圧倒的に上回ったと思う。（廣瀬）

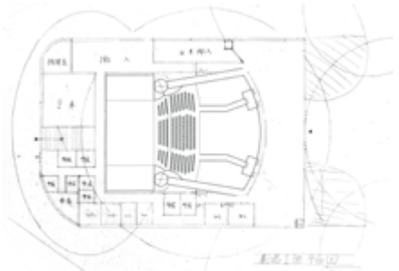
有吉泰洋／伊藤哲朗／都築澪｜だんだんと

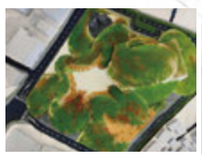
Yasuhiro Ariyoshi/ Tetsuro Ito/ Mio Tsuzuki

講評：緩やかな丘の上に建つ劇場の提案。アプローチ途中に散在するように見えるカフェやギャラリー、図書館等は丘の裏側で全て繋がっており、サービス動線も確保されている。丘の上と下でぐるりと繋がる動線は、見た目の単純さを裏切る面白い構成を持つものの、まだ全ての箇所が詰められたプランにはなっていない。模型に比べ図面表現が稚拙。さまざまな建築のプランをよく見よう。（高橋 堅）

北川淳／佐藤涼平／高橋大輝｜踊る大地

Jun Kitagawa/ Ryohei Sato/ Daiki Takahashi





講評：敷地いっぱいに広がる一連の蛇行したランドスケープの下に劇場や図書館等で構成された大きな複合施設が挿入されている。うねりに合わせて接地する方向が内側や外側へと入れ替わることで、あらゆる場所からの上り下りが可能となっているばかりか、建物内の活発な活動が敷地いっぱいにあふれ出るよう、みごとに計画されている。
また、ランドスケープの動きが劇場内にまで侵食することで、単調になりがちな客席に躍動感を生み出すことにも成功しており、非常に完成度の高い作品である。（内藤）

3
年生

設計演習 伊藤 香織＋バージェス・アンドリューユニット　Kaori Ito & Andrew Burgess Unit

SECTION!: 都市の1km断面

SECTION! 1 Kilometer Section of the City

東京の平面に1kmの線分を引き、その断面図（1/500スケール、長さ2m）を作成。断面図には、建物、道路、植栽、河川、鉄道など1kmの線分で切られるものを描く。さらに、その1kmを観察・分析し、断面図上に表現する。本課題の目標は、(1) 都市のある特定の範囲を調べ、描き、観察し、分析し、そして理解すること、(2) 都市のレイヤやきめのパタンを探り、そこに潜在する関係性を発見すること、(3) そのパタンや関係性を明快で美しいドローイングによって視覚的に伝えること。
(出題:伊藤香織)

Draw a 1km line on a plan of Tokyo, and create a section drawing of that line (scale 1/500, length 2m). On the section drawing show buildings, streets, plantings, railways, and the other things inside the 1km line. Further, observe and analyze that 1km, and express it on the drawing. The objectives of this assignments are 1) to investigate a certain range in the city, to draw it, observe it, analyze it, and understand it; 2) to explore the layers and texture patterns of the city and to discover the latent relationships that underlie them; 3) to convey those patterns and relationships visually in a clear and beautiful drawing.

鈴木由貴 ｜ 2016 年 10 月 8 日 渋谷

Yuki Suzuki

講評：再開発工事の真っ最中である渋谷駅近辺は、昨日と今日とでは状態が違うことが見てわかるくらい、日々変化している。その中で、2016 年 10 月 8 日の姿を断面図として留めようとしたのが本作品である。渋谷の谷地形とともに、その谷が稠密な人の活動とそれを支える構造物で埋められていることがわかる。範囲内の建物の悉皆調査により、各施設や店舗の特徴を踏まえて描かれている。詳細な描き込みによって、２色で描かれたシンプルな色使いも活きている。駅、飲食店、ホテル、劇場、駐車場など、渋谷駅を中心とする都市空間がいかに複合的・立体的に展開しているかが詳細に描かれ、見ていて飽きることがない、力作である。（伊藤）

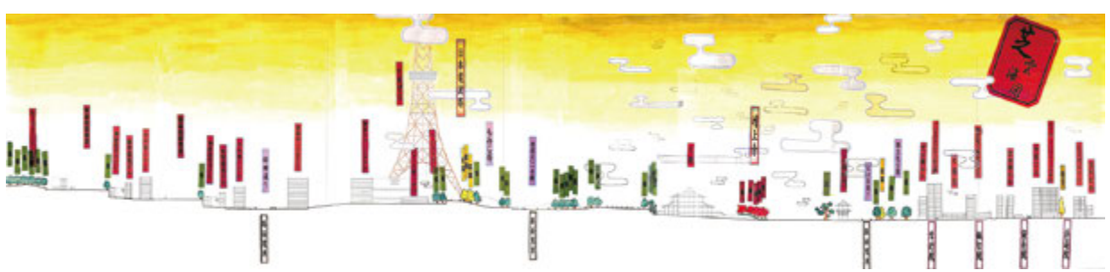
坂口小色 ｜ 夜 8 時の浅草

Koiro Sakaguchi

講評：隅田川を中心に、西に浅草、東に吾妻橋を切った断面図。作者は、いろいろな時間帯に現地を歩いてみることで、夜は隅田川の両岸で明るさが異なることに気づき、夜の断面図で表現することにした。看板などの放つ光が白色で、営業中の店舗等が黄色で表現されている。光の表現が幻想的で美しい。象徴的な雷門の見え掛かりだけでなく、うっすらと見え掛かりで描かれた東武浅草駅ビルの頂部が光を放っている様子も浅草のまちの形をよく表している。均一に塗りつぶされた地中と、建物・交通・人の活動で暗い中にも様々なグラデーションがある空中、その間にある隅田川の水の表現が、豊かな表現となっている。（伊藤）

安斎幸太郎 ｜ 芝雲海図

Kotaro Anzai



講評：芝大門から麻布台までの断面を名所絵風に描いた。この土地の歴史を調べ、古くは江戸初期に遡る増上寺三解脱門から、東京タワー、近年のオフィスビルや集合住宅まで、新旧の建造物を描くとともに、すでに失われた寺社や路面電車など過去の文脈をGL の下に記している。一方、現在のこの場所についてもきめ細やかに観察し、1km の間にある樹木の樹種のすべてを忠実に載せている。新旧入り交じる東京の歴史的な深度と多様性を楽しんで描いていることに好感がもてる作品である。(伊藤)

姫野滉一郎 ｜ 中野日常

Koichiro Himeno

講評：再整備の進む中野駅北口を中心とした断面図。再整備は西が先行し、旧警察大学校跡地の四季の都市整備、再整備を間近に控えた中野区役所・中野サンプラザを挟んで、中野ブロードウェイへと続くサンモール商店街と住商混在の低層密集市街地へと連なる。作者は、現地を観察する中で、新旧や規模の多様性だけでなく、人が多く賑わう時間帯の違いにも着目した。大学は日中に多くの学生で賑わい、中野サンプラザは夕刻から人が集まり、飲み屋街には夜に賑わう。１枚の断面の中で、それぞれの場所が最も賑わう時間を空の色で表現している。ハードラインで描かれた断面と水彩で描かれた空のコントラストが美しい。（伊藤）

3年生

設計演習 岩岡竜夫＋柄沢祐輔ユニット　Tatsuo Iwaoka & Yuusuke Karasawa Unit

宇宙建築＝UZUMARCH

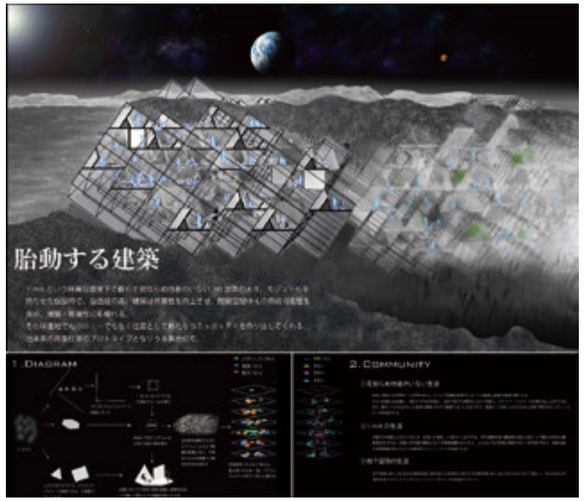
Extraterrestrial Architecture = UZUMARCH

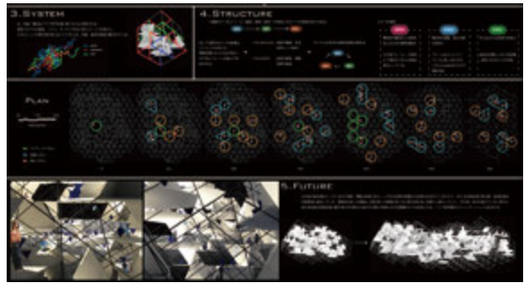
アイデアコンペ（第3回宇宙建築賞）の課題内容を敷衍したもの。テーマは、UZUMARCH。日本の宇宙科学者らが中心となって進められているUZUMEプロジェクトによって発見された月面洞窟を利用して、そこにどのような居住施設（10世帯程度）が建設可能=ARCHITECTUREであるかを想像すること。日常から遠く離れた月面の抽象的な世界に、計画が実現可能なところまで来ていることに気づくことが、この課題の重要な意義である。（出題:岩岡竜夫）

This assignment was developed on the basis of an idea competition that I helped judge. The competition was entitled UZUMARCH. Caves on the surface of the moon have been discovered by Japanese scientists working in the UZUME project. The idea was to imagine the kind of dwelling (for about 10 households) that might be possible using these caves = UZUME + ARCHITECTURE. Specific places and scales exist. This assignment is significant because it reminds us that we have come to the point where architectural designs and urban plans to take advantage of the lunar topography and orientation are already possible.

有吉泰洋／姫野滉一朗／横山一晃 ｜ 胎動する建築

Yasuhiro Ariyoshi/ Koichiro Himeno/ Kazuaki Yokoyama

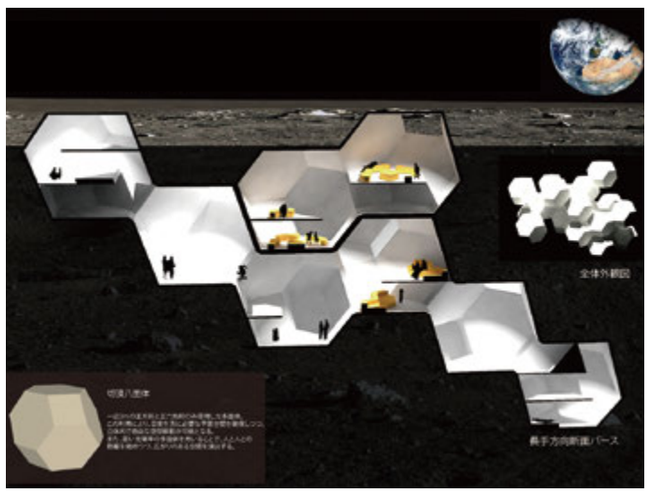


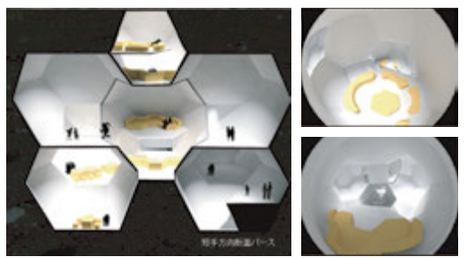


講評：立方体の頂点を外して斜めに切断すると正六角形の切断面が現れる。その六角切断面を水平になるように、立方体（フレーム）を斜めに立ち上げ、それを3次元的に展開していったものが、この居住施設全体の骨格となる。月面の土を固めて作られた六角形の水平パネルは、住居の中の部屋の床となり、それを支える中空フレームは建物全体の構造部材であるとともにインフラのネットワークや上下階を移動するための動線にもなっている。極めてジオメトリー性が強い構造体は、地球外施設のイメージに重なる一方で、地球上に建設されても面白いのでは。（岩岡）

佐藤涼平／針生貴由／山名美月 ｜ GHEXA

Ryohei Sato/ Takayuki Haryu/ Mizuki Yamana





講評：ある大きさの切頂多面体をひとつのルームとして、それを互いに接続させながら3次元的に展開した居住施設である。この空間の発想は、子供の時に出会った遊具の記憶から来ているという。ひとつの入口から中に入っていくと、直角のジャングルジムではないので、迷路のような空間が広がり、開口部の先にまた開口部があるといったシークエンスを経験する。全体が地下に埋められ、まるで巨大な蟻の巣のような空間は、住戸ユニットで閉じることなく、共有の概念に基づく共同活動を前提とした施設であり、未来の人口増加に対しても拡張性がある。（岩岡）

3年生

設計演習 岩岡竜夫＋柄沢祐輔ユニット　Tatsuo Iwaoka & Yuusuke Karasawa Unit

都市のパブリックスペース

Urban Public Space

18世紀のイタリアの建築家ジャンバティスタ・ノリは、当時のローマ中心部の白黒地図を作成した。その特徴は、外部空間／建物を白／黒で表すのでなく、公共空間／非公共空間を白／黒で示していること。パンテオンの内部や教会の内部は白＝公共空間であり、個人住宅の中庭や商店の内部は黒＝非公共空間となっている。現代都市に、白い領域をより拡張させることが、すべての建築・都市プロジェクトの社会的価値と言えるではないだろうか。（出題:岩岡竜夫）

The 18th–century Italian architect Giambattista Nolli created a black–and–white map of center of Rome in his time. A novel characteristic of his map is that instead of shading buildings in black and leaving exterior spaces white, he used white and black to denote public and private spaces. The interiors of churches and the Pantheon are public spaces, so they are depicted in white, while the gardens of private citizens and shop interiors are depicted in black. Although it would not be possible to capture a contemporary city like Tokyo with the same simple division into black and white, it does seems possible to say that expanding white areas like a game of Othello is a social value for all architectural and urban projects. In that sense, several proposals showed evidence of a serious approach to issues raised by the assignment.

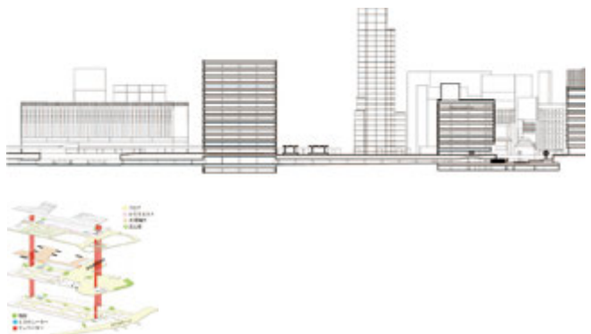
太田孝一郎 ｜ Fluid Road—二つの街を繋ぐパブリックスペース

Koichiro Ota

講評：いわゆる都心の廃線再利用プロジェクトは、ニューヨークやパリなどではすでにポピュラーなものであるが、東京都内にはまだ出現していないのではないか。東武浅草線の浅草から東京スカイツリーまでが地下化されることになれば、隅田川に架かる鉄道橋がそのまま人道橋に生まれ変わる可能性がある。ただ単に遊歩道になるだけでなく、この作品に描かれるように、複線のレールをそのまま使ってさまざまなイベントが創造されるだろう。TOKYO の新たなスポットになりそうだ。（岩岡）

飯田将／佐野健太 ｜ Shinjuku East Entrance Plaza—呼応する東西口

Tadashi Iida/ Kenta Sano



講評：ノリの地図上の白いエリアがまた拡張する。JR 新宿駅の地下構内の真ん中に通り抜け通路（＝パサージュ）ができるらしい。改札の位置を移動し分散させることでそれは可能となるのだが、これによって、新宿西口のロータリー広場とルミネ前の東口広場が、完全バリアフリー化され結ばれることになる。この作品は、坂倉準三によって設計された西口広場に対峙させつつ、新たに東口広場をどうデザインするかという難しいテーマに対して、駅前を構成する既存のエレメントを利用しつつ果敢に取り組んでいる。（岩岡）

3年生

設計演習 垣野義典＋廣瀬大祐ユニット　Yoshinori Kakino & Daisuke Hirose Unit

東京ゲストハウス

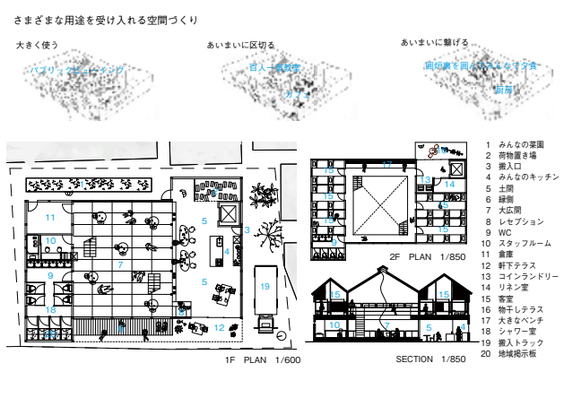
Tokyo Guest House

近年、観光客の増加や2020年の東京オリンピック開催に連動して、宿泊施設の需要が増している。とくに、知らない土地に観光で訪れるだけでなく、「暮らすように旅する」というフレーズとともに、その土地の人しか知らない場所や食べ物を楽しんだり、宿泊した宿でオーナーや別の宿泊者との交流を楽しむ趣旨の宿泊場所（通称:ゲストハウス）が増加。ホテルや旅館とは異なり、その宿に宿泊するからこそできる宿泊体験や都市体験をもたらす「東京ゲストハウス」をテーマとする。（出題:垣野義典）

Recently, with the growing number of tourists and the approach of the 2020 Tokyo Olympics, the demand for lodging has been increasing. As shown by the popularity of the phrase “travel as if you lived there”, demand is especially high for guest houses – lodgings where visitors can discover places and foods known only to local residents and enjoy mingling with the owner of the house and other guests. The theme of this assignment is a “Tokyo guest house”, a kind of lodging that is different from hotels and ryokan, where instead of only tourism visitors can enjoy hospitality and urban experiences that are possible only in that house.

太田孝一郎 ｜ 谷根千×開く×ゲストハウス

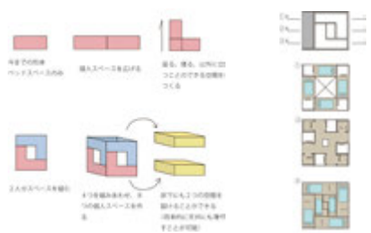
Koichiro Ota



講評：観光客の絶えない谷中の一等地において、１階部分はあっけらかんと街の魅力を高める操作をほどこし、２階に宿泊スペースを高密度にまとめることで、旅を楽しむ空間に緩急をつけている。１階部分は街いく人びととの結節点であり、宿泊客がほどよく街との近い距離感を楽しむことができ、「ゲストハウス」ならではの宿泊体験を演出することに成功している。（垣野）

山田清香 ｜ yanaka no tubo

Sayaka Yamada



講評：ひとつひとつの個室はＬ字型断面をもち、不思議な奥行きをもっている。個室同士は８つでひとつの立方体ユニットを構成し、まとまりをつくりながら不思議な立面と余白を生み出している。個室の計画で、反復するほどに魅力的な断面を生み出せるＬ字型を選択している点が何より冴えている。個室の形状を起点にまとまりをつくることで高密度の街のような谷のような空間を生み出しており、表現の困難な「東京ゲストハウス」の魅力を具現化している点が秀逸である。（垣野）

3年生

設計演習 垣野義典＋廣瀬大祐ユニット　Yoshinori Kakino & Daisuke Hirose Unit

震災復興公園 ±1

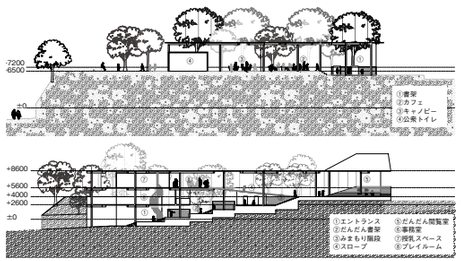
Disaster Recover Park ±1

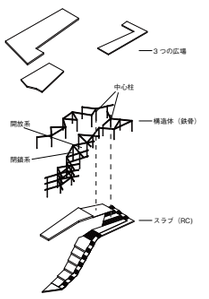
震災復興公園は、大地震被害を受けた都市に防災用緑地機能、災害時避難場所の確保、震災復興のシンボル化などを目的に設置される。この課題では、東京にある52箇所の震災復興公園からひとつ選定し、「不要」と思う要素をひとつ除き、「不足している」と思う要素をひとつ付加し、そこが持続的に利用者に魅力的な場所となるように計画。自治体が保有するからこそ安定した魅力が提供できる公園の、隠れたポテンシャルと歴史を鋭くとらえてほしい。（出題:垣野義典）

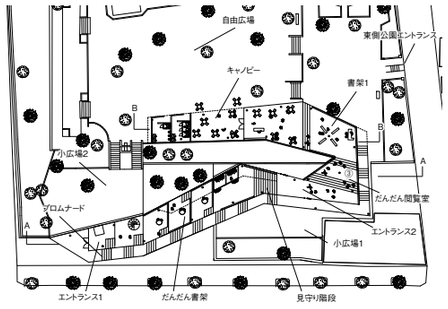
Disaster recovery parks are established in cities that have suffered major earthquake damage, for the purpose of providing disaster prevention green spaces and safe evacuation sites, and to serve as symbols of recovery from the disaster. This assignment is to select one of the 52 disaster recovery parks that were established in Tokyo following the great earthquake of 1923, and then to improve it by removing one element that you think is unnecessary while supplying one element that you think is lacking, to ensure that it remains attractive to users into the future. With the Tokyo Olympics upcoming, new uses are being found for existing sites and architecture all over Tokyo. Precisely because they belong to the local government, these disaster recovery parks can be abiding attractions. Wanted is an insightful approach to their history and hidden potential.

伊藤昌志 ｜

Masashi Ito



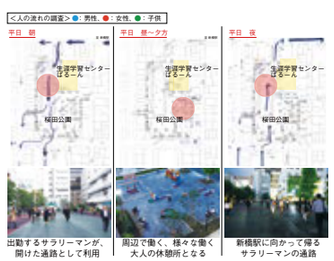


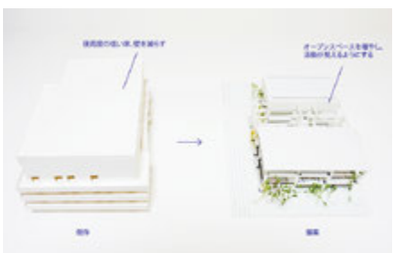


講評：大通りに接しながらも、その切り立った側面によって街から隔絶された震災公園を、建築によって再生させようとする意欲作である。既存の斜面と共存するように全体が置かれ、新しくしかも敷地になじんだ動線を生み出す秀逸さが目を見張る。また、この建築が建つことで、奥の公園の存在がかすかに道路にしみ出るという計画が行われ、既存の安定した空気を繊細に扱っている点に好感が持てる。現実に、ここに建って欲しいと思わせるほど魅力的な作品である。（垣野）

鈴木由貴 ｜ 減らして増やすリノベーション

Yuki Suzuki





講評：新橋駅近くの、サラリーマンの聖地ともいえる敷地に対して、時間と曜日を変え、何度もリサーチを重ねた結果が計画に細かく反映された労作である。すでににぎわいがあり、自然な使われ方がなされている公園部分ではなく、公園と隔絶した公民館（廃校）の壁を部分的に取り払い開いていくことで、敷地に広がりと新たな賑わいをもたらしている。無理のない計画によって、最大限の効果を得ようとするバランス感覚がとても良い。（垣野）

3年生

設計演習 安原 幹＋有井淳生ユニット　Motoki Yasuhara & Atsuo Arii Unit

1万平米の建築

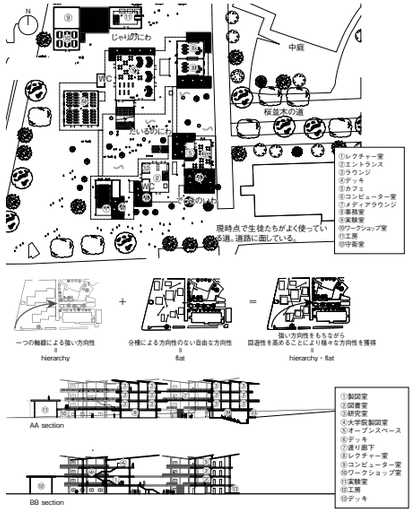
10,000 m² Architecture

今後、日本では18歳人口の減少により大学間競争が激化するといわれており、キャンパスや研究・教育施設の魅力向上は大学が差異化を図っていく上で重要なテーマのひとつ。建築学科棟というビルディングタイプは、建物自身が設計者や大学の建築教育の理念を体現しているともいえる。ここでは、建築と土木工学のふたつのが入るという条件で、延床面積1万平米の野田キャンパス新2号館を設計する。都市から内部空間まで、スケールを横断した1万平米の建築の提案を求める。（出題:安原 幹）

Because of the country's declining population of 18 year olds, Japan's universities are said to be in an increasingly severe competition to enroll them. Making the research and educational facilities of the campus more attractive has become an important way to differentiate a university from others. Many of the buildings that house departments of architecture are themselves outstanding examples of their type – embodiments of the ideals of their designers and of university architectural education.
This assignment is to design a new Building No. 2 to house the faculties of architecture and civil engineering. The total floor area shall be 10,000 m², which is a scale at which architecture is impossible without clearly defined spaces and a coherent program. Design a building of 10,000 m² that handles the entire range of scales from urban to interior spaces.

伊藤昌志 ｜ hierarchy・flat

Masashi Ito



講評：現在の２号館は門からのアプローチと理工学部の中央広場を分断する壁となっている。これに対し、伊藤案は門から広場へと抜ける斜めの街路状の外部空間を設定し、それを挟むように雁行するボリュームを提案している。外部空間はある程度のスケールが保たれており、広場のような使い方も想像できる。ボリュームのまわりに巻き付いた外部の通路は、野田キャンパスの入口にあたる敷地に学生の活動がにじみ出てきそうな点が好印象である。屋根についてさらなるスタディがあればなおよくなったといえるが、敷地全体を使った、都市的スケールから考えた提案として評価できる。（有井）

都築澪 ｜ たまる

Mio Tsuzuki

講評：都築案は野田キャンパスの顔となるアイコニックな建築を提案している。構成は同じ大きさのブロックを積層するというシステマチックなルールに基づくが、製図室の大きなボリュームと、オーバーハングしたブロックが覆う大きな半外部空間が画一的なシステムを崩し、豊かさをもたらしている。とくに半外部空間のスケール感は、野田キャンパスの玄関口にふさわしく、上部を覆いながらも隙間を設け、自然光が落ちてくるようにした点が秀逸であった。１万平米という大きな規模に対して、明確なコンセプトを設定し、それをまとめあげたパワーを大いに評価したい。（有井）

3年生

設計演習 安原 幹＋有井淳生ユニット　Motoki Yasuhara & Atsuo Arii Unit

地方都市のパブリックスペースとしての建築

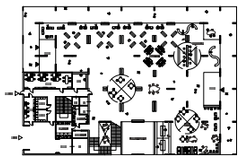
Architecture as Public Space in a Provincial City

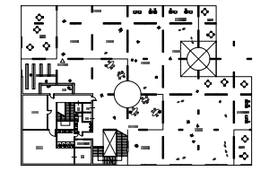
人口20万人の地方都市の駅前に建つ公共建築について考える。モータリゼーションによって空洞化した駅前に人の姿はまばらだが、空洞化に拍車をかけているのは、実は「集まる場所がない」ことではないか。この場所に図書館と美術館からなる複合建築を設計する。とりとめのない駅前に、新しい建築によってどのような風景をつくり得るか。実際に行われたプロポーザルコンペの要項を読み解き、密度の高い設計をやりきることを求める。（出題:安原 幹）

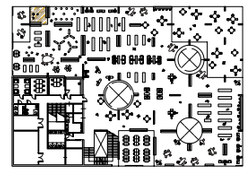
Think about a work of public architecture to stand in front of a station in a provincial city with a population of 200,000. Due to motorization, the area around the station has emptied out and there are few people on the street. This situation is exacerbated by the fact that there is no place in the area for people to gather. So for this place, design a mixed–use building to house a library and a museum. What effect will the new architecture have on the disjointed area in front of the station? Read the brief for the Ota Station North Exit Cultural Exchange Facility Design Proposal competition, which was actually carried out, and complete a high–density design.

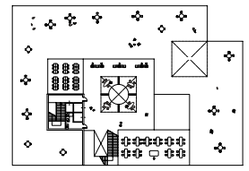
有吉泰洋 ｜ DOME × BOX

Yasuhiro Ariyoshi





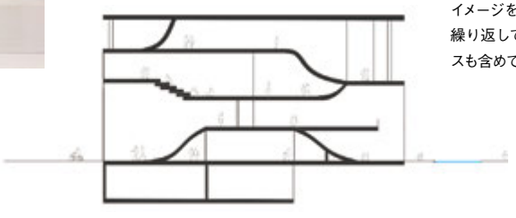




講評：有吉案は、グリッド状に配置した壁の交点をアーチ状にくりぬいて空間を生成し、場所によりアーチのライズを変化させることで空間に多様性を与えることを試みる。内部には、一見スタティックな外観からは想像できないバリエーション豊富な空間がつくられている。ややシステム頼みの感があり、その多様さをどれくらい意図してデザインできたのかは疑問が残るが、美術館と図書館という異なるビルディングタイプの複合を、共通の空間形式で解こうとした野心とパワーは素晴らしい。（安原）

鈴木麻夕 ｜ 人と時間のロータリー

Mayu Suzuki



講評：鈴木案は、駅前を行き交う人の流れを立体化した断面ダイアグラムからスタートした。作者がこだわった、傾いた壁が空間に引き起こす効果のほどはやや疑問だが、平面的、断面的に図書館と美術館が伸びやかに絡み合ったダイナミックな内部空間と外観は、建築で駅前に大きな渦のようなものをつくり出すことに成功している。抽象的なファーストイメージを、地道なスタディを繰り返して建築にしたプロセスも含めて評価したい。（安原）

3 年生

設計演習 山名善之＋有岡三恵＋萬代泰博ユニット　Yoshiyuki Yamana, Mie Arioka & Yasuhiro Mandai Unit

坂倉準三設計による旧･神奈川県立近代美術館 本館の改修･増築計画

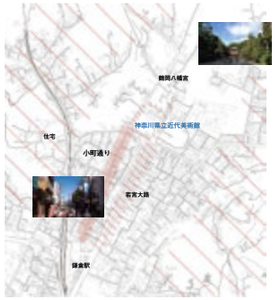
Renovation and Expansion of the Former Main Hall of the Museum of Modern Art, Kamakura by Junzo Sakakura

1951年に竣工した旧･神奈川県立近代美術館本館（鎌倉館）は，モダン･ムーブメントの建物として、文化遺産としての評価の高い建物である。しかし、鶴岡八幡宮の境内の借地に建てられていた為、借地返還を機に2016年1月、近代美術館の使命を終え、本館部分は鶴岡八幡宮の施設として新たな建築の使われ方が模索されている。課題の前半は、文化遺産としての意義を整理し、新たに予想される要求性能を考慮したプログラムをつくる。後半は、実際の改修･増築の設計提案を行う。（出題:山名善之）

The Main Hall of the Museum of Modern Art, Kamakura, completed in 1951, is widely admired as a cultural legacy of the Modern Movement. However, because it was built on a borrowed site within the Tsurugaoka Hachiman–gu shrine, its role as a museum of modern art came to an end in January 2016 with expiration of the siting agreement. Now that ownership has been transferred to the shrine, new uses for the building are being explored. In the first half of this assignment, assess the hall's significance as cultural legacy and devise a program that meets the anticipated requirements. In the second half, propose an actual design for renovation and expansion of the building.

大澤真生子 ｜ひだまり散歩道（プログラム検討）

Makiko Osawa



鎌倉の街
時間的感覚マップ

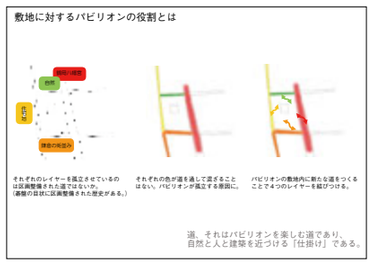
赤線の幅
広い　ゆっくりとした時間感覚
狭い　速い時間感覚

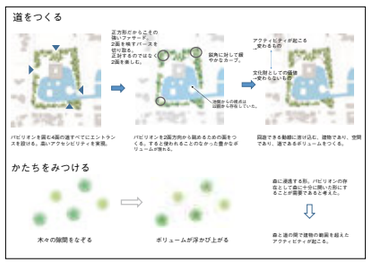
鶴岡八幡宮境内
動作の自由さの感覚(緊張感　解放感)

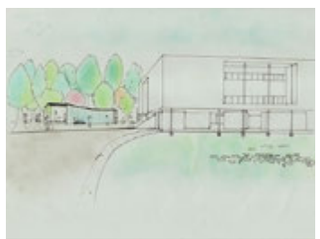
講評:最も優れている点は、旧･神奈川県立近代美術館の再生案を構想するにあたり、敷地分析の結果、鎌倉駅から敷地に至るアプローチに内在する、この街特有の時間のリズム感に着目したところにある。当課題は前・後期を通じて、特に前期では再生の企画提案を行い即物的な提案を求めなかった。苦戦する学生の中で大澤さんは、既存建築物で既に確立した評価に頼ることなく、時間のリズムから発想して敷地のサイト及び広範囲に目を配りながら来館者の心理に即した機能を丁寧に設定した上で、手描きのドローイングで表現していく構想力がみごとであった。（萬代）

鈴木麻夕 ｜ みえない道をあるく

Mayu Suzuki



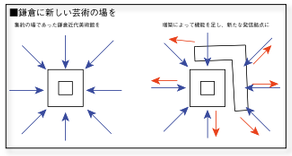


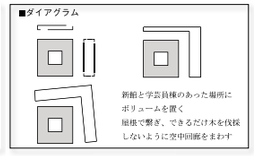


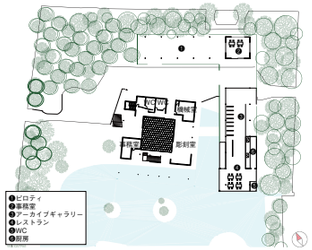
講評：旧・神奈川県立近代美術館が閉館後、県から鶴岡八幡宮に所有者が変わることを手掛かりに、神道の精神が人と物との関係にどのような関係性を求めているかを分析したうえで、既存の美術館建築をどのように扱うべきかを考察した。その結果、敷地の自然環境を活かし、新たな構築物は必ずしも求めず、既存建築物に今までにない魅力を発見し、池越しに最も美しい視点を気づかせる施設を提案した。敷地環境に潜む性質を深く探り、最小限の着手で優れた価値を見出すことで日本文化に迫る視点を評価した。（萬代）

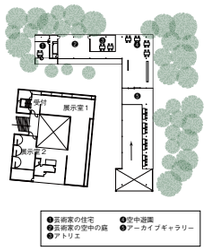
稲角樹 ｜ Kamakura Artist in Residence

Tatsuki Inazumi









講評：既存建築物の簡潔性を残しつつ、適切な間合いを保持した関係性で増築棟を提案することで、新しい機能を提案した点が優れている。閉館した近代美術館の次世代的機能として、この場で新たな作品を生み出すアーティスト・イン・レジデンスを構想した点も的確。増築棟はピロティで接地面の自由度を保ちながらL字型の配置で既存棟を緩く包み、既存に対するリスペクトを感じる。レジデンスはアトリエの他に来館者とアーティスト共用の食堂や、ここで生まれた作品のアーカイブ機能も備え、相互に吹抜けとスロープ、半外部空間で緩く繋がれている点も秀逸である。（萬代）

大澤真生子 ｜ ひだまり散歩道

Makiko Osawa

講評：前半のドローイングの詩的な表現に続き、後半では手描きによる詳細図にでリアリティを獲得していった。スタディは常に既存棟及び敷地に存在する樹木の平断面図とともにスケッチを重ね、敷地から遠く海に至る都市的な断面図も同時に検討された。一見、リニアでシンプルな増築等のプランニングの随所に、既存樹木も含めたシークエンスから発想した空間的仕掛けがちりばめられた。デジタル化が進む学生課題の風潮の中で、敢えて手で思考を重ねる方法を活かすことにより詩的かつリアルでバランスの良い作品に昇華されている点が優れていた。（萬代）

4
年生

ユニットマスター
Unit Masters

建築設計・都市設計　Ⅰ & Ⅱ

安原 幹 (34頁参照)
Motoki Yasuhara

長田直之
Naoyuki Nagata
1968年愛知県生まれ/1990年福井大学工学部建築学科卒業/1990〜94年安藤忠雄建築研究所/1994年ICU一級建築士事務所共同設立/2002〜03年フィレンツェ大学留学（文化庁新進芸術家海外留学制度研修）/2008年〜奈良女子大学住環境学科准教授/現在、東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師

駒田剛司
Takeshi Komada
1965年神奈川県生まれ/1989年東京大学工学部建築学科卒業/1995年東京大学工学系研究科建築学専攻助手/2000年駒田建築設計事務所を駒田由香と共同設立/2014年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2017年〜前橋工科大学工学部総合デザイン工学科准教授

伊藤香織 (34頁参照)
Kaori Ito

嶋田洋平
Yohei Shimada
1976年福岡県生まれ/1999年東京理科大学理工学部建築学科卒業/2001年同大学院修士課程修了/みかんぐみを経て、2008年らいおん建築事務所創業/2012年北九州家守舎設立/2013年リノベリング設立/2013年都電家守舎設立/2014年〜東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師/2015年〜東洋大学非常勤講師

西田 司／オンデザイン
Osamu Nishida
1976年神奈川県生まれ/1999年横浜国立大学卒業後、スピードスタジオ設立/2004年オンデザインパートナーズ設立/2002年以降、東京都立大学大学院助手、首都大学東京研究員、横浜国立大学大学院（Y-GSA）助手、神奈川大学、東京理科大学（工学部）、東北大学、東京大学非常勤講師など/2013年〜東京理科大学理工学部非常勤講師

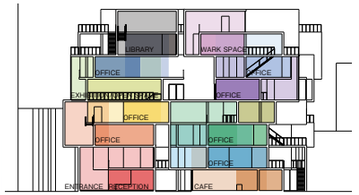
安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit

オフィスビル
Office Building

人生の中で長い時間を過ごすことになる働く空間について、高機能化やインテリジェント化は進んでいる一方で、空間的な開発にはエネルギーが注がれていない。また、現代のオフィスビルは、企業に勤めてオフィスワークをするという20世紀型の大企業の容れ物として設計され、供給されている。しかし、時代を画するような新しいイノベーションは、これまでと同じような組織や働き方では生まれてこない。そこで、これからの時代の働き方とそのための空間をセットで提案してほしい。（出題:安原 幹）

Workspaces are becoming more intelligent and provided with more advanced functions. But despite the fact that people spend a large part of their lives there, not as much attention has been devoted to spatial design. Office buildings are still designed and supplied on a 20th–century model – as containers for the employees of large corporations to do office work. But innovations capable of changing the world cannot be born from old organizations and work styles. The assignment is to propose a new work style for the requirements of the future and a work space to enable it.

酒井健太郎 | I/F
Kentaro Sakai



講評：横浜の伊勢佐木町商店街に計画されたクリエイター向け賃貸オフィス。その共用部を「美術館」と読み替え、複数のテナントが集合して働くことのポテンシャルを空間的に追求した。オフィスユニットは開かれた部分と閉じられた部分のセットとして設定され、前者は各テナントのショーケース的な空間となる。境界が曖昧なユニットが集合することで、今までにない魅力的な共用空間が実現している一方、本丸であるはずのワークスペースのあり方についてはややイメージに乏しい。来訪者の視点だけではなく内側からの視点でもっと具体的な使い方をイメージすれば、「美術館」という当初のキーワードを超えた、見たこともない建築が生まれる可能性があると思う。（安原）

佐々木毬乃 | 5時カツ
Marino Sasaki

講評：自宅と会社の間を毎日車で往復する。そんな地方都市の日常と、単調な働き方を変えるべく、茨城県ひたちなか市のロードサイドに計画されたサードプレイス。アフターファイブに個人で安く借りられるシェアオフィスが2階にあって、趣味が高じたり仲間が見つかったりした場合はそのまま起業してもよい。そのためのチャレンジショップ的な空間が1階にあり、昼間は道の駅のような地域施設として機能する。設計対象はいわゆる職場としてのオフィス空間ではないが、まさに広い意味でのワークスペースの拡張であり、働き方、生き方を変えていく予感を感じさせる、新しいビルディングタイプである。（安原）

長田直之ユニット Naoyuki Nagata Unit

New Farm New Form

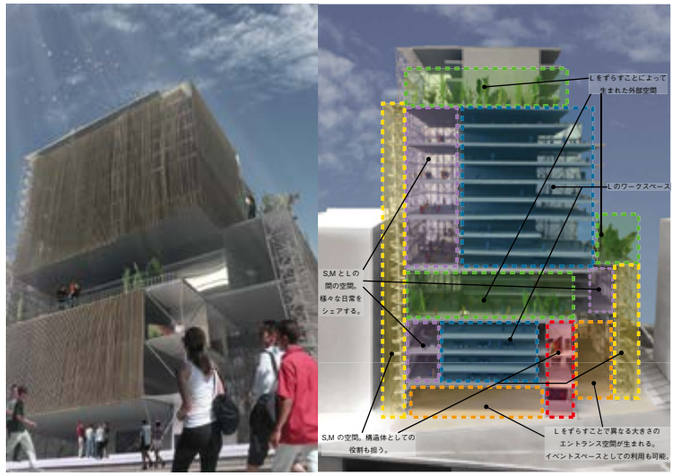
New Farm New Form

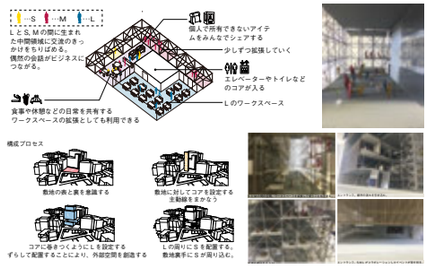
イタリアで1986年に誕生したスローフードの運動は、当初はファストフードに対するオルタナティブとして世界各地に広がった。この運動は、ファストフードの背後にある“流通”や“グローバリゼーション”についても批判的な視点を提供している。先日、富山県氷見市にある「SASY FARM」を訪れた。そこでの体験は（直接スローフードと関係するわけではないが……）これまでの「生産」の場所・空間へのイメージを一新させるものだった。大量生産、大量消費、そして流通の仕組みを再度定義することによって、ものが生まれる（Farm）場所や空間に生まれる—古く・新しい—（Form）を一緒に考えたいと思う。（出題：長田直之）

From its origins in Italy, the slow food movement has spread around the world, offering a critical viewpoint on distribution and globalization. It began as a movement centered on issues of food (agriculture), but is now an examination of the (latent) cultures and lifestyles of specific regions. SAYS FARM in Himi, Toyama Prefecture, offers a new image of a site and space for production. The assignment is to think about the old and new Forms that are born in the site and space of production (Farm) when the mechanisms of mass production, mass consumption, and distribution are redefined.

河鰭公晃 ｜ 渋谷を彩る S,M,L

Kinteru Kawabata

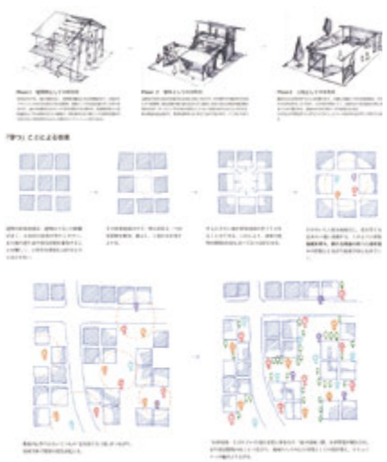


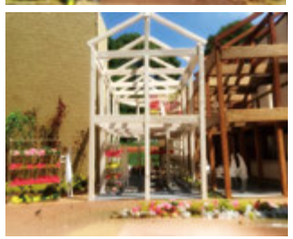


講評：この作品は、ある企業の本社ビルとインキュベーター的な小さな集団のオフィスが、集積する建築である。双方にとっての利益はなにか？　企業と小さな集団との協働が現実的に可能か？という問題についてはなかなか明確な回答とは言えないが、オフォスビルのフラットな立面や床の積層に対して、寄生するようなランダムな小さな空間の集合は、オフィスビルにたいしても不均質な変化がおきている点を評価した。（長田）

棚橋優樹 ｜ Flower Marketing

Yuki Tanahashi





講評：この作品は、中野の木密地区に「花」を中心として街の形成を目指した計画である。既存の木造住宅の仮構を利用した、温室や花畑が点在させ、畑となった周辺の住戸の住環境も同時に向上させようとしている。一方で、事業の主体が明確にならず、運営上の問題についても不十分なところが見受けられた。（長田）

駒田剛司ユニット Takeshi Komada Unit

縮退都市における集合住宅

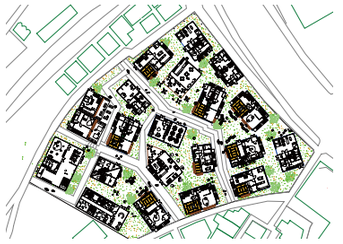
Collective Housing in the Shrinking City

人口減少、高齢化、生産年齢人口の減少という状況に直面している日本では、「縮退都市」の持続可能性をどう担保すべきか。人口が3分の2になり、老年人口が40%、生産年齢人口が50%となる2060年を想定し、幸せな老後を送るために今、何をしなければならないかを問う課題。前半は、2060年の都市がどうあるべきかを500m四方程度を対象に考え、後半は個人で100人以上が住める集合住宅を提案する。問題解決型の思考ではなく、明るい未来をまず描くことで、今何をすべきかを考える。（出題：駒田剛司）

A declining population, an aging population, a smaller working–age population – the situation faced by Japan raises the question of how to secure sustainability for the country's shrinking cities. Imagine conditions in the year 2060, when the population has declined to 2/3 of its present size, the elderly make up 40% of the population, and the working–age population is 50%. What must be done now to enable a happy old age? In the first half of the assignment, think about an area about 500 meters square that shows what the city should look like in 2060. In the second half, propose a collective housing project where more than 100 people can live. Instead of trying to solve a problem, think about a bright future and what we need to do now to enable it.

伊賀竣哉 ｜ シュウジュウか、マチか

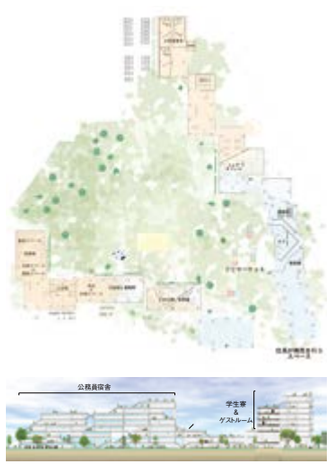
Shunya Iga



講評：赤羽の緩やかな傾斜地に集合住宅、オフィス、店舗、保育所などを計画する案。小さなボリュームを積み重ね、周囲のコンテクストに寄り添いながら、新しいオープンスペースのネットワークの中に、さまざまなアクティビティが展開する。「住まうこと」に特化しすぎた既存の住宅地に、「働くこと」を持ち込み集合住宅とも街ともとれる場所を構想したまではよい。しかし、「住まうこと」と「働くこと」の関係が従前の形から離脱しきれていない。両者が単に接近しているだけでは不充分であろう。建築のデザインにおいても、既視感の強い形式に頼っていたのは残念。「シュウジュウか、マチか」分からない場に相応しい新しい建築の形を見つけて欲しかった。（駒田）

稲葉佳帆 ｜ マネキジュウタク

Kaho Inaba



講評：赤羽に建つ大規模公務員宿舎を、リノベーションする計画案。減築によって建物を街に開き、既存の駐車スペースを広場として開放する。住まう場所だけでなく、ゲストハウス、起業支援型のオフィス、店舗などを複合させ、それらと減築によって生まれた小さなボイドを有機的に関係付ける。現状に対する問題提起と新しい価値の創造へ向けたビジョンが、現実的に示されている点を評価したい。惜しむらくは、ビジョンを語る上でのストーリーがまだ弱いこと、そしてなにより建築的、空間的魅力が充分に表現できていないこと。細かなシーンを描き出すビジュアルや模型が必須だった。（駒田）

伊藤香織ユニット Kaori Ito Unit

都市見

City Viewing

花見･月見･雪見のように季節や自然を愛でるだけでなく、私たちはもっと都市を愛でる機会があって良いのではないか。ここでは、「都市見」の空間を創出することを課題とする。視対象と視点場の組み合わせの設計によって、都市見はもっと楽しくなり、ひいてはその都市のイメージが人々に共有されるようになっていくだろう。都市の中に愛でるべき視対象を発見し、それを眺める居心地の良い視点場を創出することで、魅力的な「都市見」の体験をつくりだして欲しい。（出題:伊藤香織）

Flower viewing, moon viewing, and snow viewing are for enjoying nature and the seasons. Why not also occasions for enjoying the city? This assignment is to create a space for city viewing. According to the combination of viewing objects and place, the city should become more enjoyable and people should start to share their image of the city. Find viewing objects in the city that deserve to be appreciated and create a space for looking at them that feels good to spend time in. Imagine an attractive city viewing experience.

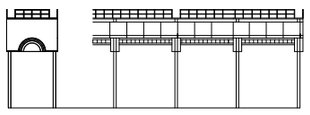
入江慎 ｜ 都市の靭帯

Shin Irie

講評：青山のまちなかに残る青山北町アパート。昭和 30 年代に建設されたこの住宅団地で、植物栽培や家具を置くなど住民の手が加えられたオープンスペースを「裏の公共空間」と捉え、華やかなイメージの青山の街路と緩くつなぐために、境界領域に団地を眺める複数の視点場を設計した。スケッチを用いた観察によって、団地の中に視対象を見出していったり、視点場の居心地の良さに住民が環境に手を加えるのと同様の操作を取り入れていった丁寧なプロセスを評価した。一方、青山通り沿いの図書館の設計では、現場での丁寧な観察を建築規模の設計コンセプトや空間づくりに落とし込む難しさも実感した。（伊藤）

中野拓朗 ｜ Art-Kei-Do

Takuro Nakano



二番街商店街アーケード断面図 1：200

講評：柏の商店街でアーケードの上という視点場を見出し、「いつものまち」を「いつもと違う視点」で眺め直す作品として評価した。アーケードは見慣れたもののようで、「その上」があるということが意識されていないが、一旦その上に上ることで、新たにまちの三次元的な視点を得ることができる。本作品では、柏のまちで行われているアート、市、食などのイベントのための場をアーケード上につながる空間に配していき、移動する・眺める・楽しむを一体的な体験としてデザインした。講評会では、上に掛けた屋根が視点場ではなく視対象を作ってしまっているのでは、という議論になった。（伊藤）

嶋田洋平ユニット Yohei Shimada Unit

「社会の課題」をみつけ「事業」で解決する、「課題」をみつけ「生き方」で解決する

Discover Social Challenges and Propose a Commercial Project to Solve Them
Discover Challenges and Solve Them Through Life Styles

社会のパラダイムが劇的に変化している。人口減少という局面の変化は、生活や暮らしを否応なしに変えていく。20世紀の右肩上がりの時代に有効だった制度や価値観、さまざまな商習慣や建築の手法、学問は、縮退局面の現在では、その力を発揮できないばかりか、社会に対する弊害となっている。そこで、今一度社会に目を向け、建設行為が事業の一部で建築がビジネス行為であることを、基本的認識としてほしい。社会の課題の本質を正しくとらえ、その課題を解決するための事業を考え、そこで建築や空間の果たす役割について想像力を膨らませて欲しい。（出題:嶋田洋平）

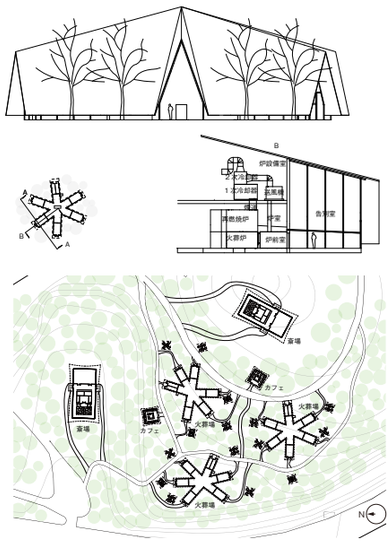
Social paradigms are undergoing dramatic changes. The declining population will inevitably affect our lives and livelihoods. Systems, values, commercial norms, architectural methods, and academic disciplines that were valid in the era of uninterrupted growth are no longer effective in the age of contraction, and are even detrimental to society. This assignment is to take a fresh look at society and to reaffirm the basic idea that the act of architectural design is a business act, part of a commercial project. Think about the essential nature of the challenges facing society and propose a commercial project to solve them. Use your imagination to envision the future role of spaces and architecture.

菅野碧 ｜ 消えゆく島──人口が減り続ける網地島の未来を考える

Aoi Kanno

柴田浩志 ｜ 代々木葬祭場

Hiroshi Shibata



西田司／オンデザインユニット Osamu Nishida/ Ondesign Unit

○○の居場所。カルチュラル・スタディーズ2016

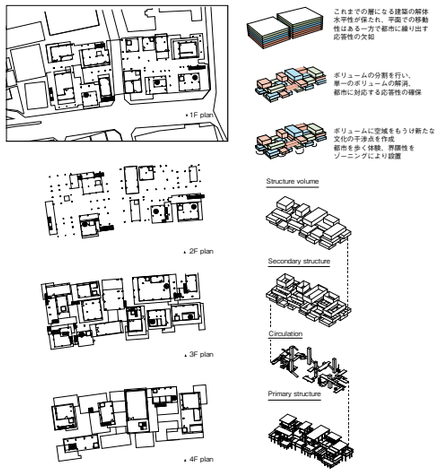
A Place in the City – Cultural Studies 2016

今私たちが生活する都市を観察してみると、まちの動きを活発にする個人の試みが格段に増えていることが分かる。都市を自分の居場所にして、そこでの振る舞い集まり方が変わってきている。こうした背景を踏まえ、都市から生まれる文化をさらに自分ごととして考える。課題では、都市の中での文化的な居場所のリサーチからはじめ、都市のこれからの人の集まり方を探る。都市から建築を考え、建築から都市の更新を考える。（出題:西田 司）

Looking at the cities where we live, we can see a remarkable increase in the contribution of individual actors to urban vitality. People think that the city is the place where they belong, and have begun to behave and gather in different ways. Against this background, think about cultures born in the city and further about what they mean for you. The assignment is to begin with research into people's cultural place in the city, and then to explore how people will gather in the city of the future. Think about the city from the viewpoint of architecture, and about how architecture can renew the city.

加藤恭輔 ｜ SHIBUYA CREATIVE HUB

Kyosuke Kato



講評：鑑賞方法が変わりつつあるという映画文化を、映画を制作することから作品の発信まで、もっと身近に楽しもうという、提案者があったらいいなと思う場づくりの提案に好感がもてた。
制作から鑑賞まで自由な楽しみ方を同じ場で共有し、偶然の出会いの発展による新たな出来事に期待した計画であった。計画地渋谷の、まちを歩いた不確定な体験を引き込むことを目指しつつも、建物がやや形式が強く様々な場が均質に見えてしまった点が惜しい。使い方の多様性や、場の共有による可能性の想像がより具体的なものとして加わると、創造性のある映画文化という、文化の発展を視野に入れた提案になっただろう。（西田）

田中咲良 ｜ inside drama

Sakura Tanaka

講評：音や光環境から、外部に閉じた形式になりやすい劇場建築とその内側の演劇文化を、演劇体験とともに、周辺エリアへの広がりを試みた提案である。下北沢という地域で成熟する既存の劇場、また空き家を活用しながら、劇場機能を解体し点在させている。ホワイエと読みかえたひとつの通りでそれらをゆるやかにむすび、活動の溢れ出しに挑戦している。空き家の改修や、空き地へのインフォメーション新築など、それぞれの居場所の設計への具体性は欠けるものの、演劇者としての経験を持つ提案者の実感あるアプローチから、舞台的な出会いを日常化するという地域への賑わいづくりと、想像される体験の豊かさを高く評価したい。（西田）

M1

ユニットマスター
Unit Masters

建築設計実習 A&B
Master's 1st year

末光弘和
Hirokazu Suemitsu
1976年愛媛県生まれ／1999年東京大学建築学科卒業／2001年同大学院修士課程修了／2001～06年伊東豊雄建築設計事務所／2007年～SUEP.／2009～12年横浜国立大学大学院Y-GSA設計助手／2011年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師／現在、東京大学、横浜国立大学非常勤講師

近藤哲雄
Tetsuo Kondo
1975年愛媛県生まれ／1999年名古屋工業大学卒業／1999～2006／妹島和世建築設計事務所、SANAA／2006年近藤哲雄建築設計事務所設立／現在、東京理科大学理工学部建築学科、法政大学、慶應義塾大学、武蔵野美術大学非常勤講師

岩岡竜夫 〈34頁参照〉
Tatsuo Iwaoka

安原 幹 〈34頁参照〉
Motoki Yasuhara

山代 悟
Satoru Yamashiro
1969年島根県生まれ／1993年東京大学工学部建築学科卒業／Responsive Environment共同主宰／1995年同大学院修士課程修了／1995～2002年槇総合計画事務所／2002年～ビルディングランドスケープ設立共同主宰／2002～09年東京大学大学院建築学専攻助手・助教／2005年urban dynamics laboratory共同主宰／2012年～東京理科大学理工学部建築学科非常勤講師／2017年～芝浦工業大学建築学部特任教授／大連理工大学建築与芸術学院客員教授、東京電気大学非常勤講師

近藤哲雄ユニット Tetsuo Kondo Unit

ぎりぎりの建築

At the Limits of Architecture

建築基準法では、建築物は「土地に定着する工作物のうち、屋根及び柱もしくは壁を有するもの」と定義されている。しかし私たちは、カッパドキアの洞窟住居やサーペンタイン・ギャラリーなどのインスタレーションも建築であると認識している。なにを根拠に建築と呼ぶのか？　この課題では、「建築と呼べるぎりぎりのもの」の提案を求める。具体的なプログラムは市民ホールである。（出題:近藤哲雄）

The Japanese Building Standards Act defines a building as “a structure permanently affixed to the ground that has a roof and columns or walls”. But we also think of the cave dwellings of Cappadocia and the Serpentine Gallery installations as buildings, or at least as architectural objects. On what basis do we call something architecture? For this assignment, propose something that pushes the limits of what can be called “architecture”. The concrete program is a civic hall.

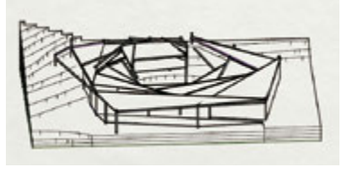
酒井 諒 ｜ 呼応する連なり

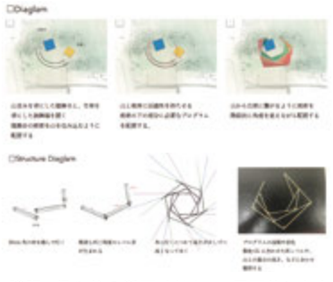
Ryo Sakai

講評：HP シェル構造を用いることで線材だけで３次曲面の屋根をつくり、それらの連なりによって山並みのような外観になっている。伝統的な木造勾配屋根を少し変形させただけであるが、屋根の下には多様な場所が生み出され、あっけらかんとした佇まいは自然豊かな周辺環境とうまくつながり、不思議な開放感を持っている。いろいろな人が気軽に訪れ楽しめるような、気負いのない爽やかな提案だと思う。（近藤）

原 彩乃 ｜ 宴の座

Ayano Hara





講評：梁や柱の断面寸法といった身近なスケールから、カフェになり演劇の客席になり建物全体になり、さらには山や周りの自然にまでつながっていくという連続性が大変おもしろいと思った。それぞれの場所もひとつながりの一部でありながら、お互いが平面的にも立体的にも複雑に交わることで豊かな場所をつくりだしている。中心性が強くなりがちな形態であるが、空間のつくりかたの巧みさと、身体から環境までのダイナミックなスケールの横断によって、開放性とおおらかさを獲得している。（近藤）

末光弘和ユニット Hirokazu Suemitsu Unit

「環境がデザインする形」——環境シミュレーションを使った設計プロセス

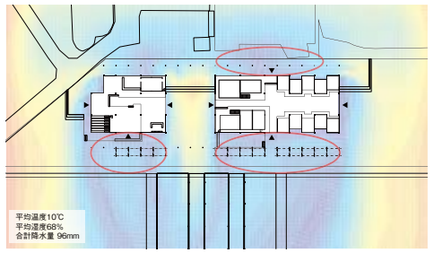
Forms Designed by the Environment – Design Process Using Environmental Simulations

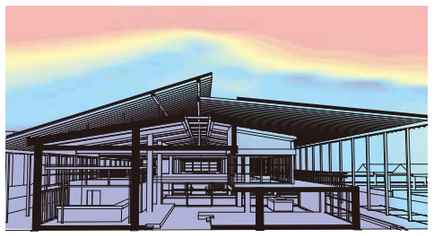
熱や風、光等の環境的要素をパラメーターにしてデザインすると、建物は自然のリズムに寄り添い、有機的な様相を帯びてくる。樹木を見ていると、光を求めて表面積を最大化し、バランスを取るために枝をはり、隣り合う木との距離で形をかえたりするその様は、自然の論理に配慮しながら立ち上がる、植物のような建築のデザインにもつながる予感がする。本課題では、さまざまな環境シミュレーションソフトを用いて、自然の秩序に基づいた新しい建築のあり方をつくりだす事を目的とする。
なお本課題は、「厳島港宮島口地区旅客ターミナル」設計プロポーザル題材にし、新しい建築を模索するものとする。（出題:末光弘和）

When environmental elements like heat, wind, and light are used as design parameters, the building takes on an organic aspect in accord with the rhythms of nature. For example, trees maximize their surface area in search of light. They extend branches for balance and change their shape according to the distance from neighboring trees. This seems like it could inspire the design of a building that would arise like a plant in accordance with the logic of nature. This assignment is to use various kinds of environmental simulation software to create a new approach to architecture based on natural order.
The assignment is to explore new architecture via a design proposal for the Itsukushima Harbor Miyajimaguchi District Passenger Terminal.

森 知史 ｜ 享受する余白・見えない輪郭

Satoshi Mori

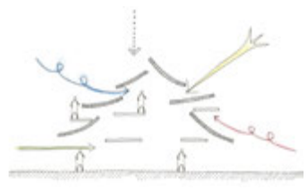


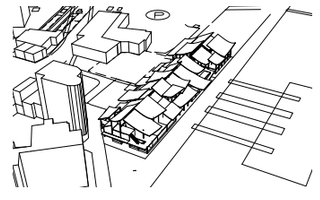


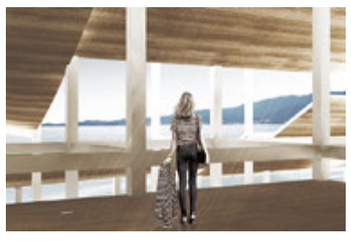
講評：森案は、木構造の架構の中に RC 構造の架構が入った入れ子構造が特徴的な提案である。入れ子の間となる空間は大変魅力的であり、とくに、宮島へ向かった大階段のビューイングデッキは、開放性を担保しながら、緩やかに強い海風から守るパブリックスペースをつくり上げている。また、今回の課題に難しいポイントであった、厳島神社という日本建築としての強いコンテクストと対峙することに対して、片流れの屋根を組み合わせた通風をデザインしており、CFD を用いて、具体的な裏付けをもちながら提案しているところに、力量を感じた。（末光）

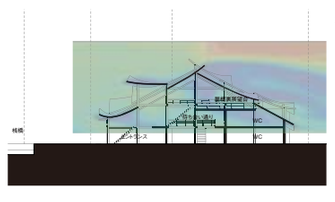
山口薫平 ｜ 風土の屋根群

Kumpei Yamaguchi









講評：山口案は、「風土の屋根群」と題したように、厳島神社との景観的調和を重視した案でありながら、屋根が小さく分節され、所々でそれがめくれることで、眺望を確保できる立体的な場所を獲得している。特徴的なのは、内部のグリッドフレームの空間であり、殺風景になりがちなフェリーターミナルに、宮島らしさと、ヒューマンスケールのある賑わいの場を同時に実現している魅力を感じた。風の解析と形態の関係はまだそれほど煮詰められていないが、突き詰めれば大変説得力をもつ建築の提案になるだろう。（末光）

岩岡竜夫ユニット Tatsuo Iwaoka Unit

〈外景〉としての都市住宅—建築と街並みの関係を再考する

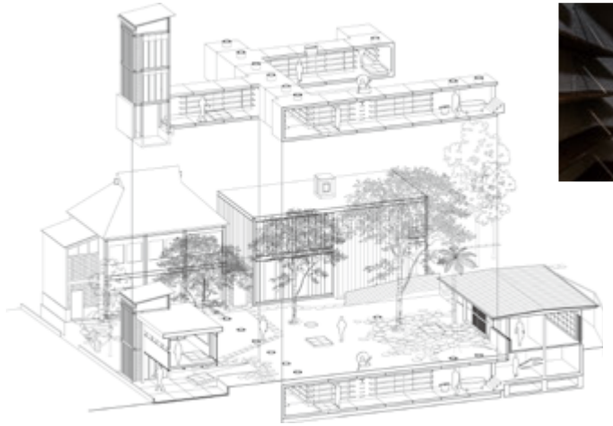
Urban Houses as Exterior Appearance

東京の中に実在する著名な近代住宅に着目して、それに隣接する敷地に、その住宅に対峙する形で新たな住宅を提案するという、まことに面倒な課題である。対象とする住宅は各自セレクトできるものの、課題内容としては昨年と同様であったが、幾つかの作品の中には、新たに住宅を建てるのではなく、オリジナルの住宅を増改築する作品が見られた。いわば既存の住宅の〈外景〉を変形させる試みと言える。その場合、住宅作品のテクトニック（構築的）な水準での分析が必要だが、その部分だけにのめり込まないようにすることが肝心なのかもしれない。（出題:岩岡竜夫）

This is a tricky assignment – to select an outstanding example of modern residential architecture that exists in Tokyo and propose a house to react to it on an adjoining site. The existing house can be freely selected. But rather than designing a new house, the assignment is to change the exterior appearance of an existing house, as was seen last year in several proposals for a similar assignment. In this case, an analysis of architectural techniques for residences is necessary, but the key may be not to become too engaged with only that part of the assignment.

兼本祐輔 ｜ 私の車庫

Yuusuke Kanemoto



講評：清家清の「私の家」とそれに続く同一敷地内の一連のシリーズの最後を締めくくるのが、この作品ということであろう。比較的大きな敷地の片隅に残るピロティ状の小さな建物（現状では１階が車庫で２階が物置となっている）の脇に、地階から２階まで昇降できる油圧式エレベータを取り付けることで、２階を小さなギャラリー空間に変える。すなわち「私の家」の地階部分とこのエレベータの地階を、中庭に掘り込んだ地下通路でつなぐことで、書物や物品の移動を平滑にし、ガジェット好み？の施主の欲望をさらに満足させようと試みた、意欲作である。（岩岡）

小室龍昭 ｜ Villa Baleine—Villa CouCou 増築案

Tatsuaki Komuro

講評：オリジナルの住宅は小さくシンプルな構成であり、手の込んだディテールが至る所に散りばめられている玉手箱のような作品である。こうした建物は完結性が強く、おまけに敷地も狭いので、増改築が容易ではない。唯一大きく広げた開口部の先は、かつては眺望が開けていたが、現在は既に機能しなくなって、庭先には物置小屋がある。完結性が高いがゆえのこうしたマイナスの状況をすべてクリアにするために、ここでは、クジラの尾ビレのような部分をオリジナルの本体に付け加えることで、視線を空中へと旋回させ、さらに新たにできた屋上空間へと至る動線も増設している。大胆でありながら文脈を無視しない手法が秀逸である。（岩岡）

安原幹ユニット Motoki Yasuhara Unit

都市に応答する建築

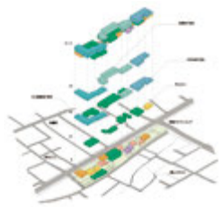
Architecture that Responds to Cities

現代日本の都市部で進む大規模開発は、「都市建築」とは到底言えないような、大きくて凡庸な建築を量産し続けている。この課題では過去の偉大な都市建築の先例に学び、都市とダイナミックに応答する建築を構想・設計することを目標とする。第1段階では国内外の都市建築の名作を観察・分析し、第2段階ではそこからの学びを元に、現代都市の中で何らかの問題を抱えている既存建築を、全く新しいかたちに生まれ変わらせる設計を行なう。（出題:安原 幹）

The large–scale redevelopment of contemporary Japanese cities continues to produce a great deal of big but mediocre architecture, which cannot by any stretch be called “urban architecture”. The aim of this assignment is to learn from eminent past examples of urban architecture and to envisage and design architecture that responds dynamically to the city. The first stage will be to observe and analyze masterworks of urban architecture in Japan and abroad. The second stage will be to apply the insights gained in the first stage to existing architecture in the contemporary city, addressing one or more issues faced by that architecture so that it is reborn in a completely new form.

丸山良太 ｜ 初台の器

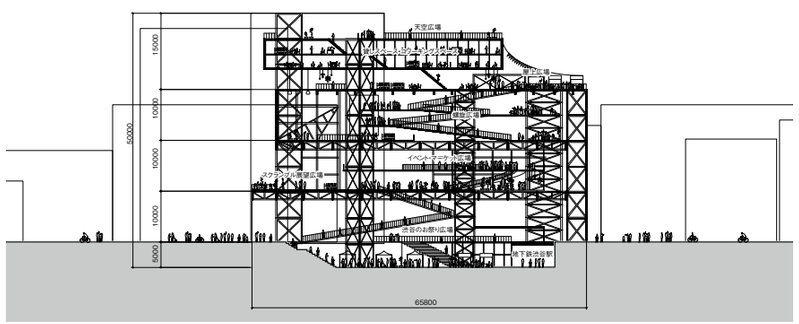
Ryota Maruyama



講評：作者は代官山ヒルサイドテラスを参照事例として取り上げ、街路から店舗、住戸に至る領域形成手法を詳細に分析した。設計対象としたのは新宿区初台の敷地であり、既存の都営住宅を、集合住宅と公共図書館の複合建築として建て替えるという計画である。敷地内のレベル差を巧みに利用した設計と、低層部に配置した図書館というプログラムが、住戸と都市の間の距離感を適度に調停しており、都市居住の快適さを感じさせる建築をつくりあげた。（安原）

山口薫平 ｜ 渋谷ビルディング

Kumpei Yamaguchi



講評：作者はボンピドーセンターに代表される 20 世紀後期のハイテク建築の空間性を分析した。それらの建築の多様な構造表現は実は、内部に均質空間を獲得することを目的としていたが、作者が計画した渋谷 109 の建て替え案は、特異なストラクチュアによる徹底的に非均質な空間を志向する。テンポラリーなイベントや情報発信が行われる立体広場を、人びとは思い思いに滞留したり通り過ぎたりする。この場所でしか成立しないプログラムと建築空間の設計を高密度でやりきった点を評価する。（安原）

山代悟ユニット Satoru Yamashiro Unit

D.I.Y. urbanism:都市と里山を結ぶ2地域居住を豊かにするための設え

D.I.Y. Urbanism: Enriching a Dual Lifestyle Between City and Satoyama

「D.I.Y.=Do It Yourself」は、第2次世界大戦後のロンドンの戦後復興の際に、都市を自分たちの手で復興しようというスローガンの中から生まれ広まった。人々の暮らしを消費一辺倒のものから取り戻す「復興」に相応しい言葉である。敷地は、都市と里山を結ぶ2地域居住の推進を通じて、里山の環境を保全することに取り組む NPO南房総リバブリックの活動の場、千葉県南房総市。2地域居住という生活を豊かにする設えをデザインして欲しい。条件は「自分たちで実際につくれること」。

（出題:山代 悟）

The term D.I.Y. (Do It Yourself) was popularized in London after WWII when the citizens of the city took it upon themselves to rebuild and adopted it as a slogan. It is an appropriate expression for “recovery” that rescues people’s lives from exclusive dedication to consumption. The site is the city of Minamiboso, where the NPO Minamiboso Republic is working to preserve the satoyama (intermediate wooded zone between village and wilderness) environment by encouraging people to live in two places – the city and a satoyama. The assignment is to design something to enrich this dual lifestyle. A condition is that they can make it themselves.

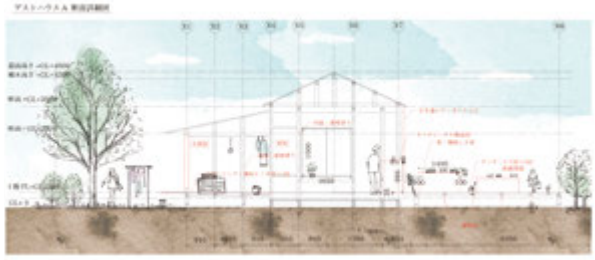
小野塚 直 ｜ この地に根差す

Nao Onozuka

講評：南房総市富浦の海水浴場に面して建ち並ぶ昭和 30 年代の木造市営住宅群を再生し、コーポラティブビレッジとする計画。ビーチへのアプローチや後背の住宅地とのつながりを読み解き機能の配置や新築部分を計画していった。敷地内外に残る古材や古家具などの回収、再生、販売などのサイクルを取り込むのも重要な着眼点であった。（山代）

中村 遥 ｜ 富浦多々良郷ノ宿

Haruka Nakamura



講評：南房総市富浦の海水浴場に面して建ち並ぶ昭和 30 年代の木造市営住宅群を再生し、コーポラティブビレッジとする計画。既存計画を丁寧にスケッチしながら小さなデザインのきっかけをつみあげながら設計をしていく手法は、鮮やかさはないが、繊細で丁寧なアプローチが場所や既存建物の魅力を引き出していた。（山代）

Topics
01 〈運河〉から〈海外〉へ

岩岡竜夫（教授）

岩岡教授が客員教授として滞在したリール建築大学で設計製図を指導した学生と共に

フランスの建築設計教育事情

2016年の2月から8月まで、本学の在外研究員制度により、リール建築大学の客員教授としてフランスに半年間滞在した。リール市は、パリからほぼ真北にTGV（新幹線）で約1時間のベルギーとの国境の都市で、ブリュッセルへは高速鉄道で40分、ロンドンへは100分のところにある。戦前までは繊維工業で栄えたが、現在ではサービス業や教育産業などに力を入れている。リール建築大学は、リール駅から地下鉄で約15分のニュータウン（＝ヴィル・ヌーヴ・ダスク）の中にあり、大半の学生が大学付近の寮やアパートに下宿をしている。私は、ほぼ9割がフランス国籍である3年生約120名の設計製図の授業を担当する8名の講師のひとりとして、約15名の学生を指導したが、この人数配分は本学科とほぼ同じである。8スタジオのうちふたつのスタジオが英語によるもので、私とベルギーのゲント在住の建築家が受け持った。

課題は、リールからさらに北へ行った所にあるサントメールという小さな地方都市の一角に建てる「小住宅＋α」というもので、与えられた5つの敷地のうちのひとつを各自が選んで、そこに住宅を設計するものであった。まず各学生は、その住宅に住む施主の性格や家族構成を具体的に想定する。その後、想定した施主を学生同士で交換し、そこから具体的な設計が始まる。模型やスケッチでエスキスを重ねながら、最終的に断熱性能や構造計画を含めた1/20のディテールまで設計しなければならない。日本の設計教育に比べてよりプラクティカルであるといえなくもないが、小住宅を設計課題にしている点は現在の日本と近いものがあった。提出前の3日間は多くの学生が学内で徹夜し、体力の限界の中での講評会は2日間にわたって行われた。3年次の第6セメスターの設計は、日本でいえば卒業設計のようなもので、提出された設計作品を通じて〈自立的な能力〉が認められない約1割の学生が4年次へ進級できないようになっている。幸い私の担当した学生たち（右上写真）は全員進級し、その後彼らのほとんどはEU内の別の大学へ留学したり、日本を含めた海外の設計事務所などで経験を積んでいる。

学生間の国際交流

建築を学ぶ学生にとって、大学在籍中に海外の建物や都市を訪れることのみならず、海外の大学や設計事務所に一時的に所属して海外生活を送ることは、生涯を通じての貴重な経験の1つとなるだろう。そのための教育システムの充実化は早急な課題であり、特に大学院生に対する海外の教育研究機関と本学の交換留学協定の拡充、海外インターンシップの奨励、国際ワークショップの企画など、本学科ではさまざまな方策を取っている。ここ数年では、交換留学生としてオールボー大学、トゥールーズ建築大学、リスボン工科大学、リール建築大学などに大学院生を派遣、またパリ、ベトナム、スリランカなどの海外の著名な設計事務所で半年間のインターンシップを経験する大学院生、またバルセロナや瀋陽などで開催される国際ワークショップに参加する学生など、多くの学生が海外で意欲的に学んでいる。

〈ワンアジア〉特別講座の開設

また本学科では、兼松学教授の尽力により、ワンアジア財団の支援のもとに、2016年度前期と2017年度前期の2年度にわたり、アジア各地を拠点として活躍する建築家や建築研究者、及び日本の著名なアジア建築の研究者を招聘して、輪講形式による特別講座を開設した（下表参照）。講演者の中には、日本を離れて海外で仕事をしている本学科出身の若手OBも含まれており、毎回の講演後には現役学生から多くの質問が投げかけられた。

ワンアジア特別講座開催リスト

講演日	講師（敬称略）	所属	国
2016.04.12	鄭俊坤	ワンアジア財団	
2016.04.19	国広ジョージ	国士舘大学	日本
2016.4.26	篠崎正彦	東洋大学	日本
2016.05.10	大田省一	京都工芸繊維大学	日本
2016.05.27	林憲徳（Hsien-Te LIN）	国立成功大学	台湾
2016.05.31	David Hutama Setiadi	ペリタハラパン大学	インドネシア
2016.06.07	迫慶一郎	建築家	中国
2016.06.14	Johannes Widodo	シンガポール大学	シンガポール
2016.06.28	邱建国（Chien-Kuo CHIU）	台灣科技大學	台湾
2016.07.05	Niramon Kulsrisombat	チュラーロンコーン大学	タイ
2016.07.19	Loan	ハノイ大学	ベトナム
2017.04.18	国広ジョージ	国士舘大学	日本
2017.05.02	佐貫大輔	建築家（本学科 OB）	ベトナム
2017.05.09	大野隆司	チトカラ大学（本学科 OB）	インド
2017.05.16	寺本健一	建築家（本学科 OB）	UAE
2017.05.23	大庭三枝	東京理科大学	日本
2017.05.30	大田省一	京都工芸繊維大学	日本
2017.06.06	柳浩燮（Ho-Seoup RIEU）	東義大學校	韓国
2017.06.13	Amgalan Sukhbaatar	モンゴル科学技術大学	モンゴル
2017.06.20	王維周（Rémi Wei-Chou WANG）	台北科技大学	台湾
2017.06.20	Nguyen Cam Duong Ly	ホーチミン市建築大学	ベトナム
2017.06.27	Channa Dawatte	建築家	スリランカ
2017.07.04	林憲徳（Hsien-Te LIN）	国立成功大学	台湾
2017.07.18	佐藤洋治	ワンアジア財団	
2017.07.29	Chongmin Song	ニューサウスウェルズ大学	オーストラリア

Topics
02

防災リスク管理コース始動

大宮喜文（建築学科教授／防災リスク管理コース長）

防災力の向上にむけて

近年発生した大地震でも露呈した通り、高度化した社会基盤の防災力の未熟さは、甚大な社会的損失を招くことになるため、その防災力の向上は喫緊の課題である。また、世界共通のスタンダードを求める国際化の進展に伴い、災害に関する従来の経験に基づく仕様的スタンダードではなく、科学的理論に裏付けられた性能的スタンダードが必要とされており、これらの国際的動向を包括的に理解し、合理的かつ論理的に対処する方法論が求められている。

このような社会の動向を踏まえ、リスクを抑制する有効な対策を企てるためには、防災リスク管理に関する基礎的、応用的、実務的な教育を基に、その上でさまざまなリスク事象の現象面を理解すること、さらに諸国の社会の成熟度に適合した対策を講じられる能力を醸成する必要がある。そのために、10 専攻を有する理工学研究科の学問領域を横断的に俯瞰した学際的なアプローチで総合的に対応することが大きな意味を持つことになる。

リスクに対する柔軟な思考力を養う

本コースでは、急激かつ複雑に変貌する都市空間のリスクを理解し、学際的学問領域の先端知を利用して、防災およびリスク管理のための有効な対策を検討・選定できる専門性の高い人材、また、急速な発展を遂げている諸国の状況を国際的視野から見通せる人材を輩出できるような教育・研究の基盤形成を考えている。そして、防災およびリスク管理に関する講義や演習から習得した理論に基づき、大型実験施設などを利用した実践的教育から高度な知識・技術を習得し、未知のリスクに対して柔軟な思考力を備えた人材などを育成していく計画である。

大規模地震、難燃化技術、群集避難など多角的に研究

本コースで検討している主なプロジェクトは次の通りである。

① 大地震などに対する都市防災力を評価する「都市ヘルスモニタリング」に向けた理論構築と応用

大地震などに対する都市防災力を評価する「都市ヘルスモニタリング」に向けた理論を構築し、ⅰ）事前の災害リスク評価、ⅱ）大地震発生後の即時対応、ⅲ）復興に向けた取り組み、に分け各固有の課題等などに取り組んでいく（下図）。

② 難燃化技術の研究開発と応用

難燃化した材料の燃焼現象から難燃化の効果を定量的に把握し、新たな難燃材料の開発を目指している。

③ 群集避難時のシミュレーションモデルの数理と研究開発

大規模災害発生時の避難者の自力歩行や車などの移動手段を想定した避難行動のアルゴリズムを検討したモデルを開発し、避難者の移動方向や避難のタイミングなどを決定する最適な方法論を構築していく。

註）横断型コースとは、理学から工学までの専攻を有する理工学部・理工学研究科が学科・専攻を超えて横断的かつ強力に学際的研究を推進するために導入したもので 2017 年度から導入。そのひとつが防災リスク管理コース。学部 4 年次よりコース選択が可能となる。防災リスク管理コースが対象とする専攻は、数学・建築学・先端化学・電気工学・機械工学・土木工学。

防災力を評価する都市ヘルスモニタリング

Topics
03 新任教員紹介

片桐悠自
（助教）

Yuji Katagiri/1989 年 東京生まれ /2012 年 東京大学工学部建築学科卒業 /2012 ～ 13 年 パリ・ラヴィレット建築大学留学 /2014 年 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻修士課程修了、修士（工学）/2014-15 年 パリ・ラヴィレット建築大学留学 /2017 年東京大学大学院工学系研究科建築学専攻博士課程修了、博士（工学）/2017 年～ 東京理科大学理工学部建築学科岩岡竜夫研究室助教

研究分野は建築意匠論で、どのように人間が建築デザインを創造するのかというプロセスに興味を抱いている。具体的には、建築の図法・造形表現がどのような考え方から生まれるのか、さらにどのように人びとに受けとめられ、新しい表現を生み出していくのかということに関心がある。

本格的に建築意匠の研究を始めるきっかけとなったのは、大学院修士課程・博士課程の2回にわたるフランスへの留学経験であった。私が交換留学生として所属した国立パリ・ラヴィレット建築大学はエコール・デ・ボザールから分離した建築系グランゼコールで、「大学は交差点である」という自由闊達な雰囲気が溢れていた。修士課程のラヴィレット留学の際に同年代のイタリアから来ていた留学生たちと仲良くなり、イタリアの人びとの建築的感性は全く正反対なようにみえて、実は非常に日本と近いのではないかという仮説を抱いた。現代の状況と建築の関係のダイナミクスの事例として、博士論文で建築家・建築理論家アルド・ロッシを研究することに決めたのは、こういった理由が背景にあった。

ロッシは、彼自身が述懐するところによると、「絵が下手だから建築家は諦めるべき」と教授に言われたといい、学生時代には決して出来のよい学生として扱われていたわけではなかったようである。彼は、自身の組織した建築運動「テンデンツァ」を通じて、初期モダニズムの建築家の作品をどのように継承していくかということを考えていた。「ポストモダン」と呼ばれる時代に活躍し、今や戦後イタリアを代表する建築家とも見なされているロッシだが、建築理論家としての基盤をもちながら組み上げられた彼の作品は、ル・コルビュジエ、ミース・ファン・デル・ローエ、アドルフ・ロース、ルードヴィッヒ・ヒルベルザイマーといったモダニズムの巨匠の影響を受け継いでいる。例えば、「セグラーテの噴水」（写真1）はロージエの「原始の小屋」を彷彿させ、白ペンキ塗りのRC造というモダニズムが可能にした構法技術に重きを置いており、元来モダニズムが有していた「貧しさ」への視座に着目していた。

写真 1：アルド・ロッシ「セグラーテの噴水」（筆者撮影）

実際のところ、建築デザインの時代的・様式的な評価については、時代・地域・場所から切り離された不変の基準があるわけではない。そこが建築意匠の面白いところであり、また伝えるのが大変難しい部分でもある。時代や地域が変われば、国家や集団の価値観、会社や家族のルール、個人的なライフスタイルは変化する。つまり、建築をデザインすることは、変化しながら動き続ける価値観を反映する造形表現としての性質を有している。文化的・人間的価値観を踏まえて、自らがデザインする建築を自身の責任で「選択」しなければならないというのが、学生時代に出会う最も大きな課題であり、人生における豊かなステップのひとつといえるだろう。

私が建築学科を「選択」したのは、学部時代のサークル活動「東大LEGO部」が原点にある。これはレゴブロックによる造形表現を行う活動で、これまで東京タワー、スカイツリー、都庁など、一般の人びとが知っている建築作品を再現してきた。題材の選定、設計図で共有するチームワーク、流通コストを鑑みた制作のプロセス、メディア出演等を通じて、どのような建築デザインが残されていくのかということに興味を抱くきっかけとなったともいえる。大学に入学した当初は、化学を専攻しようとも考えていたのだが、LEGO部での経験を通じて、大学2年時に化学科ではなく建築学科を選んだ。この「選択」は私の内面にとって非常に大きなもので、現在の建築意匠への関心は、化学の構造式の巧みさ・美しさと通ずるものがあるように感じている（写真2）。こうした選択の経験から、建築教育において、勉学に励みながら幅広い視野をもってさまざまな経験を享受してもらう機会を作れればと考えている。

その意味で、教員でありつつも学生の目線を忘れずに、建築デザインの奥深さを共有できればと思い、学生の皆さんのデザインの実践と建築学をつなぐ架け橋になれればと考えている。

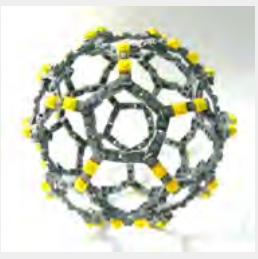


写真 2：大学時代に作成した LEGO ブロック作品《C60 フラーレン》

学生デザインコンペティション入賞者一覧（2016 年 4 月〜 2017 年 3 月）

コンペ名と受賞		入賞者氏名	作品タイトル
◎審査員（敬称略）			
2016 年度支部共通事業・日本建築学会設計競技　四国支部入選 / 全国入選佳作		森知史　山口薫平	道後地元民温泉ものがたり
JIA 全国学生卒業設計コンクール 2017　青木淳賞		河鰭公晃	協奏するショッピングウォール
◎青木淳　中山英之　他2名			
キルコス国際建築設計コンペティション 2016	**小川次郎賞 銀賞**	大村高広	障子の家
◎五十嵐淳　五十嵐太郎　エムエースタイル建築計画　小川次郎　倉方俊輔　北川啓介　郡裕美　近藤哲雄　トラフ建築設計事務所　長坂大 南後由和　畑友洋　前田圭介　松島潤平　みかんぐみ　宮本佳明　山口陽登　山崎亮　吉村靖孝　403architecture [dajiba]			
キルコス国際建築設計コンペティション 2016	**畑友洋賞 金賞**	大村高広	都市と都市
	山口陽登賞 佳作	大村高広	都市と都市
◎五十嵐淳　五十嵐太郎　エムエースタイル建築計画　小川次郎　倉方俊輔　北川啓介　郡裕美　近藤哲雄　トラフ建築設計事務所　長坂大 南後由和　畑友洋　前田圭介　松島潤平　みかんぐみ　宮本佳明　山口陽登　山崎亮　吉村靖孝　403architecture [dajiba]			
キルコス国際建築設計コンペティション 2016	**北川啓介賞 金賞**	大村高広	四散する鉛直 / 水平
	吉村靖孝賞 金賞	大村高広	四散する鉛直 / 水平
	403architecture [dajiba] 賞 金賞	大村高広	四散する鉛直 / 水平
	トラフ建築設計事務所賞 銀賞	大村高広	四散する鉛直 / 水平
	五十嵐淳賞 佳作	大村高広	四散する鉛直 / 水平
◎五十嵐淳　五十嵐太郎　エムエースタイル建築計画　小川次郎　倉方俊輔　北川啓介　郡裕美　近藤哲雄　トラフ建築設計事務所　長坂大 南後由和　畑友洋　前田圭介　松島潤平　みかんぐみ　宮本佳明　山口陽登　山崎亮　吉村靖孝　403architecture [dajiba]			
キルコス国際建築設計コンペティション 2016　前田圭介賞 佳作		中村遥	浮遊する空間
◎五十嵐淳　五十嵐太郎　エムエースタイル建築計画　小川次郎　倉方俊輔　北川啓介　郡裕美　近藤哲雄　トラフ建築設計事務所　長坂大 南後由和　畑友洋　前田圭介　松島潤平　みかんぐみ　宮本佳明　山口陽登　山崎亮　吉村靖孝　403architecture [dajiba]			
全国修士設計展トウキョウ建築コレクション 2017　グランプリ		堀越 一希	湯河原の家
◎難波和彦　太田佳代子　倉方俊輔　中村 拓志　ヨコミゾマコト			
第 10 回長谷工住まいのデザインコンペティション　佳作		山口 勲平　堀越 一希	スクラップ＆スクラップ
◎隈研吾　乾久美子　藤本壮介　池上一夫　大栗育夫			
赤レンガ卒業設計展　連勇太朗賞		佐藤康行	身体からの学び
◎猪熊純　藤村龍至　連勇太朗　門脇耕三			
全国合同卒制展「卒、17」 二日目　トラフ鈴野賞		酒井健太郎	100M の都市
◎倉片俊輔　鈴野浩一　冨永美保　西田司			
全国合同卒制展「卒、17」 二日目　西田司賞		佐々木毬乃	半 [築 / 居 / 外部]
◎倉片俊輔　鈴野浩一　冨永美保　西田司			
第 10 回 JACS 全日本学生建築コンソーシアム 住宅設計コンペ 2016　個人優秀賞 / 群設計最優秀賞			
		山口薫平　小野塚直	お隣さんを誘う塀、それにまたがる私の家
◎吉田 研介　乾久美子　北山恒　吉村 靖孝			
第 10 回長谷工住まいのデザインコンペティション 佳作		堀越一希、山口薫平	スクラップ＆スクラップ
◎隈研吾、乾久美子、藤本壮介			

コンペ名と受賞	入賞者氏名	作品タイトル
◎審査員（敬称略）		
第 17 回埼玉県卒業設計コンクール　準埼玉賞	大澤 祐太朗	こいのぼりの倉庫
◎衣袋洋一　澤田英行　竹内宏俊　櫻井義夫　常山未央　呉鴻逸　木下庸子　菊地宏　北野幸樹　戸田都生男		
第 29 回 千葉建築学生賞　優秀賞	河鰭公晃	協奏するショッピングウォール
◎中野正也　小島広行　鳴海雅人　安田俊也　飯沼竹一　園部隆夫　皆川拓　西山芽衣		
第 29 回 千葉建築学生賞　特別賞	佐藤康行	身体からの学び
◎中野正也　小島広行　鳴海雅人　安田俊也　飯沼竹一　園部隆夫　皆川拓　西山芽衣		
第 3 回 POLUS ポラス学生建築デザインコンペティション　入選	齊藤誠司　杉浦奈花	ヘヤイエ
◎青木 淳　今井 公太郎　乾 久美子　前田 圭介　野村 壮一郎		
第 3 回 POLUS ポラス学生建築デザインコンペティション　佳作	宮坂岳見　山口薫平	木屋号のある街
◎青木 淳　今井 公太郎　乾 久美子　前田 圭介　野村 壮一郎		
第 3 回 POLUS ポラス学生建築デザインコンペティション　入選	大村高広	37 sites / 7 houses
◎青木 淳　今井 公太郎　乾 久美子　前田 圭介　野村 壮一郎		
第 3 回宇宙建築賞　TELSTAR 賞	岡本俊英 佐野航 大澤真生子	海月 -KURAGE-
◎岩岡竜夫　大貫美鈴　佐々島暁　佐藤実　寺薗淳也　春山純		
第 3 回学生・若手実務家のための構造デザインコンペティション 奨励賞	小室龍昭、小野塚直	竹で繋がる風景
◎佐藤淳　赤松佳珠子		
第 4 回ヒューリック学生アイデアコンペ　優秀賞	影山真平、齊藤誠司、森島英子、小室龍昭	あさくさの灯
◎隈研吾　伊香賀俊治　亀井忠夫　根本祐二　畠中克弘　吉留学		
第 4 回ヒューリック学生アイデアコンペ　優秀賞	大村高広、堀越一希、木村友美	浅草のビル（under construction）
◎隈研吾　伊香賀俊治　亀井忠夫　根本祐二　畠中克弘　吉留学		
第 51 回セントラル硝子国際建築設計競技　入選	中村駿介、河鰭公晃	潮を纏う海苔の番屋
◎内藤廣　亀井忠夫　小林照雄　隈研吾　青木淳　塚本由晴		
第 51 回セントラル硝子国際建築設計競技　佳作	曽我章悟、堀越一希、大村高広	Mass for Prayer
◎内藤廣　亀井忠夫　小林照雄　隈研吾　青木淳　塚本由晴		
第 6 回ＪＰＭ“夢の賃貸住宅”学生コンテスト　グランプリ	兼本祐輔、三上陽平	柱・ぬりえ
◎齊藤広子　松村秀一　大島芳彦　谷尻誠		
第 8 回ハーフェレ学生デザインコンペティション 2016　優秀賞	外川喜裕、三上陽平、林山赳大	揺らめく Sunroom
◎横河健、アストリッド・クライン、五十嵐淳、カール・ハーネ		
東京理科大学合同卒業設計展　tomito 伊藤賞	酒井健太郎	100M の都市
◎宇野求　伊藤裕久　他多数		
東京理科大学合同卒業設計展　一般部門最多得票賞	河鰭公晃	協奏するショッピングウォール
◎宇野求　伊藤裕久　他多数		
東京理科大学合同卒業設計展　熊谷亮平賞	佐藤康行	身体からの学び
◎宇野求　伊藤裕久　他多数		

キルコス国際建築設計コンペティション2016 | 北川啓介賞 金賞、吉村靖孝賞 金賞、403architecture [dajiba]賞 金賞、トラフ建築設計事務所賞 銀賞、五十嵐淳賞 佳作

大村高広

四散する鉛直 / 水平

●審査員
五十嵐淳 / 五十嵐太郎 / エムエースタイル建築計画 / 小川次郎 / 倉方俊輔 / 北川啓介 / 郡裕美 / 近藤哲雄 / トラフ建築設計事務所 / 長坂大 / 南後由和 / 畑友洋 / 前田圭介 / 松島潤平 / みかんぐみ / 宮本佳明 / 山口陽登 / 山崎亮 / 吉村靖孝 / 403architecture [dajiba]

全国修士設計展トウキョウ建築コレクション2017 | グランプリ

堀越一希

湯河原の家

●審査員
難波和彦 / 太田佳代子 / 倉方俊輔 / 中村 拓志 / ヨコミゾマコト

第4回ヒューリック学生アイデアコンペ | 優秀賞

影山真平　齊藤誠司
森島英子　小室龍昭

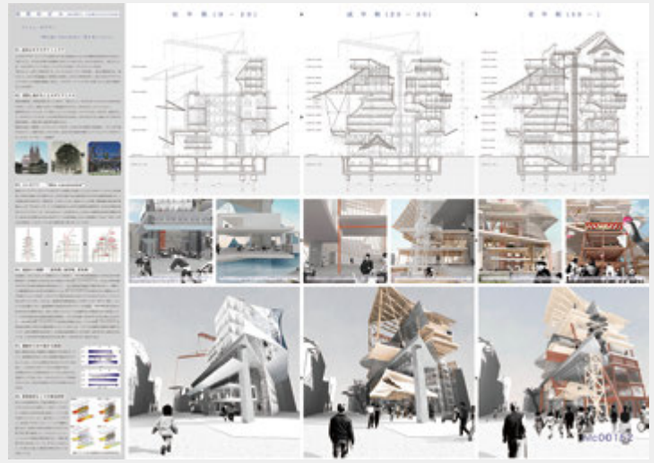
あさくさの灯

●審査員
隈 研吾 / 伊香賀 俊治 / 亀井 忠夫 / 根本 祐二 / 畠中克弘 / 吉留 学

第4回ヒューリック学生アイデアコンペ | 優秀賞

大村高広　堀越一希　木村友美

浅草のビル（under construction）



●審査員
隈 研吾 / 伊香賀 俊治 / 亀井 忠夫 / 根本 祐二 / 吉留 学

第6回ＪＰＭ “夢の賃貸住宅”学生コンテスト | グランプリ

兼本祐輔　三上陽平

柱・ぬりえ

●審査員
齊藤 広子 / 松村 秀一 / 大島 芳彦 / 谷尻 誠

第8回ハーフェレ学生デザインコンペティション2016 | 優秀賞

外川喜裕　三上陽平　林山赳大

揺らめく Sunroom

●審査員
横河 健 / アストリッド・クライン / 五十嵐 淳 / カール・ハーネ

建築デザインの理論と実践
岩岡竜夫研究室
［建築計画・意匠・設計］

Iwaoka Lab.
Architectural Planning and Design

Tatsuo Iwaoka,
Professor

① 2016 年度謝恩会
② 2016 年度ゼミ合宿（福浦ハウス）
③ 2016 年度パリ調査研修（船上レストラン）

すべての建物は「寸法」によってその形や空間が決定されています。建物や空間の寸法（サイズ）は、人々の思考や行動に対してさまざまな影響を与えています。本研究室では、特に建物のスケール（大きさ）やモジュール（単位空間）に関する調査をベースとして、建築物、外部空間、街並、集落、都市空間などに見られるデザインの解読を試みています。そうした調査研究と並行して、住宅を中心とした実際の設計活動を展開し、新しい建築空間の創造に挑戦しています。

2016年度の研究テーマ
- 住宅建築に関する研究および設計
- 建築の構法および素材に関する実践的研究
- 近代建築作品および伝統的集落に関する調査研究

史的連続性のなかで建築を捉える
山名善之研究室
［建築意匠・建築史］

YamanaLab.
Architectural Design and History

Yoshiyuki Yamana,
Professor

① mASEANa Project 2016 2nd International Conference
② DOCOMOMO International Workshop（ポルトガル）
③ゼミ旅行（台湾）

今日の建築デザインを「時間」という継続性の中で捉え、近現代建築、近代計画都市を対象に調査、研究を行っています。それらの文化遺産としての側面の重要性を認識し、保存、活用継承していく方策を立てることを進めています。ユネスコをはじめとする国際機関、ICOMOS（本部・パリ）やdocomomo（本部・リスボン）と連携し、文化遺産保護の原理、方法論、科学技術の応用の研究をしています。文化庁国立近現代建築資料館と連携した近現代建築資料のアーカイブズ化も主要なテーマです。国際的ネットワークの中で調査・研究活動を行い、広い視野の中で、それぞれの対象の固有の「オーセンティシティ」の追求を行い、今日の社会にも開かれた文化的価値を持ち得る「リビング・ヘリテージ」を目指しています。

2016 年度の研究テーマ
- マカオにおけるシェアード・ヘリテージとしての建築文化遺産に関する研究
- A・シザによるシアード再建計画に関する研究
- 計画都市ダラットの形成に関する研究
- 上海華興商業銀行社宅の計画概念に関する研究
- リビング・ヘリテージとしての国立代々木競技場に関する研究
- サンタフェの都市景観における地域性の継承手法に関する研究

三度の飯より、設計が好き!
安原幹研究室
［建築設計］

Yasuhara Lab.
Architectural Design

Motoki Yasuhara,
Associate Professor

①研究室でコンペに参加
②研究室の謝恩会
③ゼミ旅行。「みんなの森 ぎふメディアコスモス」にて

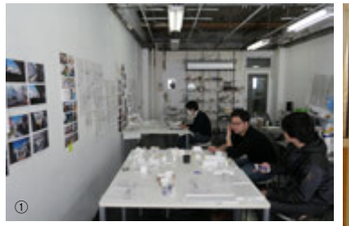
建築設計の役割は、単なる形態のデザインではありません。社会の諸制度、都市空間の仕組み、構造・環境技術などとの関わり合いの中から、これからの社会の変化に対応し、あるいは変化を促進していくような新しい建築空間を構想・提案していくことが求められています。本研究室では、現実の設計過程や地域社会などと関わりながら、可能な限り具体的にそうした探求を進めています。

2016 年度の研究テーマ
- 現代木造建築の多様化とその系譜
- 王澍の建築に見られる「空間の風景化」の手法
- 現代の仕上げ材のオーセンティシティに関する研究

人間の行動から観察される空間のささやき
垣野義典研究室
［建築計画］

Kakino Lab./ Architectural Planning

Yoshinori Kakino,
Associate Professor



①研究室での設計活動は壁を有効に用います
②オランダでのフィールドワーク
③東京ゲストハウスでの実測調査

建築計画は、人が空間をどう使うかを研究し、その結果を設計に活かしていくことを特徴とします。人は建築の「ささやき」に感応しながら生きています。「静かで小さな部屋にいると落ち着く」というのも、感応の一種です。その「ささやき」は人の生活を安定させるとても根源的なことだけれど、あまりに当たり前で普段は認識されないこともあります。だから人の行動を調べ観察するなかで、建築が発している普段気づかない「ささやき」を顕在化させたいと思います。そして、そこから生まれる設計理論によって新たな建築を提案していきます。

2016 年度の研究テーマ
- ランドスケープ化されたオランダの playground に関する研究――利用者の行動様態から見た設計手法
- ICT を活用した小学校における学習空間の計画――フィンランドの先進事例を対象として
- 学校建築の収納計画に関する研究――先進的オープンプラン型事例を対象として
- 津波避難タワーの日常的価値――南海トラフ大地震の被災エリアにおける津波避難対策に関連して
- 大地震発災にともなう避難生活の変遷――熊本大地震における避難者の避難所外生活を中心として

都市への好奇心と創造性を培う
伊藤香織研究室
［都市計画］

Ito Lab.
Urban Planning

Kaori Ito,
Professor
写真：©Yosuke Suzuki

①ウランバートルでの調査
②タイから来たのニラモン先生のワークショップ
③卒業生も参加する新年会
④研究室の改装

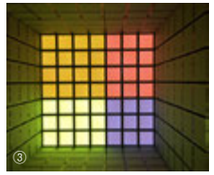
2016 年度の研究テーマ
- 景観と地域愛着
- SNS 投稿にみる訪日外国人観光客の行動特性
- 民泊ホストの意識と住環境の変容
- 北タイ山岳民族の住居にみられる都市化の影響

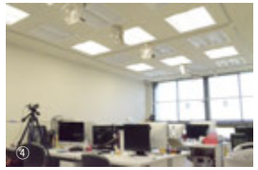
世界の都市人口は全人口の半数に達し、今も増え続けています。一方、先進国では縮小する都市が増えています。人々の幸福とサスティナブルな社会の実現のために、都市がうまく機能していくようデザインする必要があります。本研究室は、調査・分析を通して都市の性質を捉え、デザインを通して都市の在り方を提案します。対象は、都市圏のような広域スケールからストリートファニチャのようなヒューマンスケールまで、インフラ整備のようなハード面から都市ブランディング戦略のようなソフト面まで、広範にわたります。

照明よ、大志を抱け
吉澤望研究室
［建築光環境・照明環境］

Yoshizawa Lab.
Building Environmental Engineering

Nozomu Yoshizawa,
Professor





①合同ゼミ合宿写真
②長野県小布施町で、照明ワークショップ
③有機 EL 照明実験模型
④吉澤研内でオフィス照明の実験

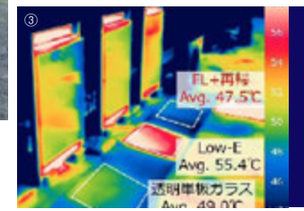
2016 年度の研究テーマ
- 美術館や展示空間の照明手法の研究
- オフィスにおける新しい照明制御手法・評価手法の開発
- 小布施町における国道照明計画立案と視認性評価手法の開発
- 開口部の眺望性・プライバシー性評価手法の開発
- 有彩色照明が健康やストレスに与える影響の検討

建築と光は不可分の関係で、かつては自然光、20世紀に入るとそれに加えて人工照明の扱いが重要なテーマとなってきました。光の量と質をコントロールしていく上では、審美性に加えて視認性・省エネルギー性などさまざまな側面を考慮する必要があります。本研究室では、照明シミュレーションによって光の挙動を求め、その結果から建築空間の見えを予測する手法を、実空間の調査・模型実験などを通して導き出すことを、研究の主な目的としています。

建築環境から未来を見つめる
井上隆研究室
［建築環境・設備］

Inoue Lab.
Building Enviromental Engineering and Facilities

Takashi Inoue,
Professor



①夏合宿シャワークライミング
②再帰反射フィルム性能把握実験（2 号館屋上）
③窓の都市環境への影響比較

2016 年度の研究テーマ
- 建築外皮性能の向上による省エネルギーと快適性の両立
- 新たなガラス・ブラインド仕様・制御による熱と光のコントロール
- 先進的オフィスビルの空調システムの運用実態
- ゼロエネルギーハウス実現のための太陽熱利用暖房・給湯システム
- 住宅におけるエネルギー消費と住まい方

地球環境・都市環境の枠の中で、エネルギー・資源をいかに効率的に活用し快適・健康で知的生産性の高い空間・環境を創るかという研究を行っています。対象は、住宅の一室から超高層ビルなど建築全体、さらに都市や地球環境のスケールまでに及び、実験・数値シミュレーション・調査の各手法を駆使して、研究を進めています。具体的には、省エネルギーと快適性の両立を図る先進的窓システム、建築・住宅の環境負荷削減に関するテーマなどがあります。
2016年度は、修士2年8名、修士1年8名、学部4年5名の計21名が所属していました。
研究するときも、遊ぶ時も、バイタリティにあふれ、たくさんの刺激のもとで活動しています。

地震に屈しない、明日へ
永野正行研究室
［構造力学・地震工学］

Nagano Lab.
Earthquake Engineering

Masayuki Nagano,
Professor
イラスト：肥田剛典

① 井口道男研究室（1971～2007 年度在任）と永野研究室の合同 OBOG 会なるみの会。
② 2016 年熊本地震の被害調査
③建築研究所での天井耐震性能に関する実験

2016 年度の研究テーマ
- 地震時の揺れと体感に関する研究
- 超高層集合住宅を対象としたレジリエンス防災システムの構築
- 震源断層からの地震波伝播と地盤の揺れ
- 木造住宅の耐震性能評価と制震補強
- 自然災害に対する建築構造・非構造の設計に関する研究

東日本大震災では、巨大規模の断層運動に起因して、津波、長周期地震動、液状化等による建物被害が発生しました。大地震時の建物被害の発生パターンは、さまざまな要因が複雑に絡み合います。本研究室では、震源から基礎、建物応答、室内被害、人的被害までの動的プロセスを総合的に評価し、将来の地震被害軽減に向けた研究を進めています。具体的には、断層破壊、地盤内の波動伝播、建物と地盤との動的相互作用、地盤液状化の発生過程、木造住宅の制震工法の開発、超高層建築物の非線形応答、室内環境などの地震工学に関わる幅広い問題を扱っています。

構造設計者を育成するためには…

北村春幸研究室
［建築構造・材料］

Kitamura Lab.
Structural Design

Haruyuki Kitamura,
Professor

①北村研 OB が集う三友会を毎年開催
②電力中央研究所との実験
③ 2016 年度ゼミ合宿（山中湖）

2016 年度の研究テーマ
- 免震・制振構造に関する研究
- 長周期地震動対策に関する研究
- 構造ヘルスモニタリングに関する研究
- 地震動作成手法に関する研究

安心で安全な建物を実現するには、建築構造物の性能設計法の研究・開発が重要になります。本研究室では、さまざまな学協会・大学・企業・研究機関と連携して研究・開発を行っています。具体的には大地震に対する安心安全を目指す「性能設計法」の確立、高い耐震性能を実現する免震・制震構造の「エネルギーの釣合に基づく応答評価法」、長周期地震動や直下型地震などに対して長寿命建築物を目指す「建築物のライフサイクル累計損傷評価設計法」、建物の地震・長期微動観測に基づく「構造ヘルスモニタリング」の研究・開発などです。

都市を守る耐震設計法の開発

衣笠秀行研究室
［建築構造］

Kinugasa Lab.
Structural Engineering

Hideyuki Kinugasa,
Professor

①夏のゼミ合宿
② 2016 年3月の卒業式謝恩会
③第 16 回世界地震工学会議が行われたチリ・サンティアゴ市街(2017年1月)

2016 年度の研究テーマ
- 時間を指標とした地震時損傷評価法の開発
- 機能維持性の観点からの RC 構造の性能評価
- PCaUFC パネル貼り付け耐震補強方法の開発
- ミクロ・マクロの観点からの経済耐震性分析

首都圏直下型地震による莫大な経済損失の発生とそれにより引き起こされる深刻な環境破壊が懸念されています。建築物の耐震性能を、耐震工学だけでなく経済学の面から適切に評価し、必要な性能を確実に確保できる設計法の開発が求められています。本研究室では、次の二つの課題、「大都市東京はどの程度の地震に耐えられるのか?」、「地震に強い都市はどうすれば実現できるか?」を掲げ、耐震工学および経済学の両面から、都市経済を支える建築物の最適設計法についての研究を行っています。

未来の安全を設計する

大宮喜文研究室
［建築防災・安全］

Ohmiya Lab.
Building Safety Engineering

Yoshifumi Ohmiya,
Professor

① 2016 年度ゼミ合宿・諏訪湖畔公園
② 2016 年度 送別会後の記念撮影・日暮里の消防署前
③東京理科大学の大宮研究室と千葉大学の平島研究室との合同研究発表会・森戸記念館

2016 年度の研究テーマ
- 群集歩行性状に関する研究
- 建築物の煙制御システムに関する研究
- 初期火災時の視覚的異変感知に関する研究
- リスク概念に基づく建築火災安全総合評価手法に関する研究
- 散水設備を考慮した可燃性材料の燃焼性に関する研究

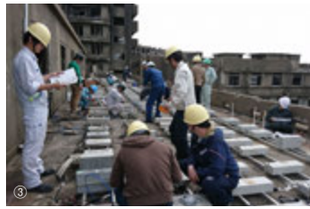
阪神淡路大震災や東日本大震災では、多くの大規模な火災が発生しました。また近年、建築物が大規模、大深度化、超高層化し、新たな空間の創出に伴う火災の危険性が危惧されています。本研究室では、このような災害による被害の防止、低減のために研究を進めています。例えば、コンピュータによる火災現象や人間挙動の再現・予測技術の開発、環境心理的な視点からの異変感知特性の検証、統計資料や実地調査資料から被害低減への計画策定、実務的な防災設計法の体系化などを進めています。

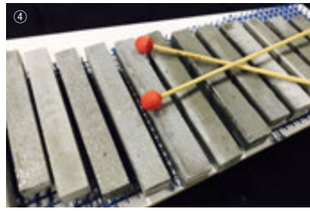
建築材料学的視点で建築を見よう!

兼松学研究室
［建築構造・材料］

Kanematsu Lab.
Building Material Engineering

Manabu Kenematsu,
Professor





①研究室懇親会
②ゼミ旅行にて採石場見学
③軍艦島における調査の様子
④コンクリートで作った楽器（JCI キング・オブ・コンクリート 2017 出展作品）

2016 年度の研究テーマ
- RC 造建築物の維持保全・補修改修・耐久設計に関する研究
- 近代 RC 造建築物に関する調査研究
- 大型量子ビーム利用施設による建築材料のマイクロメカニクスの解明
- 環境配慮型コンクリートに関する研究
- 局所劣化外力に関する研究
- 建築外装材料の性能評価に関する研究

日本の高度成長の原動力となった建築物は、現在その多くが維持更新の時期を迎えつつあり、いかにそれらをメンテナンスし耐久性を高め、かつ環境に配慮しながら持続再生していくかが大きな課題となっています。本研究室では、建築物の耐久性を精緻に予測するシミュレーション技術や、その維持管理戦略に関する研究に加え、21世紀の大きなテーマである建築物の環境側面に関する問題について、建築材料学的視点から研究しています。建築材料学は社会のさまざまな分野に通ずる守備範囲の広い学問です。

UNGA BOOK 2016
東京理科大学理工学部
建築学科設計作品集 2016

Design Work of Department of Architecture
Faculty of Science and Technology
Tokyo University of Science

発行日
2017 年 7 月 31 日

発行
東京理科大学理工学部建築学科
〒 278-8501　千葉県野田市山崎 2641
tel : 04-7122-9417
fax: 04-7125-7533
URL：
http://www.ar.noda.tus.ac.jp/

編集委員
岩岡竜夫　伊藤香織　安原 幹
バージェス アンドリュー
有井淳生　柄沢祐輔

編集協力（**学生｜伊藤香織研究室**）
植木規喬　大家弘也
落合みずほ　柴田史奈

企画編集
有岡三恵（Studio SETO）

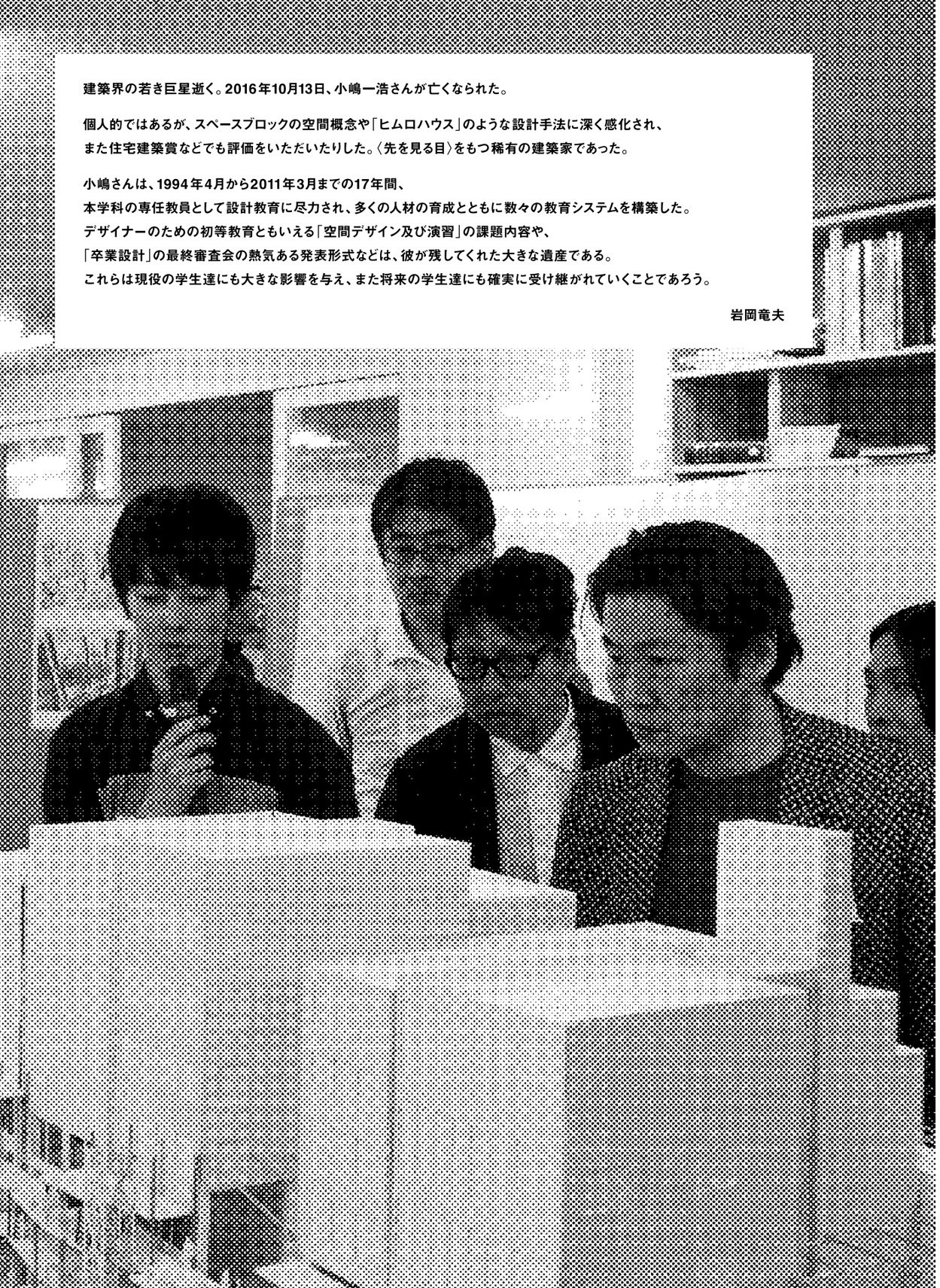
カバーデザイン／デザインフォーマット
加藤賢策（LABORATORIES）
奥田奈保子（LABORATORIES）

表紙写真・図面
堀越一希（修士設計最優秀）

英訳　Thomas Donahue

建築界の若き巨星逝く。2016年10月13日、小嶋一浩さんが亡くなられた。

個人的ではあるが、スペースブロックの空間概念や「ヒムロハウス」のような設計手法に深く感化され、
また住宅建築賞などでも評価をいただいたりした。〈先を見る目〉をもつ稀有の建築家であった。

小嶋さんは、1994年4月から2011年3月までの17年間、
本学科の専任教員として設計教育に尽力され、多くの人材の育成とともに数々の教育システムを構築した。
デザイナーのための初等教育ともいえる「空間デザイン及び演習」の課題内容や、
「卒業設計」の最終審査会の熱気ある発表形式などは、彼が残してくれた大きな遺産である。
これらは現役の学生達にも大きな影響を与え、また将来の学生達にも確実に受け継がれていくことであろう。

岩岡竜夫